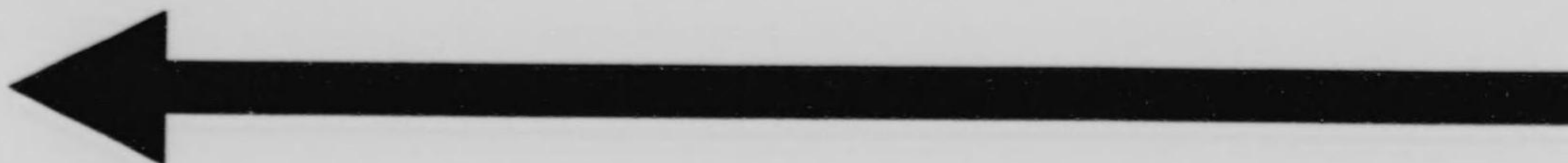


379
12

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25

始



379-12



國譯禪宗叢書

第貳卷

天正
10 8.25
内交

國譯禪宗叢書第二卷凡例

一、本叢書第二卷に收載する所の書は、林間錄(二卷)羅湖野錄(二卷)靈源筆語(一卷)禪關策進(四卷)の四部九卷なり。以上の書中、禪關策進を除くの外は、是亦古來より、禪門七部の書の中に加へられ、而して禪關策進は、徳川時代に入りて、白隱禪師の法嗣、東嶺和尚の之を愛誦して以來、叢林の學徒、悉く之を讀まざる者なく、今猶ほ盛行せり。

一、以上四部の書は、皆支那古尊宿の撰述にして、殊に洪覺範の林間錄は、古來より學者に愛誦せらるゝこと頗る久し。従つて四部の中、林間錄、羅湖野錄、靈源筆語の三書は、足利時代に印行せられて、夙に叢林に流傳せり。今次國譯に際しては、徳川時

代の印本に據り、且つ毎卷末の原文も、亦之を用ひたり。
 一、本輯收載の四部の書中、脚注に精粗の不同あり、是は國譯者の各別と、古來より事苑の存否によりて、勢ひ止むを得ざるがためなり。

大正八年八月

編者識す

國譯禪宗叢書 第二卷

目次

國譯石門洪覺範林間錄解題	一——二
國譯石門洪覺範林間錄	一——一六八
石門洪覺範林間錄原文	一——九二
國譯羅湖野錄解題	一
國譯羅湖野錄	一——一八
羅湖野錄原文	一——五六

國譯靈源和尚筆語解題	1
國譯靈源和尚筆語	1
靈源和尚筆語原文	1
國譯禪關策進解題	1
國譯禪關策進	1
禪關策進原文	1

國譯石門洪覺範林間錄

解題

林間錄は宋の寂音尊者の撰述する所にして、外に尊者の著述に、禪林僧寶傳、石門文字禪等あり、此の書と並び行はれて古來より叢林學徒の間に愛誦せらる。

尊者名は德洪、姓は彭氏、字は覺範、初の名を慧洪と云ふ。高安の人、十三歳にして出家し、三峰靜禪師に依りて禪を習ひ、宣秘律師に依つて俱舍唯識等を學ぶ。又博く子史を觀て異才あり、詩を以て京師の間に鳴る。後に江寧府の清涼寺に住す、狂僧のために誣告せられて罪に抵さる。後に張丞相の時に至りまた度を受けて僧となり、名を德洪と改む。詔ありて號を寶覺圓明と賜ふ、自ら寂音尊者と稱す。後に尙書郎趙賜の事に會ふて海南島上に竄せられ、三年にして赦されて僧籍に還らんと欲し、果さずして歿す。時に高宗の建炎二年五月なり。世壽五十八、僧臘三十九。其の著述、本書の外に僧寶傳三十卷、高僧傳十二卷、智證傳十卷、志林十卷、冷齋夜話十卷、天厨禁樹一卷、石門文字禪三十卷、語錄偈頌一編、法華合論七卷、楞嚴尊頂義十卷、圓覺證義二卷、金剛法源論一卷、起信論義解二卷、甘露集三十卷あり、並びに世に行はる。尊者は法を寶峰文禪師に嗣ぐ。其の傳載せて

普燈錄(第七)、五燈會元(第十)、佛祖通載(第十)、稽古略(第四)、續傳燈錄(第二十)、續僧寶傳(第二)、禪宗正脈(第十)、佛祖綱目(第十)、指月錄(第二十)、教外別傳(第九)、五燈嚴統(第十)等にあり。

國譯石門洪覺範林間錄序

臨川謝逸撰

① 洪覺範、自在三昧を、雲庵老人に得たり。故に能く、翰墨場中に游戲し、呻吟、警歎、皆文章を成す。毎に林間の勝士と、掌を抵つて清談するに、尊宿の高行叢林の遺訓、諸佛菩薩の微旨、賢士大夫の餘論に非ざることを莫し。一事を得る毎に、随つて即ち之を録す、十年の間に、垂として三百餘事を得たり。其の游に従ふ者、本明上人、外簡卒なるが若くにして内甚だ精敏なり、燕坐の暇、其の録する所を以て拆ちて上下秩と爲し、之を林間録と曰ふ。② 其の録する所先後あるに因るが故に、古今を以て詮次を爲さず、談笑に得て勉強に出づるに非ず、故に其の文優游平易にして艱難險阻の態なし、人皆明の是の録有るを知るや、至る所の地借り觀る者市を成す。明、字畫の漫滅して傳寫眞を失はんことを懼る、是に於て之を板に刻む。而して余に序を爲り以て後世に壽せしむ。余謂らく、斯の文の

國譯石門洪覺範林間錄 序

① 洪覺範、寂尊者、非常に文章の達者にして僧寶傳、僧史、石門文字禪等を著す。清涼は瑯州に在り。洪覺範の法系は、黃龍慧南——雲庵眞淨克——清涼覺範(惠洪)——洪堂文準——兜率從悅——張商英——荆公王安石——雲庵、眞淨、克文和尚。② 翰墨場中、詩文學。③ 警歎、人に面會するを云ふ。④ 儉歲、凶年。⑤ 寒年、じこうさむくて。

作、宗教に補有ること、^①儉歲の梁稷、^②寒年の繪續の如し。豊余が序を待つて然して後に傳はらんや、斯の文に託して以て不朽に傳へんことを願ふ、此れ余が默せんと欲して能はざる所以なり。昔樂廣、清言を善くして筆に長せず、潘岳に請ふて表を爲らしむ。先づ二百語を作して以て己の志を述べ。岳取りて之を次比し、便ち名筆を成す。時の人咸云ふ、「若し廣、岳の筆を假らず、岳、廣が旨を假らざれば、以て斯の美を成すこと無きなり」と。今覺範口の談する所、筆の録する所、二子の美を兼有するは何ぞ哉。大抵文士妙思有る者は未だ必ずしも美才有らず、美才有る者は未だ必ずしも妙思有らず。惟道を體むるの士、見亡し執謝して、定亂兩ながら融し、心明鏡の如く、物に遇ふて便ち了す。故に口を縦にして談じ、筆に信せて書す、適として真ならざること無きなり。然らば則ち覺範、二子の美を兼ねる所以は、道を體めて然るに非ざることを得ん耶。余是を以て知る、士、道を知らずんばある可らざることを。覺範名は慧洪、筠陽の人、今臨川の北景德禪寺に住す。蓋し顯謨閣待制朱公の請に赴くと云ふ。^③大觀元年十一月一日序す。

①繪續。きのとわた。
②大觀。北宋徽宗の年號。日本堀川天皇の嘉承三年に當る。

國譯石門洪覺範林間錄卷上

杭州興教の^①小壽禪師、初め天台の詔國師に隨ふ、^②普請するとき、^③墮薪を聞いて悟る。偈を作して曰く、「撲落^④非他物。縱横^⑤不^⑥是塵。山河及大地。全露^⑦法王身^⑧。」と。國師之を頷くのみ。^⑨開法に及び、^⑩衲子争ふて之を師尊す。御史中丞王公隨、出でて錢塘を鎮す、往いて壽を候ふ。湖上に至りて、^⑪驕從を去け、^⑫獨歩して、^⑬寢室に登る。壽方に暄を負ひ、衣を^⑭毳して自若たり。忽ち之を見て問うて曰く、「官人何の姓ぞ。」王公曰く、「隨が姓は王」と。即ち之を拜す。壽蒲團を推し、地に籍いて坐せしむ。語笑日を終へて去る。門人壽を見て之を讓めて曰く、「彼の王臣來る、奈何ぞ禮を爲さざる、此れ一衆の係る所なり、細事に非ざるなり」と。壽^⑮唯唯す。他日王公復た至る、寺衆横に大鐘を撞き、^⑯萬指出で迎ふ。而して壽前み趨りて松下に立つ、王公望み見て輿を出で、其の手を握りて曰く、「何ぞ前日の相見の如くせずして、遽かに此の禮數を爲す耶」と。壽左右を顧み、且つ行き且つ言つて曰く、「中丞は即ち得た

①小壽。永明の壽禪師、天台の詔に嗣ぐ。
②普請とは、普く大衆を請じて作務するを謂ふ。
③墮薪。しばのおちるおと。
④撲落。ぶちおちるもの。
⑤縱横。自己具足底のもの。
⑥法王身。一山に住持し、法道を開敷するを謂ふ。
⑦驕從。はしりしたがふ、驕士にたどる。
⑧寢室。方丈を謂ふ、即ち住持の居所。
⑨毳。細毛衲なり、今活字に用ふ、常服なり。やはらかき毛

り、知事の瞋を奈何せん」と。其の天資粹美なること此の如し、眞の本色住山の人なり。

① 白雲端禪師、逸氣あり、少くして湘中に遊ぶ、時に會禪師、新に楊岐より來りて雲蓋に居る。一見して心に之を奇とす、與に語りて毎に夕を終ふ。會忽ち問て曰く、「上人落髮の師を誰とかする。」對て曰く、「茶陵の郁和尚。」會曰く、「吾聞く、其れ溪を過ぎ省有り、偈を作ること甚だ奇なりと。能く之を記するや否や。」端即ち誦して曰く、「我有二神珠一顆。久被塵勞關鎖。今朝塵盡光生。照破山河萬朵。」會大いに笑つて去る、端愕然たり。左右を視て、通夕寐ねず、明日入室を求めて、其の事を咨詢す、時方に歲旦なり。會曰く、「汝昨日夜狐を作す者を見るや。」對へて曰く、「之を見る。」會曰く、「汝一籌渠に及ばず。」端又大いに駭きて曰く、「何の謂ぞや。」會曰く、「渠は人の笑を愛す、汝は人の笑を怕る。」端因つて言下に大悟す。

魏府の老、元華嚴、衆に示して曰く、「佛法は日用の處に在り、行住坐臥の處、喫茶喫餅の處、語言相問の處、所作所爲に在り、心を擧し念を動すれば、又却つて不是なり。」又曰く、「時缺減に當りて、人壽六七十に登る者有ること少し。汝輩我が法中に入り、手脚を整頓すること未だ穩かな

- おりもの。
- 唯唯。よしよし承知した。
- 萬指。千人。
- 白雲端。楊岐に嗣ぐ。
- 會。方會。
- 茶。以遮の切。
- 夜狐。五燈會元には、龍鬼に作る。「おにやらい」なり。
- 鉢。飯と同じ。
- 爲の字の下。本文「處」の字を脱するならん。

らざるに、早く是れ三四年、須臾にして衰病至る、衰病至らば則ち老至る、老至らば則ち死至る。前に去ること幾何ぞ、尙ほ復意を恣にす。何ぞ初中後夜純靜にし去らざる」と。文潞公北京を鎮す、元公來り謁して別る。潞公曰く、「法師老いたり矣、復た何くに往く。」對へて曰く、「入滅し去らん。」潞公笑つて謂り、其れ戲語なりと。之を目送して歸らしむ。子弟と與に言ふ、「其の道韻深穩にして、談笑味有り、非常の僧なり」と。人をして之を候はしむるに、果して入滅す矣。大いに驚き嘆異之を久しうす。閻維に及び、親しく往いて臨觀す。瑠璃餅を以て坐前に置き、祝して曰く、「佛法果して靈あらば、願はくは、舍利吾餅に填ちよ」と。言ひ卒つて、烟空よりして降りて、瓶中に布き入る。烟滅えて舍利所願の如し。潞公是より誠を内典に竭し、之を知るの暮きを恨む。

棲賢の禪師は、建陽の人なり、百丈の常和尚に嗣ぐ、性高簡にして身を律すること精嚴なり。動くに法度を遺れず、暮年に三たび藏經を終ふ。坐ながら閱するを以て、未だ敬せずと爲して、則ち立ちて誦し行いて之を披く。黃龍の南禪師、初め游方の時、少うして之に従ひ、年を累ぬ。故に其の平生の所爲、多く法を取る。嘗て曰く、「棲賢和尚、定めて天人の中より來る、叢林の標表なり」と。雪竇の顯禪師、嘗て淮山より來り之に依る、不合にして、乃ち獅子峰の詩を作りて去る。曰く、「踞地盤空勢未休。爪牙安肯混泥常流。天教三生在二千峰上。

- 深穩。ゆるやか。
- 閻維。火葬のこと。
- 百丈常。百丈山の常禪師。
- 藏經。一切經律論。
- 黃龍南。初め積翠にあり後、黃龍に移る。

不得云擊一也出頭。」

李肇の國史補に曰く、「崔趙公、徑山の道人。法欽に問ふ、「弟子出家すること得んや否や。」欽曰く、「出家は大丈夫の事なり、將相の爲す所に非ず。」趙公其の言を嘆賞す。」^① 贊寧、欽の傳を作る。無慮千言、一の曉を報する難死すと雖も、且つ之を書す。乃ち此に及ばざるは何ぞや。」

大覺禪師璉公、道徳を以て、仁廟の爲に敬せらる。天下風采を想望す。其の居處服玩、以て寶坊に化す可し。而も皆爲さず、獨り都城の西に於て、精舎を爲して、百許の人を容るるのみ。棲賢の舜老夫、郡吏の臨むに事を以てし、其の衣を民にするが爲に、走りて璉に依る。璉正寢に館し、自ら偏室に處り、弟子の禮を執りて甚だ恭し、王公貴人、來り候ふ者皆之を恠む。璉具に實を以て對ふ。且つ曰く、「吾少くして、嘗て道を舜に問ふ、今當に像服の殊なるを以て、吾が心を二にす可からざるなり」と。聞く者嘆服す。仁廟之を知り、舜に再び落髮を賜ひ、仍つて栖賢に居らしむ。

唐の宣宗、微なりし時、武宗其の賢を疾み、數々之を殺さんと欲す。官者仇公武、之を保佑す。事公武に迫る、爲に髮を薙つて比丘と作し、逸遊せしむ。故に天下の名山、登賞する所多し。杭州の鹽官に至る、禪師安公は、江西馬祖の高弟なり。一見して之を異とし、待遇特に厚し。故に宣宗、鹽官

① 徑山。支那の禪宗五山の一。
② 法欽。國一、徑山の開山。
③ 贊寧。宋の僧録。
④ 大覺。璉は懷璉、銑顯に見ゆ。
⑤ 仁廟。宋の仁宗。
⑥ 舜老夫。傳未詳。

に留ること最も久し。位に即くに及び、之を見んことを思ふ、而も安公化し去りて久し矣。是より先、武宗盡く吾が教を毀る。是に至りて之を復興す、法の隆替時に系ると雖も、然れども詎を庸つてか其の力安公の之を致すに非ざるを知らん耶。仇公武の徳、漢の邴吉に愧ぢず、而も新書に之を略す。獨り班班として、安禪師の傳に見えたり、嘆す可しと爲す。嘗て其の像に贊する者あり、曰く、「已將三世界等微塵。空裏浮華夢裏身。勿謂龍顏便分別。故應天眼識天人。」^① 贊寧、大宋高僧傳を作るに、十科を用つて品流を爲し、義學を以て之に冠す。已に笑ふ可し。又巖頭の豁禪師を苦行と爲し、智覺の壽禪師を興福と爲す。雲門大師は僧中の王なり、之と同時なり、竟に載せざるは何ぞや。

長沙岑禪師、僧の亡するに因り、手を以て之を摩でて曰く、「大衆、此の僧却つて眞實諸人の爲に、提綱商量す、會す麼。」乃ち偈あり、曰く、「目前無一法。當處亦無人。蕩蕩金剛體。非妄亦非眞。」又曰く、「不識金剛體。却喚作緣生。十方眞寂滅。誰在復誰行。」雪峰和尚亦因に亡僧を見て、偈を作りて曰く、「低頭不見地。仰面不見天。欲識金剛體。但看觸骸前。」玄沙曰く、「亡僧面前、正に是れ觸目の苦」

① 班班。十分のこと、明著のこと。
② 十科。僧預十科、翻譯、解義、習禪、明律、感通、遺身、讀誦、護法、輿輪、雜科。
③ 長沙岑。前に注す。
④ 亡僧。平僧の死を云ふ。
⑤ 玄沙。師偈。
⑥ 法眼。文益。
⑦ 尊宿。高僧方を云ふ。
⑧ 晦堂。黃龍南に嗣ぐ、祖心と云ふ。
⑨ 圓寂。尊宿の死を云ふ、和尙

提、萬里神光、頂後の相。僧あり。法眼に問ふ、「如何なるか是れ亡僧面前觸目の菩提。」答へて曰く、「是れ汝が面前。」又問ふ、「遷化して什麼の處に向つて去る。」答へて曰く、「亡僧幾か曾て遷化する。」進んで曰く、「即今を争奈何せん。」答へて曰く、「汝亡僧を識らず」と。近代の尊宿、復た此の旨を以て人を曉さず、獨り晦堂老師、時に一たび提起して、南禪師圓寂の日の偈を作りて曰く、「去年三月十有七。一夜春風撼三壽室。三角麒麟入海中。空餘二片月波心。出真不掩偽。曲不藏直。誰人爲和雪中吟。萬古知音是今日。」又曰く、「昔人去時是今日。今日依前人不來。今既不來昔不往。白雲流水空悠悠。誰云秤尺平。直中還有曲。誰云物理齊。種麻還得粟。可憐馳逐天下人。六六元來三十六。」と。

⑤ 雲蓋智。黃龍南に嗣ぐ。

南禪師、積翠に居りし時、佛手、驢脚、生縁の語を以て學者に問ふ、答ふる者甚だ多し。南公冥日して定に入るが如くし、未だ嘗て之を可否せず。學者趨り出でて、竟に其の是非を知ること莫し。故に天下之を三關の語と謂ふ。晩年に自ら偈三首を作る、今只其の二を記す。曰く、「我手佛手齊舉。禪流直下薦取。不レ動三千戈一道處。自然超佛越祖。」我脚驢脚並行。步步皆契無生。直待雲開日現。此道方得從横。」雲蓋の智禪師、嘗て子が爲に言つて曰く、「昔日再び黃檗に入り、坊塘に至る、一僧の山中より來るを見て、因みに問ふ、「三關の語、兄弟近日如何か商量する。」僧曰く、「語あり、甚

だ妙なり、以て意を見る可し。」我が手何ぞ佛手に似たる。曰く、「月下に琵琶を弄す。」或は曰く、「遠道に空鉢を撃ぐ、我が脚何ぞ驢脚に似たる。曰く、「驚鷺雪に立つ同色に非ず。」或は曰く、「空山落花を踏む、如何なるか是れ、汝が生縁の處。」曰く、「某甲は某處の人」と。時に之に戯れて曰く、「前塗に人有り、上座に如何なるか是れ佛手、驢脚、生縁の意旨と問はば、汝、遠道に空鉢を撃ぐを將つて之に對へん耶、鷺鷥雪に立つ同色に非ざるを以て之に對へん耶、若し俱に將つて對ふれば、佛法混濫す。若し揀擇して對ふれば、則ち機事偏枯なり。」と。其の僧直視して言ふ所無し。吾れ謂つて曰く、「雪峰道ふ底。」

① 上座。平僧を敬して云ふ。
 ② 後。道。
 ③ 夾山。義會、船子に嗣ぐ、藥山三世。
 ④ 隱座。大殿の高座にのぼりて說法する。
 ⑤ 道智。宗智、藥山に嗣ぐ。
 ⑥ 復子。僧の荷もつ。
 ⑦ 船子。道智智に嗣ぐ、藥山三世。

夾山の會禪師、初め京口の竹林寺に住す。隱座するとき、僧問ふ、「如何なるか是れ法身。」答へて曰く、「法身無相。」如何なるか是れ法眼。答へて曰く、「法眼瑕無し」と。時に道吾衆中に笑ふ。會遙かに見て、因に座を下り、問うて曰く、「上座適に笑ふ、何事をか笑ふ耶。」道吾曰く、「和尚の一等に行脚して、複子を放つに所在を著ざるを笑ふ。」會曰く、「能く我が爲に説かんとや否や。」對へて曰く、「我れ説くことを會せず、秀州の華亭に船子和尙有り、往いて之に見ゆ可し。」會因つて衆を散じて往く。船子問うて曰く、「大德、近く何れの寺に住せし。」對へて曰く、「寺は則ち住せず、住すれば則ち寺ならず。」船子曰く、「寺ならざれば、箇の什麼に似たる。」對へて曰く、「是れ目前の法にあらず。」船

子曰く、「何れの處にか學得し來る。對へて曰く、「耳目の到る處にあらず。船子笑つて曰く、「一句合頭
の語、萬劫の繫驢概」と。嗟乎今の叢林に於て、師、弟子に授くるに、例して皆悟解を禁絶し、玄
妙を推去して、唯々直問直答を要す。無なれば則ち始終無と言ひ、有なれば則ち始終有と言ふ。毫末
も差誤すれば、之を狂解と謂ふ。船子をして之を聞かしめば、豈止々萬劫の繫驢概而已ならん哉。此
に由りて之を觀れば、特に善く悟らざるのみに非ず、要は亦善く疑はざるなり。善く疑ふ者は必ず思
はん、^①三十三祖、授法の際、悟道の縁、其の語言具に在り、皆理を以て究め、智を以て知る可し。
獨り江西、石頭より而下、諸大宗師、機用を以て物に應ず。其の問答を觀るに、^②溟滓然として人
をして坐睡せしむ。其の道諸祖に異なる耶。則ち其の法を嗣ぐ、其れ異な
らす耶。則ち言ふ所、乃ち爾く同じからず、故に知んぬ、臨濟大師曰く、
「大凡そ宗乘を舉論するには、須らく一句中に三玄を具し、一言中に三
要を具すべし。玄有り要有るは、蓋し此を明かすなり」と。知らざる者は、
指して門庭の建立、權時の語言と爲す、悲む可きなり。

天衣の懷禪師、淮山に說法す、三たび法席を易ふ。學者追崇して、道
顯著す矣。然れども猶ほ未だ敢て名字を雪竇に通せず、雪竇已に之を
奇とす、僧其の語を誦すること有り、譬へば、雁長空を過ぎて、影寒水に

- ① 繫驢概。迷の根本。
- ② 三十三祖。西天四七、唐土二
- ③ 三の祖師方。
- ④ 江西。馬祖道一、南嶽に嗣ぐ。
- ⑤ 石頭。希遷、青原に嗣ぐ。
- ⑥ 機用。大機、大用。
- ⑦ 溟滓。混沌なり。
- ⑧ 天衣。懷。雪竇に嗣ぐ。
- ⑨ 顯著。あらはれる。
- ⑩ 雪竇。重顯、智門に嗣ぐ、靈門派。

沈む。雁に遺蹤の意無く、水に沈影の心無きが如しと曰ふに至り、^①脾を搏つて嘆息す。即ち人をし
て之を慰せしむ。懷乃ち敢て一通の狀、起居を問ふ而已。^②滄山の真如禪師、真點胸に従ひ遊ぶこと
最も久し、叢林戸に之を知る。然れども客に對し、未だ嘗て其の平昔見聞の事に及ばず、圓寂の日
に至り、畫像を展べて、但茶果を薦むる而已。二大老、識度甚だ遠し、退いて涼薄に託し、以て後
學に諷す。善く其の師を推尊する者と謂ふ可きなり。

雲庵和尚、洞山に居る時、僧問ふ、「華嚴論に云く、「無明住地煩惱を以て、便ち一切諸佛の不動
智と爲す、一切衆生皆之有り、只智體無性無依なるが爲に、自了すること能はず、緣に會ふて方に
了す」と。且く無明住地煩惱、如何か便ち諸佛の不動智と成る、理極深玄、絶えて曉達し難し。雲庵
曰く、「此れ最も分明なり、了解す可きこと易し。時に童子ありて、方に掃
除す、之を呼べば首を回らす。雲庵指さして曰く、「是れ不動智にあらず
や。却つて問ふ、「如何なるか是れ汝の佛性。童子左右に視て、惘然として
去る。雲庵曰く、「是れ住地煩惱にあらずや、若し能く之を了せば、即今成
佛せん」と。又嘗て講師に問うて曰く、「火災起る時、山河大地、皆焚盡せ
られて、世間空虛なりと、是なりや否や。對へて曰く、「教に明文有り、
安んぞ是ならざるの理有らん。雲庵曰く、「如許多の灰燼、何れの處にか

- ① 脾。もと。
- ② 滄山。真如。
- ③ 風。ひらく也。
- ④ 諷。誦なり、あててとききかす。
- ⑤ 華嚴論。李長者の合論。
- ⑥ 教。經文。
- ⑦ 將置。もちおく。
- ⑧ 乾笑。無理に笑ふこと。

將置せん。講師舌大いにして、乾笑して曰く、「知らず。」雲庵亦大いに笑つて曰く、「汝が講する所の者は、紙上の語耳。」^①其の樂説無礙の辯、答ふれば則ち人の意表に出で、問へば則ち學者氣を喪す。蓋し無師自然の智、世智の當る可きに非ず。真に一代法施の主なり。

二祖大師、服勤して年を累ぬ、雪に立ち臂を断つに至る。而も達磨、僅かに一言を以て之に語るのみ。^②牛頭の懶融、窮山に枯禪す。初め聞くこと有るに意無し、而も四祖、自ら往いて説法す。祖師の師弟子の際に於ける、其れ必ず旨有る耶。

楊文公の談苑記、沙門寶誌の銅牌記、未來の事を識す。云く、「一の真人あり、冀川に在り、口を開き、弓を張りて左邊に在り、子孫孫、萬萬年と。江南の中主、其の子に名づけて、弘冀と曰ふ。吳越の錢鏐、諸子に皆弘の字を連ねて、以て之に應ふることを期す。而して宣祖の諱、正に之に當れり。」又記す、「周の世宗、悉く銅像を毀つて、錢を鑄て、宰相に謂ふて曰く、「佛敎は以て謂ふ、頭目髓腦も、衆生に利すること有らば、尙ほ惜む所無し、寧ぞ復た銅像を以て愛まん乎」と。銅州の大慈、甚だ靈なり、當に撃ち毀るべくして、斧を以て其の胸を撃ち、之を錢破す。太祖親しく其の事を見る、後に世宗北に征し、疽を病んで胸間に發す。咸其の報應と謂ふ、太祖因つて釋敎を信重す。」^③歐

① 其の樂説。これより雲庵の、と。
② 二祖。惠可、達磨に嗣ぐ。
③ 牛頭。懶融の住山、融は四祖の嗣。
④ 枯禪。ひとりざせん。
⑤ 寶誌。梁の高僧。
⑥ 宣祖。文宗の子、懿宗帝の父王也。
⑦ 錢。のみ。
⑧ 歐陽文忠公。修。

陽文忠公が歸田録の首に記す、「太祖初め相國寺に幸し、僧録贊寧に問ふ、「佛を拜す可きや否や。」寧奏して曰く、「拜せざれ。」其の故を問ふ。寧曰く、「見在の佛、過去の佛を拜せず。」と。因つて以て定制と爲す。」二公の記する所、皆深意有り、決して苟も然るに非ず。予聞く、「君子は人の與に善を爲すことを樂む、善と雖も、善ならざれば、之を矜ると謂ふ。文忠公、毎に心を平かにするの難たることを恨む」と。豈真に然る耶。

唐僧元曉は、海東の人なり、初め海に航して至る。將に道を名山に訪はんとす、獨り荒陂に行き、夜塚間に宿す。渴すること甚し、手を引べて、水を穴中に掬し、泉の甘涼なるを得たり。黎明に之を視れば濁體なり。大いに之を惡み、盡く嘔き去らんと欲す。忽ち猛省して、嘆じて曰く、「心生すれば種種の法生じ、心滅すれば濁體不二なり。如來大師曰く、「三界唯心」と。豈我れを欺かん哉」と。

① 贊寧。宋の高僧、僧録司。
② 圓頓。天台をさして云ふ。
③ 樂廣。客孟の云云の故事。
④ 大經。華嚴經。

遂に復た師を求めず。即日海東に還り、大いに圓頓の敎を弘む。予其の傳を讀んで此に至り、晉の樂廣、酒盃蛇影の事を追念して、偈を作りて曰く、「夜塚濁體元是水。客孟弓影竟非蛇。箇中無レ地レ容ニ生滅。笑把ニ遺編一篆縷斜。」
棗柏大士、清涼國師、皆大經を弘む、疏論を造りて、天下に宗たり。然れども、二公の制行皆同じからず。棗柏は則ち跣にして行ひて滯らず、超放自如なり、事事無礙を以て心に行ふ。清涼は則ち

精嚴玉立して、五色の糞を畏れ、十願を以て身を律す。評する者、多く棗柏の坦宕を喜んで、清涼の縛束を笑ひ、華嚴宗、宜しく爾るべき所に非ずと意へり。予曰く、「是れ大いに然らず、棗柏をして、薙髮して比丘と作らしめば、未だ必ず清涼の行を爲さずんばあらず。蓋し此の經は、縁に遇ふて即ち宗とすと云ふを以て法に合す、餘經の局量有るが如きに非ざるなり。」

晉の鳩摩羅什、兒たりし時、母に隨ひ沙勒に至る。佛鉢を頂戴して、私かに念ふ、鉢の形甚だ大にして、何ぞ其れ輕き耶。即ち重くして聲を失して之を下す。母其の故を問ふ。對へて曰く、「我が心に分別有るが故に、鉢輕重有る耳」と。予是を以て知る、一切諸法は念に隨つて至る、念未だ生ぜざる時、量太虚に同じ。然らば則ち即今見行、分別の者、萬類紛然たり。何が故に靈驗等しからざる、曰く、「是れ皆亂想虚妄にして、夢中の事に困するが如く、心力昧略微劣なるが故なり。嗟乎、人忠孝の心有らざることを莫し、而して王祥冰に臥せば、則ち魚躍り、耿恭井を祝せば、則ち泉冽しきは何ぞや。蓋し其れ之を養ふの專なるが故に、靈驗の應、速かなること影響の如し。」

菩提達磨、初め梁より魏に之き、嵩山の下に經行す。杖に少林に倚り、面壁燕坐する而已。習禪に非ざるなり、久しくして、人其の故を測ること莫し、因つて達磨を以て習禪と爲す。夫れ禪那は、諸

- ① 大願。十大願。
- ② 坦宕。こころひろし。
- ③ 薙髮。かみをきる。
- ④ 比丘。僧。
- ⑤ 鳩摩羅什。姚秦の人。
- ⑥ 佛鉢。佛の用ひ玉ひし鐵鉢。
- ⑦ 紛然。ごたごた。
- ⑧ 王祥。孝行もの。
- ⑨ 經行。運動。

行の一耳、何を以て聖人を盡すに足らん。而も當時の人之を以てす、史を爲る者、又従つて茲を習禪の列に傳す、枯木死灰の徒と伍を爲さしむ。然りと雖も、聖人は止だ禪那のみに非ず、而も亦禪那に遠はず。易の陰陽より出でて、而も亦た陰陽に遠はざるが如し。

舊説に、四祖大師、破頭山に居す。山中に無名の老僧有り、唯だ松を植う、人呼んで栽松道者と爲す。嘗つて祖に請ふて曰く、「法道得て聞く可きや。」祖曰く、「汝已に老いたり、脱し聞くこと有りとも、其れ能く化を廣めん耶。儻し能く再來せば、吾れ尙ほ汝を遅つ可し」と。乃ち去つて水邊に行

く。女子の衣を洗ぐを見て、揖して曰く、「寄宿し得んや否や。」女曰く、「我れに父兄有り、往いて之を求む可し。」曰く、「諾せば我れ即ち行かん。」女首肯す、老僧策を回らして去る。女は周氏の季子なり、歸つて輒ち孕む。父母大いに惡んで之を逐ふ、女歸る所無し。日は里中に庸紡し、夕は衆

館の下に於てす。已にして一子を生む、以て不祥と爲し、水中に弃つ。明日之を見れば、流に浜りて上る。氣體鮮明なり。大に驚きて遂に之を擧ぐ、童と成りて母に隨つて乞食す。邑人呼んで無姓兒と爲す。四祖、黃梅の道中に見る、戲に之に問うて曰く、「汝何の姓ぞ。」曰く、「姓は固より有り、但だ常姓に非ず。」祖曰く、「何の姓ぞ。」曰く、「是れ佛性。」祖曰く、「汝乃ち姓無き耶。」曰く、「姓空なるが故に無し。」祖其の母を化して出家せしむ、時に七歳なり。衆館今寺と爲り、佛母と號す。而して周氏尤も

- ① 脱。もし。
- ② 遲。まつ。
- ③ 庸紡。いとつむぎのるゐ。やとほる。
- ④ 衆館。今の公會堂に類す。

盛なり、破頭山を去ること、佇望の間なり。道者の肉身尚ほ在り、黃梅の東禪に佛母塚有り、民其上に塔す。傳燈錄定祖の圖に、忍大師姓は周氏と記するは、母の姓に従ふなり。大宋の高僧傳に乃ち曰く、「釋の弘忍、姓は周氏、其の母始めて娠む、月を移して光庭室を照す、終夕晝の若し、異香人に襲く、家を擧つて欣駭す」と。安んぞ衆館は本社屋にして、生るゝ時水中に置くことを知らんや。又曰く、「其の父偏に愛して、因つて書を誦ましむ」と。知らず、何れ従りして此の語を得たる。其の叙事妄誕なること大率此に類す。開元中に、文學閻丘均、塔碑を爲る、徒文のみ。會昌の毀廢、唐末の烽火に、更に蹂踐に遇ふ、愈々考ふ可からず。其の書の謬を知るは、母の氏は周にして、父有りと曰ふ故なり。無爲子嘗て其の像に贊して曰く、「人孰か父無からん、祖獨り母のみ有り、其の母を誰と爲る。周氏の季女、濁港滔々として大江に入る。門前舊に依る長安の路。斷際禪師、初め雒京に行乞す、添鉢の聲を吟す。一嫗棘扉の間より出でて曰く、「太だ無厭足生。」斷際曰く、「汝猶ほ未だ施さざるに、反つて無厭と責むるは何ぞ耶。」嫗笑つて扉を掩ふ。斷際之を異とし、與に語つて發藥する所多し。辭し去る、嫗曰く、「南昌に往き馬大師に見ゆ可し。」斷際江西に至るに、大師已に化し去る。塔、石門に在りと聞き、遂に往いて塔を

- ①弘忍。大滿禪師、唐上元二年寂、年七十四。
- ②欣駭。よろこび、おどろく。
- ③妄誕。うそたはごと。
- ④開元。唐の年號。
- ⑤蹂踐。ふみにじる。
- ⑥酒酒。はびこる。
- ⑦行乞。たくはつ。
- ⑧添鉢の聲。今の「こーい」なり。
- ⑨棘扉。いばらがき。
- ⑩無厭足生。あくことを、しらぬやつ。
- ⑪發藥。心身に利益すること。

禮す。時に大智禪師、方に廬を塔の傍に結ぶ、因つて其の遠來の意を叙ぶ。平昔得力の言句を聞くことを願ふ。大智。「一喝三日耳聾」の語を擧して之に示す。斷際舌を吐いて大いに驚く、相從ふこと甚だ久し。暮年に始めて移つて新吳の百丈山に居す。其の時を考ふるに、嫗死して久し矣。而るに大宋高僧傳に曰く、「嫗斷際を祝して百丈に見えしむ」と。非なり。雲居の佛印禪師曰く、「雲門和尚の説法雲の如し、絶た人の其の語を記録することを喜ばず、見ては必ず罵逐して曰く、「汝口用ひず、反つて我が語を記す、佗時定めて我れを販賣し去らん」と。今對機室中の録は、皆、香林、明教、紙を以て衣と爲し、所聞に隨つて即ち之を書す。後世の學者、文字語言の中に漁獵す、正に網を吹いて滿たさんと欲するが如し。恐に非ざれば、即ち狂なり、嘆す可きなり」と。玄沙備禪師、山中に薪す、傍僧呼んで曰く、「和尚虎を看よ。」玄沙虎を見ず、同游の者皆之を避く。潤、安歩して常の如し。曰く、「心外に火無し、火は實に自心なり、火逃る可しと謂はば、火を免るに由し無し」と。火至つて滅す。嚴陽尊者、單丁住山す、蛇虎手に就いて食す。歸宗常公、草を刈る、蛇を見て之を爇る。傍僧曰く、「久しく歸宗と聞く、今日乃ち一の龜行の沙門を見る。」常曰く、「龜が龜か、我が龜か、吾れ聞く、般若に親近するに、四種の驗心あり、謂く、事に就き、理に就き、入、

- ①喝。禪門の命脈なり。
- ②嚴陽。善信、趙州に嗣ぐ。
- ③歸宗知常。馬祖に嗣ぐ、廬山の歸宗に住す。

事理に就き、出、事理の外に就く。宗門に又四藏鋒の用有り、親近は以て自治し、藏鋒の用は以て物を治す」と。

荆州天皇寺の道悟禪師、傳燈錄に載する所の如きは、則ち曰く、「道悟、法を石頭に得たり、居る所の寺を天皇と曰ふ。婺州東陽の人、姓は張氏、年十四にして出家し、明州の大徳に依つて披剃す。年二十五にして、杭州竹林寺に受具す。首め、徑山の國一禪師に謁して、服勤すること五年、太歴中に鐘陵に抵り、馬大師に謁す。二、夏を経て、乃ち石頭に造る。元和丁亥四月、疾を示す、壽六十、臘三十五」と。達觀禪師集むる所の『五家宗派』を觀るに及んで、則ち曰く、「道悟、馬祖に嗣ぐ。唐の丘玄素が譯する所の碑文を引くこと幾んど干言、其の略に曰く、「師道悟と號す、洛宮の人、姓は崔氏、即ち子玉の後胤なり。年十五にして、長沙寺に於て、曇義律師を禮して出家す。二十三にして、嵩山の律徳に詣して、尸羅を得たり。石頭に謁して寂を扣くこと二年、契悟する所無し。乃ち長安に入り、忠國師に親しむ。三十四にして、侍者、應真と南に還り、馬大師に謁し、言下に大悟す。祝して曰く、「他日舊處を離るること莫れ」と。故に復た洛宮に還る。元和十

- ① 石頭。希遷。
- ② 披剃。頭をそり、衣を披る。
- ③ 受具。得度受戒。
- ④ 徑山。支那五山の二。
- ⑤ 國一。法欽、龍林素に嗣ぐ、牛頭融六世、徑山の開祖なり。
- ⑥ 太歴。唐代宗の年號。
- ⑦ 夏。佛者には夏冬とも九十日づつを禁足坐禪をする、之を夏と云ふ。
- ⑧ 元和。憲宗の年號。
- ⑨ 臘。法臘と云ひて、僧になりてよりの年月を云ふ。
- ⑩ 達觀。曇穎、百門禪に嗣ぐ、金山に住す、首山念三也。
- ⑪ 尸羅。梵語、こに戒と云ふ。
- ⑫ 忠國師。南陽、六祖能に嗣ぐ。
- ⑬ 應真。耽源。

三年戊戌の歲、四月の初め疾を示し、十三日歸寂す、壽八十二、臘六十三。其の傳を考ふるに、正に兩人の如し。然れども、玄素が載する所に曰く、「傳法一人有り、崇信澄州の龍潭に住す」と。南嶽讓禪師の碑は、唐の聞人歸登撰す、法孫數人を後に列す。道悟の名あり、圭峰、裴相國に答ふる宗趣の狀に、馬祖の嗣六人を列す。首めに、江陵の道悟と曰ふ、其の下の注に曰く、「兼ねて徑山に稟く」と。今妄に、雲門、臨濟の二宗を以て競ふ者、一笑を發す可し。

草堂禪師牋要に曰く、「心體は靈知不昧、一摩尼珠の圓照空淨にして、都て差別の相無きが如し。故に物に對する時、能く一切の色相を現す、色自ら差あれども、珠に變易無し、珠、黒を現する時の如きは、人、珠を以て黒と爲す者は、珠を見るに非ず、黒を離れて珠を覓むる者も、亦珠を見るに非ざるなり。明黒都無を以て珠と爲す者も、亦珠を見るに非ざるなり」と。馬祖の說法は、妄に即して眞を明らむ、正に黒を以て珠と爲すが如し。神秀の說法は、妄盡きて方に覺性を見せしむ。妄を離れて眞を求む、正に黒を離れて、珠を覓むるが如し。牛頭の說法は、一切夢の如し、本來無事、眞妄俱に無なり、正に明黒都無を珠と爲すが如し。獨り、荷澤のみ、空相の處に於て知見を指示す、了々として常に知る、正に正しく珠の體を見て、衆色を顧みざるが如し。密、馬祖の道を以て、珠の黒きが如しと

- ① 雲門。匡眞、雪峰に嗣ぐ。
- ② 臨濟。義道、黃檗に嗣ぐ。
- ③ 草堂。圭峰也、遂州道圓に嗣ぐ、六祖能六世。
- ④ 神秀。五祖に嗣ぐ、北秀なり。
- ⑤ 牛頭。四祖道信に嗣ぐ、法融山の名なり。
- ⑥ 荷澤。神會、六祖に嗣ぐ。
- ⑦ 密。圭峰宗密。

云ふ。是れ大に然らず、妄に即して眞を明らむるは、方便の語のみ。畧教乘を知る者は、皆之を了す、
 豈馬祖、^① 聖師の遠識に應じて、^② 震旦の法主と爲るをや。其の門下に出づる者、^③ 南泉、^④ 百丈、
 大達、^⑤ 歸宗の徒の如きは、皆三藏を博綜し、眞妄の論を熟爛す、争ひ服膺して之を師尊す。而
 して其の道乃ち止珠の黒きが如くなるに於てするのみならん哉。又牛頭の道を以て、一切夢の如し、
 眞妄俱に無しと云ふは、是れ大に然らず。其の心王の銘を作るを觀るに、
 曰く、「前際空の如し、知る處宗に迷ふ、分明に境を照らす。照に隨へば、
 冥濛なり、從横照無し、最微最妙、法を知るに知無し、知無ければ要を知
 る」と。一一皆知見の病を治す。而して荷澤のみ、公然として知見を立つ、
 優劣見る可し。而して其の道明黒都無を珠と爲すが如しと謂はゞ、豈重ね
 て吾人を欺かす哉。北秀の道の如きに至りては、頓漸の理、三尺の童子も
 之を知る、論する所、當に其の用心を論すべし。秀公は、^⑥ 黄梅の上首たり、
 頓宗の直指、從つて機器速ばすと曰ふ。然れども亦既まで聞き、飽まで參
 せり矣。豈自ら甘んじて漸宗の徒たらん耶。蓋し祖道、時に疑信天下に半なり、漸あらざれば、何を
 以てか頓を顯はさん哉。紛争に至りては、皆兩宗の徒にして、秀の心に非ず。便ち其の道止是くの如
 しと謂はゞ、恐らくは通論に非ず。吾れ聞く、大聖世に應じて法道を成就す、其の權一に非ず、顯權

- ① 聖師。祖師達磨。
- ② 遠識。とほきみらいき。
- ③ 震旦。支那。
- ④ 南泉。尊願。
- ⑤ 百丈。大智。
- ⑥ 大達。無業。
- ⑦ 歸宗。智常。
- ⑧ 三藏。經律論の一切經。
- ⑨ 冥濛。くらし。
- ⑩ 黄梅。五祖弘忍、黄梅に住す。

あり、冥權あり、冥權は即ち異道爲り、非道爲り、顯權は親友たり、知識たり、庸詎ぞ秀公冥權に非
 ざることを知らんや。

唐僧復禮、法辯あり、當時の流輩、之を推尊す。眞妄の偈を作り、天下の學者に問うて曰く、「眞法
 性本淨。妄念何由起。從眞有妄生。此妄何所止。無初即無末。有終應有始。
 無始而無終。長懷惜二茲。理願爲開玄。妙析之。出生死。死。清涼國師答へて曰く、「迷
 眞妄念生。悟眞妄即止。能迷非二所迷。安得二長相似。從來未曾悟。故說二妄無
 始。知二妄本自眞。方是恒妙理。分別心未忘。何由出生死。」圭峰禪師答へて曰く、「本淨
 本不覺。由レ斯妄念起。知レ眞妄即空。知レ空妄即止。止處名レ有終。迷時號二無始。因緣
 如二幻夢。何終復何始。此是衆生源。窮之。出生死。死。」又曰く、「人多く眞能く妄を生ずるが故
 に、妄窮盡せずと謂ふ。此の理を決せんが爲に、重ねて前偈に答へて曰く、「不二是眞生。妄
 迷レ眞而起。悟レ妄本自眞。知レ眞妄即止。妄止似二終末。悟來似二初始。迷悟性皆空。皆
 空無終始。生死由レ此迷。達レ此出生死。予、二老所答の辭を味ふに、皆未だ復禮の問意
 に副はず。彼れは眞法本淨し、妄念何れ由りして起ると問ふ。但眞に迷ふて覺らずと曰はゞ、孰れか答
 ふるに能はざらん耶。因つて爲めに其の意を明かにし、偈を作りて曰く、「眞法本無性。隨レ緣染
 淨起。不レ了號二無明。了レ之即佛智。無明全妄情。知覺全眞理。當念心絶二古今。底處

尋終始一本自離言詮一分別即生死。」と。

雲菴和尚、嘗て曰く、「諸佛の隨宜說法、意趣解し難し。起信に曰ふが如きは、若し衆生來り法を求むる者有らば、己が能く解するに隨ひて、方便して爲に説け、名利恭敬を貪著すべからず、唯々自利利他を念とし、菩提に回向する故なりと云ふは、法を弘むること太だ峻なる者の爲に之を言ふなり。圓覺に曰く、「末世の衆生、修行せんと欲する者は、當に命を盡して善友に供養し、善知識に事の境を現じて、猶は虚空の如し」とは、道を求めて精進せざる者の爲に、之を言ふなり。然りと雖も、弟子たる者、能く精進を忘れざれば、師たる者、太だ峻なるに害あらず。方今の學者、未だ致敬の禮を盡すこと能はずして、責むるに、法を慳むを以てするは過まれり。侍者進み曰く、「然らば則ち、三世如來の法施の式、得て聞く可けんや。」曰く、「法華に曰く、「一切衆生に於て、平等に法を説く、法に順ふを以ての故に、多からず、乃至深く法を愛する者も、亦多く説くことを爲され」と。此れ佛の遺意なり。」

達觀の穎禪師、初め東吳に出づ。年纔かに十六、七、舟を秦淮に泊めて、奉先寺に宿す。時に寺皆講人なり。其の禪者なるを見て、又之を少しとして禮を爲さず。穎讓めて曰く、「佛記し給ふ、比丘、客比丘の至るを惡めば、法將に滅せんとすと。爾が輩、安んぞ之を爲す耶。」答ふる者あり、曰く、「上

①起信 論上下二卷、馬鳴菩薩造。
②圓覺 經二卷。
③講人 教宗の講師ばかり。

人即ち此に主たらば、客を敬すること未だ晚からず。「穎笑つて曰く、「我れ顧みるに、未だ此に居るに暇あらず、然れども、能く道行の者を易へて、十方僧に飯せしめ、佛恩を報せん耳。」時に 内翰葉公清臣、金陵に守たり。書を袖にして之に調す。葉公曰く、「昨晚此に至る、何を以てか、寺を建つる始末を知るの詳かなること此の如き乎。」對へて曰く、「夜舊碑を閲て之を知る、因つて 律居の弊、風化を敗傷することを極言す。「葉公大いに之を奇とす。奉先是れに縁りて乃ち禪林と爲る。吳中の講師、多く諸祖傳法の偈、譯人無しと譏る、禪者之が與に辨じて其の眞を失ふ、適に以て其の謗を重ぬるに足れり。穎之を諭して曰く、「此れ達磨、二祖の爲に言ふ者なり、何ぞ譯人を須ひん耶。梁武の如きは、初めて之を見て、即ち問ふ、「如何なるか是れ 聖諦第一義。」答へて曰く、「廓然無聖。」進んで曰く、「朕に對する者は誰ぞ。」又曰く、「不識」と。達磨をして、方言に通せざらしめば、即ち何ぞ是の時に於て、便ち能く爾らん耶。」講師敢て復た辭あらず。其の魔外を控服するの氣、無師自然の智、妙齡より發して、事に遇へば即ち應じ、天性即ち然り。後に石門聰の嗣と爲る、首山の嫡孫なり。

①内翰 官名。
②律居 律宗の寺。
③聖諦 眞諦と同じ意、ここで佛法又は禪の意。
④廓然 大又は空しきとの意。
⑤不識 知らずの意に非ず、達磨は印度からきて、支那語が通じぬの意なるべし。
⑥方言 支那の言語。
⑦疑畏 うたがひおそる。
⑧首山 省念一石門菴囉一金山達觀頌。

譬へば、幻主の機關木人の如し、人、屈伸俯仰を觀見すと雖も、其の内にして之を然らしむるを知る莫し。佛法は爾らず、威衆生をして悉く知見を得せしむ。云何か當に佛世尊に、秘密藏ありと言ふべき。佛、迦葉を讚し給ふ、「善い哉、善男子、汝が言ふ所の如きは、如來實に秘密藏無し、何を以ての故に、秋滿月の空に處して、顯露清淨にして、翳無く、人皆觀見するが如し。如來の言も亦復た是くの如し、開發顯露、清淨無翳なり。愚人は解せず、之を秘藏と謂ふ。智者は了達して、即ち藏と名づけず。」又曰く、「又た無語とは、猶ほ嬰兒の言語未だ了せざるが如し、復た語有りと雖も、實は亦語無し。如來も亦爾り、語未だ了せざる者は、即ち秘密の言なり、所説ありと雖も、衆生解せず、故に無語と名づく」と。故に石頭曰く、「言に、乗じて須らく宗を會すべし、自ら規矩を立つこと勿れ。」藥山曰く、「更に須らく自ら看るべし、言語を絶却することを得ざれ、我れ今汝が爲に者箇の語を説いて、無語底を顯はさん。」長慶曰く、「二十八代の祖師、皆傳心を説いて、且つ傳語を説かず、且く道へ、心、作廢生か傳へん、若し也言の蒙を啓く無ければ、何を達者と名づけけん。」雲門曰く、「此の事、若し言語上に在らば、三乗十二分教、豈是れ説無からんや、什麼に因つてか、教外別傳

- ① 幻主。幻術師、てじなし。
- ② 關。くもり。
- ③ 石頭。希遷、青原行思に嗣ぐ、六祖能三世。
- ④ 乘。承乘なり。
- ⑤ 藥山。惟覺、青原に嗣ぐ。
- ⑥ 長慶。惠稜、雲峰に嗣ぐ、德山三世。
- ⑦ 二十八代。西天四七と云ふて印度の釋迦さまより較若多羅さままで。
- ⑧ 作廢生。いかにと云ふこと。
- ⑨ 蒙。くらし、愚のこと。
- ⑩ 雲門。文偃、雲峰に嗣ぐ。
- ⑪ 三乗。小乘、大乘、最上乘。
- ⑫ 十二分教。佛敎研究上の分類也。

と道ふ。若し學解機智より得ば、十地聖人の如きは、説法雲の如く雨の如くなるも、猶ほ佛に、見性は羅敷を隔つるが如しと呵せらる。此れを以ての故に知んぬ、一切心あらば、天地懸かに殊なり、然も是くの如しと雖も、若し是れ得る底の人は、火と道つて、何ぞ曾つて口を燒着せん耶。子毎に曰く、「淨子、此に於て徹し去らば、方に諸佛は、法の説く可き無く、而も言説法身に證することを知らん、如何なるか是れ言説法身。自ら答へて曰く、「斷頭の船子、楊州に下る。」

- ⑬ 羅敷。絹。
- ⑭ 辰巳。時間のこと、午前九時十時。
- ⑮ 威儀。僧家の禮式。
- ⑯ 寶積。經。
- ⑰ 曹溪大師。六祖惠能。
- ⑱ 的付。嗣承の法子。

王文公曰く、「佛比丘と與に、辰巳の間に供に應ずるを齋と爲すとは、衆生と接するには、齋ならざる可からず、又佛性を以ての故に、等しく衆生を視て、交神の道を以て之を見る」と。故に首楞嚴に曰く、「威儀を嚴整して、齋法を肅恭す」と。又曰く、「梵語には三昧、此には正定と云ふ。正定の中の所受の境界を、正受と謂ふ。無明所縁の受到異なる、故に圓覺に曰く、「三昧正受」と。釋する者謂く、「梵語には三昧、此には正受と云ふ」と。而るに寶積に云く、「三昧及び正受」と。則ち此の釋非なり。

曹溪大師、將に涅槃に入らんとす。門人行瑤、超俗、法海等問ふ、「和尚の法、何くに付する所ぞ。」曹溪曰く、「付囑の者、二十年の外、此の地に於て弘揚せん。」又問ふ、「誰人ぞ。」答へて曰く、「若し知らんと欲せば、大庾嶺上に、網を以て之を取れ」と。圭峰、荷澤を立てて、正傳の的付と爲さん

と欲して、乃ち之を文釋して曰く、「嶺とは高なり。荷澤姓は高、故に密に之を示す耳。讓公を抑へて旁出となさんと欲す。則ち曰く、「讓は曹溪門下、旁出の汎徒なり」と。此の類數千餘ばかり。嗚呼、鹿を逐ふ者は、山を見ず、金を攫む者は、人を見ずとは、殆んど虚語に非ず。密公の所見に方つては、唯々荷澤のみなり、故に諸師の、是非を問はず、例して皆之を毀る。大庾嶺上に、網を以て之を取れと云ふの語の如きは、是れ大師、末後全提の妙旨なり。而も輒く意を以て求む、讓公は僧中の王なり。而も之を汎徒と謂ふ、詳かに密公の意を味ふに、以て千載の一笑を發す可し。

① 老安國師、言あり、曰く、「金剛經に云く、「應に住する所無くして、而

① 讓公、南嶽懷讓、六祖龍に嗣ぐ。
② 汎徒、普通のでし。
③ 密公、圭峰宗密。
④ 老安、堪官齊安國師、馬祖に嗣ぐ。

も其の心を生ずべし」と。住する所なしとは、色に住せず、聲に住せず、迷に住せず、悟に住せず、體に住せず、用に住せず。而も其の心を生ずとは、一切の法に即して、而も一心を顯はす。若し善に住して心を生せば、即ち善現じ、若し惡に住して心を生せば、即ち惡現す。本心即ち隱没す、若し所住なければ、十方世界、唯々是れ一心なり。「信に知んぬ、曹溪大師云く、「風幡動せず、是れ心動す」と。脩山主偈あり、曰く、「風動心搖樹、雲生性起塵。若明今日事、暗却本來人」と。

僧あり、晦堂老人に問うて曰く、「五祖の前身、栽松道者は、嘗つて周氏の女に託して生る、彼れ

⑤ 三縁和合せす、何れよりして生る耶。老人笑つて曰く、「汝、樹提伽は火中より生れ、伊尹は空乗より生ることを聞くや。對へて曰く、「之を聞く。」「汝、彼の二人に於ては、乃ち其の生三縁に由らざることを疑はず、而して獨り、五祖を疑ふ耶。方今士大夫の、意を宗乘に留むる者、皆此れを以て疑ひを爲す。此の語を聞くに及んで、釋然たらざること莫し。予以謂らく

⑤ 三縁、父、母、子。
⑥ 伊尹、周の名臣。

老人の示す所は、未だ教乘の本意を極むることを欲せず、第其の機に就いて、狂情を息む耳。馬大師曰く、「佛は是れ能仁、智慧あり、機宜を善くす。能く一切衆生の疑網を破して、有無等の縛を出離せしむ」と。其れ斯の謂歟。

宗鏡錄に曰く、「然も心即ち是れ業、業即ち是れ心なりと雖も、既に心より生じて、還つて心より受く、如何ぞ現今其の妄業の報を消せん。」答へて曰く、「但々無作を了すれば、自然に業空なり、所以に云く、若し無作を了れば、惡業一生に成佛す。」又曰く、「作業ありと雖も、而も無作ならば、即ち是れ如來秘密の教なり、又凡そ作業は、悉く是れ自心、外法を横計して、還つて自ら對治して、妄りに業を成すことを取る。若し心を了すれば、境を取らず、境自ら生ぜざれば、法の情を牽くなし。云何が業を成せん。予嘗て偈を作り、其の旨を釋して曰く、「擧手炷香。而供養佛。其心自知。應念獲福。擧手操刀。恣行殺戮。其心自知。死入地獄。或殺或供。一手之功。云何業報。罪福不同。皆自横計。有如是事。是故從來。枉沈三生。死雷長芭蕉。」

鐵轉磁石。俱無作者。而有是力。心不取境。境亦自寂。故如來藏。不許有識。維摩經に曰く、「不思議の境に入り、座を燈王に借り、飯を香土に取り、其の日劫を促演す。大小の相容の如きは、以て妙旨を神會す可し。一切の聲聞、是の不可思議解脱の法門を聞いて、皆號泣の聲に應じて、三千大千世界に震ふ」と曰ふに至りては、極めて解通し難し。首楞嚴に曰く、「一人眞を發して源に歸すれば、十方虛空、悉く皆消殞す」と。見道の者、妄盡き覺明かにして、自ら空殞を見ることが可なり、而も下文に、乃ち又曰く、「一切の魔王、其の空殞故無くして、拆け裂くるを見る」とは、和會し難しとす。古の諸法師、俱に注釋あり、其の所論を校ふるに、未だ説無くんばあるべからず。

臨濟大師、四賓主を建立す。今の徒其の語を聞て、竟に能く之を分辨すること莫し。之を知る者は、未だ必ず眞ならず、知らざる者は、以て苟くも然りと爲す。又四喝有り、一喝は、金剛王寶劍の如く、一喝は、探竿影草の如く、有る時の一喝は、一喝の用を作さずと。踞地獅子、探竿影草の如きは、後學往々、其の何等の語なることを省せず、安んぞ能く其の意を識らんや。此れ古人、一期建立の辭と曰ふに過ぎざる耳。何ぞ問ふに足らん哉と。然らば則ち臨濟の言、遂に虚語と爲るなり。今其の偈を此に係けて曰く、「金剛王劍。觀露の堂々。才涉二唇。吻即犯二鋒。踞地獅子。本無二窠臼。願佇之間。即成二滲漏。」探竿影草。莫入二陰界。一點不來。賊身自敗。』有時一喝。不作二喝用。佛法大有。只是牙痛。』

①探竿影草。竿の先に草をつけて、水の上ふりて魚の有無をさぐるの器にたとふ。
②堂堂。威儀さかんなる貌。
③滲漏。しみもろ。

予、長沙に遊び、鹿苑に至り、岑禪師の畫像を見て、其の人と爲りを想見す。岑、大蟲の贊并に序を作りて曰く、「如來世尊、阿難に語りて曰く、『汝元一切の浮塵、諸の幻化の相は、當處に出生して隨處に滅盡することを知らず、幻妄を相と稱す、其の性は眞に妙覺明の體たり。』龍勝菩薩曰く、『諸法は自より生せず、亦他よりも生せず、共にあらず、無因にあらず、是の故に無生と説く。』佛祖の辯を以て、心法の妙を談す、其の清淨にして顯露すること、掌中に物を見て、疑ふ可き者無きが如し。而も末世の衆生、明了せざることは、蓋し其の迷妄の極にして、其の所聞の習ひに非ざるが故なり。禪師之を憫む、故に所習の境に於て、之を譬へて曰く、「若し心是れ生せば、則ち夢幻空華、亦應に是れ生すべし。若し身是れ生せば、則ち山河大地、森羅萬象、亦應に是れ生すべし」と。大いな

①長沙景岑。南泉願に嗣ぐ、馬祖三世、大蟲と號す。
②鹿苑。湖州。
③仰山。嘉寂、潯山に嗣ぐ。

の哉言乎。首楞嚴、中觀論と相終始せり。禪師は大寂の孫、南泉の子、趙州の兄にして、法を長沙の鹿苑に開く。當時の衲子、倔強なること、仰山の如き者も、猶ほ之に下る。而も呼んで以て、岑大蟲と爲すと云ふ。之が贊を爲りて曰く、「長沙の大蟲、聲威甚だ重し、獨り空林に眠れば、百獸震恐す。寂子兒癡にして、見て畏るゝことを知らず、手を引いて鬚を捋づ、幾んど其の耳を缺く。大空小

空、是れ虎是れ爾、^①備と^②覺との如きは、其の尾を擦る可し。嗟今衲子、眼^③斐曼の如し、但だ其の彪を見る、安んぞ虎の眞を識らん。我れ公の像を拜す、存するに非ず、没するに非ず、^④百尺竿頭、行塵^⑤物々たり。」

白雲端禪師曰く、「天下の^⑥叢林の興ることは、大智禪師の力なり、祖堂に當に達磨初祖の像を其の中に設くべし。大智禪師の像は西に向へ、開山尊宿の像は東に向へば、其の宜しきを得ん。當に止だ開山尊宿を設けて、而も其の祖宗を略すべからず」と。^⑦雲居の祐禪師曰く、「吾れ諸方の長老の滅を示すを觀るに、必ず其の骸に塔す。山川は限りあり、而も人死して窮り無し。百千年の下、塔將に容るゝ所なからんとす」と。是に於て、宏覺の塔の東に於て、卵塔を作りて曰く、「凡そ住持は、生身壞せず、火浴して舍利を雨ふらず者に非ざるよりは、皆骨石を以て此に填めよ」と。其の西に、又卵塔を作りて曰く、「凡そ衆僧は、皆骨石を此に藏めよ」と。之を三塔と謂ふ。二大老、識度高遠にして、後世の法と爲す可し。然れども、孤論持し難く、衆を犯すこと成り難し。卒に必ず賞音の者あらん、吾れ將に焉を觀んとす。

東京覺嚴寺の有誠法師、華嚴經を講す、席を歷ること最も久し、學者依つて以て聲を揚ぐ。其の人

- ① 備。支沙師備。
- ② 覺。誰か未詳、或は宏覺也。
- ③ 斐曼。うつくしくあやあること。
- ④ 百尺竿頭。百尺もある竿のさき。
- ⑤ 物物。さかんに起る貌。
- ⑥ 叢林。禪宗の本式の法を行ふ伽藍、又は修行場。
- ⑦ 雲居祐。雲居寺の神祐也。

と爲り、純至にして縁飾^①少し、高行遠識にして、近世の講人、其の右に居る者あること莫し。元祐の初め、高麗の僧統、海に航し至りて^②表を上る。賢首の宗教を傳持して、本國に歸りて流通せんことを乞ふ。聖旨を奉じ、^③兩街に下して、以て法を授く可き者を擧げしむ。有司師を以て宜しと爲す。辭表を上り、勉して曰く、「臣、意を講學に刻むと雖も、^④識趣淺陋なり、特だ年運已に往くを以て、妄りに學者の爲に推さる。今、異國の名僧、海に航して道を問ふ、宜しく高識博聞の者を得て、之が師と爲すべし。竊かに杭州の慧因院僧道源を見るに、教乘を精練して、旁ら外學に通ず、擧げて以て自ら代ふ。實に公議に^⑤允れり、聖旨を奉じて、乞ふ所に依る」と。朝奉郎楊傑を勅差して、館伴して錢塘に至り、法を受けしむ。^⑥予、建中靖國の初め、故人の處に、^⑦洞山初禪師の語一編を獲たり。福嚴^⑧良雅の集むる所なり。其の語言宏妙にして、眞の法窟の爪牙なり。大略に曰く、「語中に語有るを、名けて死句と爲す、語中に語無きを、名けて活句と爲す。未だ其の源に達せざる者は、^⑨第八の魔界の中に落在す。」又曰く、「言に展事無く、語は投機せず、言に乗する者は喪び、句に滯る者は迷ふ。」此の四句の語中に於て、見得分明ならば、箇の脱酒の衲僧と作らん。根椽片瓦、粥飯の因縁、人天の與に善知識と爲るに堪へたり。此に於て明

- ① 表。上表と云ふて天子に申し上げる文章。
- ② 兩街。左右善世僧錄。
- ③ 識趣。情識意趣。
- ④ 允。允許の允也。
- ⑤ 楊傑。無爲居士、天衣懷に嗣ぐ。
- ⑥ 建中靖國。四字の年號なり、北宋徽宗の年號、日本堀川天皇康和年中。
- ⑦ 洞山守初。宗慧、雲門に嗣ぐ、良雅。洞山初に嗣ぐ。
- ⑧ 第八魔。十界の中第八三昧魔界。

ざれば、終に莽鹵と成る。雲庵平生の説法、多く初悟門の格量を度越するを稱す。偶々舊記を閲るに、其の道友に寄する偈并に序を見るに、曰く「昔洞山、雲門に參じて、旨を言下に悟り、佛の正知見に入り、あらゆる、炙脂の帽子、鶴臭の布衫、皆脱去す。四句の偈を以て、其の悟を明かす。蓋し展事自在の用、投機善巧の風を得たり。故に其の應機接物、言に乗せず、句に滯らず、師子王の自在を哮吼する時に於て、百獸震駭するが如し。蓋し法王の法、是くの如くなるが故なり。又世に傳ふ所の、雲門に見ゆるものは、皆坐脱立亡することは何ぞや、佛法の知見無きを以ての故なり。因つて句に隨ひ、釋して以て寄せ奉るに、曰く、大用現前能展事。春來何處不開花。放伊三頓參堂去。四海當知共一家。」又曰く、「千差萬別解投機。明眼宗師自在時。北斗藏身雖有語。出群消息少人知。」又曰く、「遊山翫水便乘言。自己商量惣不偏。鶴臭布衫脱未得。且隨風俗一度流。年久又曰く、「滯句乘言是普雙。參禪學道自無功。悟來不費纖毫力。火裏蟬螻吞二大蟲。」

宗道者は、何れの許の人なることを知らず、舒斬の間に往來し、多く投子に留る。性、酒を嗜み、日として酔はざることなし、村民之を愛敬す。毎に餉するに醇醪を以てす。居、一日、方に浴に入る、宗を尋ぬる者ありと聞き、其の必ず、榼を送つて至るを度り、裸にして出で、酒を得て徑ちに去る。人皆大いに笑ふ、而も宗傲然として作ちす。嘗

①榼。たる。

つて衣を散じて山を下る、逆へて問ふ者あり、曰く、「如何なるか是れ道者の家風。」對へて曰く、「袈裟に草鞋を裹む。」問ふ、「意旨如何ん。」曰く、「赤脚にして桐城に下る。」陳退夫、初め省幃に赴く、宗に過ぎて、戯れに問うて曰く、「瓊、此の行、狀元と作らんと欲す、得んや否や。」宗熟視して曰く、「時無ければ即ち得ん、其の言を測ること莫れ。」而して退夫、果して第三の名を以て上第す。時彦魁を作す、方に時無ければの語を悟る。宗、雪竇に見えて、超放自如たり。言

②省幃。本省の及第試験。

③上第。及第。

④言法華。法華學、汾陽に嗣ぐ。

⑤大陽支。曹洞宗、紫山觀に嗣ぐ、洞山七世。

⑥客を典る。知客、禪宗の役僧名。

⑦雌黃。硫黃と砒素との混合物を云ふなり、まじると云ふことにつかつてあるならん。

雪竇初め、大陽の玄禪師の會中に在りて、客を典る。僧と夜語して、古今を雌黃す。趙州栢樹子の因緣に至りて、爭辯して已ます。行者あり、其の旁に立ち、失笑して去る。客退き、雪竇呼び至しめ、之を數めて曰く、「賓客に對して、敢て爾る耶。」對へて曰く、「知客、古今を定むるの辯有りて、古今を定むるの眼無し、故に敢て笑ふ。」曰く、「且く趙州の意、汝作麼生か會す。」因つて偈を以て對へて曰く、「一兔橫身當古路。蒼鷹纔見便生擒。後來獵犬無靈性。空向枯椿舊處尋。」と。雪竇大に驚き、乃ち與に友を結ぶ。或は云ふ、「即ち承天の宗禪師ならん」と。予謂らく、此れを聞いて、以て當時法席の盛なることを想見す可し。

晦堂老人、嘗つて小疾を以て、醫に漳江に寓る。轉運判官夏倚公、立るに往いて之を見る。因つて

妙道を劇談す。萬物を會して、自己と爲す、及び情と無情と共に一體と云ふに至り、時に犬あり、香案の下に臥す。壓尺を以て撃つ。又香案を撃ちて曰く、「犬は情あり即ち去る、香案は情なし自ら住す。情と無情と如何ぞ一體と成ることを得去らん。」夏、答ふること能はず。晦堂曰く、「纔に思惟に入れば、便ち刹法と成る、何ぞ會て物を會して、己と爲さん耶。」老黃龍入滅す、道俗請ふて、繼いで道場に主たらしむ、法席の盛なること初より平時に減せず。然れども性眞率にして、事に従ふことを樂はず、五たび解き去らんことを求む。乃ち事を謝することを得て閑居す、而も學者益々親しむ。謝景溫師直、潭州に守たり。大瀉を慮しうして、以て之を致す。三たび辭して往かず。又江西の彭汝礪器資に囑して、長沙に應せざる所以の意を請ふ。晦堂曰く、「謝公に見ゆることを願へども、大瀉を領することを願はず。馬祖、百丈已前は、住持の事無し、道人、空閑寂寞の濱に相求むる而已。其の後、住持有りと雖も、王臣尊禮して、人天の師と爲す。今は則ち然らず、名を官府に掛けて、戸籍を有する民の如し。直に伍伯追呼せしむるのみ、豈復た爲す可けんや。」器資、斯の言を以て反命す。師直、是に由り書を致して、一見せんことを得んと願ふ。敢て住持を以て相屈せず、遂に長沙に往く。蓋し四方の公卿に於て、意に合へば則ち千里も之に應じ、合はざれば則ち數舍も亦往かざるなり。黃龍に開法して十二年、庵頭に退去すること二十餘年、天下晦堂を指して、道の所在と爲す。蓋し末世の宗師の典刑なり。

①老黃龍、南禪師。
②大瀉、山の名也。

①圓通の祖印禪師、老を郡に告げ、承天の端禪師を請じて、法席に主たらしめんと乞ふ。郡、其の請を可す。端欣然として來る、自ら少うして大法を荷ひ、前輩善を譲り、叢林己を責むること、甚だ重きを以ての故に、敬嚴にして衆に臨み、公を以て私を滅す、是に於て、宗風大いに振ふ。未だ幾年ならざるに、訥公、②閑寂を厭ふ。郡守至るとき、自ら客情を陳ぶ、太守、惻然として端に目す、端笑つて、唯々する而已。明日座に登りて曰く、「昔日大③法眼禪師、偈あり、曰く、「難々々、是れ情を遣ること難し、情盡きて圓明一顆寒じ、方便して情を遣る猶ほ不是、更に方便を除く太だ端なし。」大衆、且く道へ、情作麼生か遣らん。」喝一喝して下座、包腰して去る。一衆大いに驚き、之を遮留すれども可かず。叢林今に至るまで之を敬畏す。

南禪師、廬山の歸宗に住せしとき、火一夕にして燼す。④大衆譁諱して山谷を動かす、而も黃龍安坐して平時の如し。桂林の僧洪準、之を掖けて走らんと欲す、顧み見て之を叱す。準曰く、「和尚、從つて世間を厭はば、慈明の法道、何の頼る所かあらん耶。」因つて徐に衣を整へて起つ、而して火已に座榻に及ぶ矣。是を坐して獄に入る、郡吏其の私忿を發して、考略百至するも、口を絶ちて言はず、唯食はざる而已。兩月にして後釋さるるを得たり。鬚髮剪らず、皮骨僅かに存す。⑤眞點胸、中途に迎へて之を見る、

①圓通祖印禪師、洞山榮に嗣ぐ、雲門四世。
②閑寂、ものさびしくしづかなるを云ふ。
③惻然、あはれみいたむ。
④唯唯、承知した。
⑤法眼、清涼文益。
⑥大衆、禪宗では修行してゐる僧侶を大衆と云ふ。
⑦坐、罪のまきぞへ、連累。
⑧眞點胸、翠岩、慈明に嗣ぐ。

自ら泣の下るを知らず。曰く、「師兄、何ぞ是に至るや。」黃龍叱して曰く、「者の俗漢」と。眞、覺えず之を拜す。蓋し其の不動、山の如くなること類ね此くの如し。

① 澗山牧童禪師、初め洞山の悟本を辭す。本曰く、「吾れ、雲巖先師の處に在りて、親しく寶鏡三昧を印る、事的要を窮む、今汝に付受す、汝善く護持して、斷絶せしむること無かれ。眞の法器に遇はば、方に傳委す可し、直に須らく秘密すべし、影露することを得ざれ。恐

くは流布に屬して、吾が宗を喪滅せんことを。夫れ末法の時代、人多く乾慧なり、若し向去の人の眞偽を辨認せんと要せば、三種の滲漏あり、機に當りて、直に須らく眼を具すべし。一に見滲漏とは、機、位を離れざれば、毒海に墮在す。二に情滲漏とは、智常に向背して、見處偏枯なり。三

に語滲漏とは、體妙宗を失し、機、終始に味し、濁智流轉することは、此の三種に於てす、子宜しく之を知るべし。又綱要の三偈、初め、敲偈俱行に曰く、「金針雙鎖備はり、挾路、隱かに全く該ぬ。寶印空に當りて妙なり、重々錦縫開く。其の次、金鎖玄路に曰く、「交、手明中暗、功齊しうして轉た難きを覺ゆ。力窮りて進退を尋ぬ、金鎖網、曉々。又其の次、理事俱不涉に曰く、「理事俱不涉、回照幽微を絶す、風に背いて巧拙無し、電火、爍いて追ひ難し」と。熟子機に當りて、能く電火の追ひ難きが如くならば、則ち方に三種の滲漏を透らん。圓

覺に曰く、「衆生は解の爲に礙はり、菩薩は未だ覺を離れず、故に知んぬ、生死を言下に脱すること、は、上根大智に非ざるよりは、何を以てか此に臻らん。」大愚、黃檗を以て老婆と爲すことは、良に以あるなり。黃檗毎に曰く、「決定して第二念に流至せざれば、中に就いて方に我が宗門に入らん」と。蓋し宗乘に旨趣あり、下流は悟らず、妄りに同異を生じて、大法の興るを望まんと欲す、亦難からずや。

② 龍牙和尚、半身の寫照を作る。其の子報慈の、匡化、之が贊を爲りて曰く、「日出でて山に連り、月圓かにして戸に當る、是れ身無きにあらず、全く露はれんことを欲せず」と。二老は、洞山悟本の兒孫なり、故に其の家

の風機、回互を貴んで、正位を犯さざらしむ。語、十成を思んで、今時に墮ちざらしむ。而して匡化は、匠心獨り妙にして、語、宗を失せず、貴ぶ可しと爲すなり。餘杭の、政禪師、嘗て自ら寫照す。又自ら之が贊を作

りて曰く、「貌古り形疎にして、杖藜に倚る、分明に畫き出す須菩提、解空は許さず聲色を離る、ことを、孤猿月下の啼きを聽くに似たり」と。政公は、超然奇逸の人なり、故に其の高韻、光風霽月の如し、詞致、清婉にして、道味苦嚴なり。古今の贊偈甚だ多きも、予尤も此の二篇を愛す。

圭峰日用の偈に曰く、「有義の事を作すは、是れ惺悟の心、無義の事を作すは、是れ散亂の心、散亂

- ① 雲巖、道巖、澗山に嗣ぐ、青原三世。
- ② 印、授なり。
- ③ 乾慧、わるがしこき、さるぢえ。
- ④ 隱、はるが。
- ⑤ 互の古字。
- ⑥ 曉々、めん。
- ⑦ 傑、ひらめく。

- ① 大愚、洪州、高安に住す、歸宗常に嗣ぐ、馬祖三世。
- ② 龍牙、湖南にある寺なり、居遁證空、洞山悟本に嗣ぐ。
- ③ 匡化、興、龍牙道に嗣ぐ。
- ④ 政禪師、百丈惟政、馬祖に嗣ぐ。
- ⑤ 清婉、きよくしとや。

は情に随つて轉ず、臨終に業に牽かる。惺悟は情に由らず、臨終に能く業を轉ず」と。偶々唐史を閱るに、李訓の敗るるとき、^①綠衣に詭言せられて、官を黜けられ、終南に走りて密に依る。密之を匿さんと欲す、其の徒可かす。乃ち鳳翔に奔り、^②盤屋の吏の爲に執へらる。訓死す、^③仇、士良、密を捕へて之を詰る。怡然として曰く、「訓と遊ぶこと久し、吾が法、難に遇へば則ち救ふ、初めより愛憎無し、死固より吾が分なり」と。予謂ふに、比丘、唐に於て士大夫に交る者、或は傳記に見えたり、多く法を犯して教を辱しむ。而も圭峰、獨り超然たること此くの如し。史を爲る者、亦欣然として、筆を點りて疾かに書す。蓋し其の履踐の明かなればなり。其の偶を觀るに、則ち情境を透脱することを欲せざるなし。譬へば、香象の鐵鏝を擺壞して、自在にして去るが如し。豈蠅の唾の爲に浼さるるが若くならん哉。

雲菴、歸宗に住せし時、方に法眼大師を送りて茶毘す。時に雨新たに霽れて泥方に滑かなり。道に忽ち躓き倒る。大衆争ひ掖けて起す。^④火把を擧げて曰く、「法眼茶毘す、歸宗擲に遭ふ。大衆に呈似す、更に説く可き無し」と。

石頭大師、參同契を作る。其の末に曰く、「謹んで參玄の人に白す、光陰虚しく度ること莫れ。」法眼

① 綠衣。無官の者。
 ② 密。圭峰の名。
 ③ 盤屋。水曲を盤と云ひ、山曲を屋と云ふ。以て邑の名とす。
 ④ 仇。李訓の敵。
 ⑤ 擺壞。うちらひやぶる。
 ⑥ 澼。どろまみれ。
 ⑦ 茶毘。或は闍維とも云ふ。火葬を云ふ。天然四葬の一。
 ⑧ 火把。火葬に用ふる火炬を云ふ。
 ⑨ 呈似。あらはし、しめす。

禪師注して曰く、「住みね住みね、恩大いにして酬い難し」と。法眼、先徳の心を見ると謂つ可し。衆生日用、妄想顛倒を以て自ら光明を蔽ふ。故に多く時を遺れ候を失す。之を虚しく光陰を度ると謂ふ。有道の者は他無し、能く善く其の心を用ふる耳。故に趙州曰く、「一切但々舊に仍れ、從上の諸聖、舊に仍る中より得ざること無し。」大智度論に曰く、「衆生の心性は、猶は利刀の如し、唯だ用つて泥を割く、泥成る所無くして、刀日に損に就く。理體常に妙なれども、衆生自ら能なり。能く善く之を用ふれば、即ち本妙に合ふ。」首楞嚴に曰く、「佛、阿難に謂ふ、譬へば、琴瑟、篋篋、琵琶の妙音有りと雖も、若し妙指無ければ、終に發すること能はざるが如し、汝と衆生と亦復た是くの如し。寶覺の真心は、各各に圓滿せり、我が指を按ずるが如きは、海印光を發す、汝暫く心を擧すれば、塵勞先づ起る。」華嚴の偈に曰く、「若し人、佛の境界を識らんと欲せば、當に其の意を淨めて、虚空の如くなるべし、妄想及び諸見を遠離して、心の所向をして皆無礙ならしめよ」と。

⑩ 海印。海印三昧。

大智禪師曰く、「夫れ教語は、皆是れ三句相連る、初中後善、初めは直に須らく渠をして善心を發せしむ。中は善を破し、後に始めて善を明かす。菩薩は即ち菩薩に非ず、是れを菩薩と名づく。法は法に非ず、非法に非ず、總に與廢なり。若し即いて一句を説いて答ふれば、人をして地獄に入らしむ。若し三句一時に説かば、渠れ自ら地獄に入らん。教主の事に干らず、故に知んぬ、古の大宗師の説法

は皆佛の法式に依る。知らざるものは、^①苟然の語と以謂へり。^②無着釋する所の金剛般若の如きは、是れ此の意なり。洞山、五位を安立す、道眼明かなる者は、其の題目の十五字の排布を視れば、則ち悟本老人を見ん。正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到と曰ふが如きは是れなり。汾陽の頌に曰く、「五位參尋して、切に知ることを要す。纖毫纒に動ずれば、即ち差違す。金剛匣を透る、誰か能く解せん。唯だ那吒の第一機あり、目を擧ぐれば、便ち三界をして淨からしめ、鈴を振へば、還つて九天をして歸せしむ。正中の妙挾、回互を通ず。擬議すれば、鋒鋌威を失却す。」

金剛般若に曰く、「我が説法の如きは、筏の喻の者の如し。法尙ほ應に捨つ可し、何に況んや非法をや」と。西天此土、聖賢の釋する者、無慮千餘人、然れども無着の佛の意を得るに如くこと莫し。^③雙林大士、又從つて之を申明す。無着此に於て判じて言説法身と爲す。意に以謂へらく、筏とは言説なり、人と俱にすと雖も、然れども亦類せず、筏の水中に行いて、實に住せざるが如し。非法は二邊なり、筏に在りて且た類せず、豈二邊に於て止住せんや、故に何況非法と曰ふ。大士の偈に曰く、「河を渡るには、須らく筏を用ふ可し、岸に到るには、艇を須ひす。人法俱に執と名づく、理を悟らば、誰か詮を勞せん。中流仍ほ溺せらる、誰か二邊に在ることを論せん。有無如一を取らば、即ち心田を汚されん」と。故に曹洞の宗旨に、混するこ

① 苟然。かりそめ。
② 無着。印度の人。
③ 那吒。目(那)目(吒)にて文字といふ義。
④ 雙林。承工。

と得ず、類して齊しからずの語あり。
⑤ 雲峰の悅禪師、再び泐潭に遊び、重ねて南禪師に會ふ。別を叙べ、舊を講じて、相得て甚だ懽ぶ。久しくして、更に一たび石霜の慈明老人に見えしむ。既に石霜に至り、山前の莊に憩ふ。其の坦率の風を聞いて、來るを悔い、因つて復た門を過らず、徑に南岳の福嚴に迫る。未だ期月ならざるに、^⑥記室を掌る。俄かに長老賢公化し去る、郡、慈明を以て來して之に居らしむ。初め夜參に、諸方の異解を貶刺するを聞くに、皆其の平生艱難して得る者なり。是に於て嘆服して、即ち誠を投じて道を問ふ。三たび往いて、三たび罵らる。退いて忿に勝へず、業已に之に歸す。明日復た往く、慈明罵ること故の如し。因つて啓して曰く、「某、唯だ解せざるを以ての故に、來り問ふ、善知識は、宜しく方便を施すべし、開示を蒙らず、専ら罵を以て爲す、豈從上法を授くる所以の式ならんや。」慈明驚きて曰く、「南書記、我れ汝は是れ箇の人と謂へり、乃ち罵るの會を作す耶。」黃龍其の語を聞き、桶底の脱するが如し、拜起して汗下る。從容に趙州の因縁を論じて、偈を呈して曰く、「叢林に傑出する是れ趙州、老婆の勘破來由没し。如今四海清くして鏡の如し、行人路の與に響を爲すこと莫れ。」慈明之を聞て笑つて曰く、「偶甚だ佳なり、但だ一字を易へよ。」曰く、「老婆の勘破來由有り」と。其の機智妙密なること又此の如し。黃龍辭し去るとき、白して曰く、「大事畢竟如何ん。」慈明呵して曰く、

⑤ 雲峰文悅。大愚芝に嗣ぐ、汾陽三世。
⑥ 記室。書記、禪宗役僧の名。
⑦ 長老。衆の首長。
⑧ 勘破。見届けるの意。

と得ず、類して齊しからずの語あり。
⑤ 雲峰の悅禪師、再び泐潭に遊び、重ねて南禪師に會ふ。別を叙べ、舊を講じて、相得て甚だ懽ぶ。久しくして、更に一たび石霜の慈明老人に見えしむ。既に石霜に至り、山前の莊に憩ふ。其の坦率の風を聞いて、來るを悔い、因つて復た門を過らず、徑に南岳の福嚴に迫る。未だ期月ならざるに、^⑥記室を掌る。俄かに長老賢公化し去る、郡、慈明を以て來して之に居らしむ。初め夜參に、諸方の異解を貶刺するを聞くに、皆其の平生艱難して得る者なり。是に於て嘆服して、即ち誠を投じて道を問ふ。三たび往いて、三たび罵らる。退いて忿に勝へず、業已に之に歸す。明日復た往く、慈明罵ること故の如し。因つて啓して曰く、「某、唯だ解せざるを以ての故に、來り問ふ、善知識は、宜しく方便を施すべし、開示を蒙らず、専ら罵を以て爲す、豈從上法を授くる所以の式ならんや。」慈明驚きて曰く、「南書記、我れ汝は是れ箇の人と謂へり、乃ち罵るの會を作す耶。」黃龍其の語を聞き、桶底の脱するが如し、拜起して汗下る。從容に趙州の因縁を論じて、偈を呈して曰く、「叢林に傑出する是れ趙州、老婆の勘破來由没し。如今四海清くして鏡の如し、行人路の與に響を爲すこと莫れ。」慈明之を聞て笑つて曰く、「偶甚だ佳なり、但だ一字を易へよ。」曰く、「老婆の勘破來由有り」と。其の機智妙密なること又此の如し。黃龍辭し去るとき、白して曰く、「大事畢竟如何ん。」慈明呵して曰く、

「著衣喫飯、是れ畢竟にあらず、屙屎送屎、是れ畢竟にあらず。予嘗て福嚴に遊ぶ。其の山川の形勝を覽る、思大の記する所を讀むに、曰く、「此の山は人の志力を増す、之に居る者は多く道を得ん。故に祖宗の授法、之に因らざること莫し。大法の興ること、必ず人に依ると雖も、然も馬祖此に於て、讓公の記前を受けて、其の道大いに江西に振ふ、今慈明、黃龍の事迹、復た相類す。亦怪しむに足れり。」

① 生法師曰く、「空を敲けば響を作す、木を撃てば聲無し。」法眼禪師、忽ち齋魚の聲を聞き、侍者に謂つて曰く、「還つて聞く麼、適來若し聞かば、如今聞かす、如今若し聞かば、適來聞かす、會す麼。」

僧有り、嘗つて三生藏に登り、思大が平生持つ所の錫を取りて、之を

立つ。疑慮横に生ずれば、終に定まること能はず、忽ち自ら念じて曰く、「當に一切放下すべし」と。却つて即ち錫を擧げて之を置く。錫、卓然として傾かず。以て予に問ふ、「其の故何ぞ哉。」予曰く、「特に錫に於て、則ち然るのみに非ず、凡そ事、若し心有らば、即ち差悞を成す。試に兒童の紙を剪るを觀よ、心を擬すれば即ち失す、心を擬せざれば、徑ちに往いて難無し。故に道人は、須臾も照を忘る可らざるなり。」

首楞嚴に曰く、「汝元一切の浮塵、諸の幻化の相は、當處に出生し、隨處に滅盡することを知らず。」

① 思大。南岳福嚴禪を記す。
② 生法師。南岳三生の宗師也。
③ 齋魚。魚板を齋のときにたたく。
④ 三生藏。南岳に在り。

涅槃に曰く、「譬へば、猛火の薪を焼くこと能はずして、火出でて木盡くるを、名づけて薪を焼くと爲すが如し。」般若燈論に曰く、「根境理同じく然り、智者何ぞ驚異せん。」禰子此に於て見徹せば、方に阿字法門に入らん。

康僧會は、天竺の人なり、赤烏十年に、初めて建業に至り、苒茨を營立し、像を設けて行道す。孫權、矯異を爲すかと疑ひ、召し問うて曰く、「何の靈驗有る。」對へて曰く、「如來の遷迹、忽ち千載を逾ゆ。遺骨舍利、神耀無方なり。昔し阿育王、塔を起すこと、八萬四千に至る、塔寺の起るは、遺化を表するなり。」權曰く、「若し舍利を得ば、當に爲に塔を造るべし、如し其れ虚妄ならば、國に常刑有り」と。會、請ふて七日を期す。乃ち其の屬に謂つて、共に淨室を結び、銅瓶を以て凡に加へ、香を焼いて禮請す。期に至り應無し。會、伸ぶるを求めて三七に至る。忽ち瓶中に鎗然として聲有るを聞く。果して舍利を獲て、以て權に示す。權、群臣と聚り觀るに、五色人に屬く。權、大いに驚いて起つて曰く、「希有の瑞なり」と。釋の曇諦、父形常は、冀州の別駕たり。母は黃氏、晝寢ねたり。一僧呼んで母と爲し、一の塵尾、並に鐵鏤の書鎮二枚を寄すと夢む。既に覺めて、兩物俱に存す。因つて懷娠して諦を生む。此の二物は、乃ち諦の前身、宏覺法師たりしとき、姚長の爲に、法華を講じて獻せらる。宏覺の命を捨つるを追釋するに、正に是れ物を寄せし日なり。會は、眞誠の

① 赤烏十年。三國時代、吳の年號、日本神功皇后の頃。
② 阿育王。マウリヤにて佛滅二百年出世の外護の王。
③ 鎗然。しゅつとふきあがる。
④ 塵尾。拂子。

至るを以て、能く生ながら舍利を致し、誦は、大願の所持を以て、亦死して長物を將つてす。嗚呼、真誠大願の力、尙ほ能く生死を反易するまで、如意自在なり。況んや心城を守護する者を耶。

⑤ 莊子に言く、「舟を壑に藏し、山を澤に藏す」と。釋する者、語を遣ること流るゝが如し。天下を

天下に藏すと曰ふに至りては、未だ 嗒然危坐し、筆を置いて思はざる者有らず。晦堂老人、嘗つて

學者に問ふ、「此の義如何ん」と。對ふる者甚だ衆し。晦堂笑つて曰く、「汝善く道理を説く。予偈を作

りて、其の意を記して曰く、「天下心に知る、藏す可からざることを、紛々

として迹を嗅ぎ、但々香を尋ぬ。端に能く百尺竿頭に歩いて、始めて林

梢に角を掛くる羊を見ん。」又問ふ、「列子に載す、兩の小兒、日の遠近を論

じ、決せずして孔子に質す、孔子答へず」と。其の意何にか在る。學者皆

曰く、「聖、夫子の如きも、亦能く此の理を辨すること莫し、是を以て説無きなり」と。晦堂亦之を笑

ふ。予、偈を作りて、之を釋いて曰く、「涼温遠近、轉た疑を増す。答へざるは、渠れが痛處に當つて

雖す、尙ほ小兒を逐ふて、争ふて未だ已まず、仲尼何ぞ獨り古知り難からん。」

⑥ 歐陽文忠公、昔し洛中に官たり。一日嵩山に遊ぶ、僕吏を却け去り、意を放にして、往いて一

の山寺に至る、門に入れば、脩竹軒に滿つ、霜清く鳥啼いて、風物鮮明なり。文忠、殿陛に休す、旁

ら老僧あり、經を閲て自若たり。與に語るに、甚だ顧み答へず。文忠之を異みて曰く、「道人住山久如

なりや。」對へて曰く、「甚だ久し。」又問ふ、「何の經を誦す。」對へて曰く、「法華經。」文忠曰く、「古の高

僧、生死の際に臨み、類ね皆談笑脱し去る、何の道か之を致す耶。」對へて曰く、「定慧の力耳。」又問ふ、

「今は乃ち寂寥として有ること無きは何ぞ哉。」老僧笑つて曰く、「古の人は、念々定慧に在り、臨終に安

んぞ亂るゝことを得ん。今の人は、念々散亂に在り、臨終に安んぞ定まることを得ん」と。文忠大いに

驚き、自ら膝の屈むことを知らず。謝希深嘗つて文を作りて、其の事を記す。言法華、梵相奇古な

り、直に視て瞬かす。時に獨り語笑す、多くは市里に行き、裳を褰げて趨

る。或は指を擧げ空を畫して、佇立すること良久し。屠沽に従つて遊ぶ、

飲啗擇ぶ所無し。道俗共に目して狂僧と爲す。⑦ 懷禪師、未だ出家せざる

時、師之を見て其の背を撫でて曰く、「徳山、臨濟」と。丞相呂許公、佛

法の大意を問ふ、對へて曰く、「本來無一物、一味總て眞と成る。」僧問ふ、「世に佛有りや否や。」對へ

て曰く、「寺裏の文殊」と。師に、凡たる耶聖たる耶と問ふもの有れば、手を擧げて曰く、「我れ此に在

りて住せず」と。將に化を示さんとして、遺偈を作る。其の旨曉る可からず、已にして曰く、「我れ無

量劫より來、⑧ 逝多國土を成就して、分身揚化す。今南に歸る矣」と。語り畢つて、右脇にして寂す。

⑨ 慶歴戊子十一月十三日なり。

⑩ 照覺禪師、元豐の間に、東林の律居を革めて叢林と爲す。天下の弟子、風を望んで集る、咸く信

⑦ 懷禪師、未詳。
⑧ 逝多國土、即ち天然を指す。
⑨ 慶歴、北宋仁宗の年號。
⑩ 照覺、常總、黃龍南に嗣ぐ、東坡の師なり。

⑤ 莊子、莊周の著作。
⑥ 嗒然、わするること、思ふこ
とを忘る。
⑦ 歐陽文忠公、歐陽修、大學者
也。

敬畏仰し、以て肉身の居士と爲す。其の賞識を被る者は、必ず名諸方に聞ゆ。然れども未だ嘗て輕しく人に予へす。①羅漢の小南禪師、②雲居の祐公に嗣ぐ。道眼明白なり、未だ人の爲に知られず。嘗て東林に至る、照覺、鐘を鳴らし衆を集めて、清溪の上りに出迎ふ。其の徒大いに驚く、是より南の名、日に益々顯著す。③佛印禪師、再び雲居に歸る、④靈源叟、初め龍山より來り、衆と群居して、痛く自ら韜晦す。佛印、陞座して衆に白し、請じて以て座元と爲す、其の禮數特に異なり。靈源之を受く、叢林の學者日に親み、晦堂老人の法道有る在るを知る矣。嗚呼、先徳の法器を成就して、増々世に重んぜしむること、其の法此くの如し。⑤堯、⑥四凶を誅し、十六子を擧ぐるに能はざるには非ず、留めて以て舜を遲つ耳。古の聖人と雖も、爲す所能く是れを外にすること莫し。二老は其れ亦此れを知る者歟。

- ①羅漢。系南、雲居祐に嗣ぐ、黃龍南三世。
- ②雲居元祐。黃龍南に嗣ぐ。
- ③佛印。前出。
- ④靈源。惟清。
- ⑤座元。禪宗の役僧名、分座せらるるみぶん。
- ⑥堯。支那の聖帝。
- ⑦舜。支那の聖帝。
- ⑧古塔主。雲門の法嗣と自稱す。
- ⑨青華。投子青、大陽支に嗣ぐ。
- ⑩浮山遠公。圓覺禪師、美縣省に嗣ぐ、首山三世。

古塔主、雲門の世を去ること、無慮百年、而も其の嗣と稱す。①青華嚴、未だ始めより大陽を識らず、特に②浮山遠公の語を以ての故に之に嗣いで疑はず、二老は皆傳言を以て、之を行ふこと自若たり。其れ己に於ては甚だ重く、法に於ては甚だ輕し。古の法に於て重んずる者は、永嘉、黃檗是なり。永嘉は、維摩を閱るに因りて、佛心宗を悟る。而も往いて六祖に見えて曰く、「吾れ宗旨を定めんと欲す」と。黃檗は、馬祖の意を悟りて、而も百丈に嗣ぐ。故に百丈、嘆じて以て及ばすとせり。

地藏の③珠禪師、能く大いに④雪峰、⑤玄沙の道を振ふことは、其の大法を秘重し、⑥恬退して自ら處るの效なる歟。予嘗て、其の人と爲りを想見するに、城隈の古寺、門死灰の如く、道容清深なり。禪客に戯れて曰く、「諸方の説禪浩浩地なり、争でか我が此間、田を栽ゑて飯に替へて喫せんには如かん」と。旨ある哉。予初め黃龍山に居りし時、⑦禪和子十二時の偈を作りて曰く、「吾が活計、觀る可き無し、但だ日々一般を長す。夜半は子、困じて死するが如し、虱に咬まれて、脚指を動かす。雞鳴は丑、粥魚吼ゆ、忙しく裙を繫けて、襪紐を尋ぬ。平旦は寅、忽ち缺申す。兩眉稜、重きこと千斤。日出は卯、自ら攪炒す、眼に經を誦して口相拗す。食時は辰、齒に津を生ず、肚皮に輸し、口唇を虧く。禺中は巳、眼前の事、看見親し、説不似。日南は午、衣自ら補ふ、忽ち針を穿つて、全體露る。日⑧暎は未、方に睡を破る、面を洗開し、鼻を摸着す。晡時は申、最も天真、順なれば便ち喜び、逆なれば便ち瞋る。日入は酉、壁に口を掛く、鏡中の空、日中の斗。黃昏は戌、作用密なり、眼開闔して、⑨烏準律。人定は亥、説けば便ち會す、法身は眠る。

- ①珠。應真、漳川羅漢寺に住す、玄沙に嗣ぐ。
- ②雪峰。義存、徳山に嗣ぐ。
- ③玄沙。師備、雪峰に嗣ぐ。
- ④雪峰。玄沙の珠。
- ⑤恬退。しづかにしりぞく。
- ⑥禪和子。又は禪衲子。或は禪那子とも曰ふ、禪僧なり、和は、六和合の義に取る。
- ⑦攪炒。かきみだしている、炊事のこと。
- ⑧暎。日かたむく。
- ⑨烏準律。準はけはしきこと。

無被蓋、坐して叢を成し、行ひて隊を作す、活潑々々、無障礙。若し動著せば、赤肉の艾、本一事の營爲す可き無し。大家相聚りて莖菜を喫す。」

雲峰悦禪師、初め高安の大愚に至りて、芝和尚に見ゆ。芝問うて曰く、「汝來りて何の求むる所ぞ。」對へて曰く、「佛法を學ばんと擬す。」芝曰く、「佛法豈容易に學ぶ可けんや、色力強健を趁ふて、衆の爲に飯を乞ふこと一遭して、學ぶこと未だ晚からず。」悦天姿純至にして、其の言を信受し、即ち往いて行乞す。既に還る、芝移りて翠巖に居す。悦又芝の所に詣り、入室を求む。

芝曰く、「佛法は且く置く、大衆夜寒くして炭を須む。更に當に炭を乞ふこと一次すべし、學未だ晚からず。」悦又行乞して、炭を載せて歸る、且示誨を求む。芝曰く、「佛法は、爛却することを怕れず、維那方に人を缺く、子當に職に就くべし、辭すること勿れ」と。遂に、榿椎を鳴らして、衆に白して之を請す。悦難る色あり。拜起して追悔して棄て去らんと欲す。業已に之に當れり。中に因つて休す。然も恨らくは、芝公の意、果して如何と云ふことを曉らざるを。一日、破桶を束ぬ、篋を引き、盆に觸れて地に墮つ、遂に大悟す。方めて芝公の用處を見る、走りて芝に見ゆ。芝笑つて呼んで曰く、「維那、且喜すらくは、大事了畢せり。」悦未だ一言を吐くに及ばざるに、再拜して、汗雨の如くにして去る。故に其の門風孤峻にして、未だ嘗つて之に構たる者有らず。南禪師嘗つて大寧の

① 大愚。汾陽照に嗣ぐ。
② 炭。くれ。炭は年末といふに同じ。
③ 榿椎。木の立てに六角にしたものを槌でならず、木板の類。
④ 大事了畢。悟りの修行がなはりした云ふ。

老原に語つて曰く、「渠れ人人悟解此の如きことを欲すれども、豈得べけん哉。」神鼎證禪師、少年の時、數者宿と南岳に遊ぶ。一僧宗乘を舉論す、頗る博敏なり。會々山店の中に野針し、供辨すれども而も僧論説して已ます。證曰く、「上人、三界唯心、萬法唯識と言ふ、唯識唯心、眼耳鼻色、何人の語ぞ。」僧曰く、「法眼大師の偈なり。」證曰く、「其の義如何。」對へて曰く、「唯心の故に根境相到らず、唯識の故に聲色、攪然たり。」證曰く、「舌味は是れ根境なりや否や。」對へて曰く、「是。」證、箸を以て菜を挾んで口に置き、舍胡して言つて曰く、「何をか相入と謂ふや。」坐する者、相顧みて大いに驚き、能く答を加ふること莫し。證曰く、「路塗の樂、終に未だ家に到らず、見解微に入る、見道と名けず、參は須らく實參なるべく、悟は須らく實悟なるべし、閻羅大王、多語を怕れず。」

① 攪然。みだる。
② 舍胡。明かにならぬを云ふ。うにやうにや口をして。
③ 閻羅。えんま大王。
④ 元曉。金剛三昧經疏の作者。
⑤ 盤見。みなかのことも。
⑥ 海堅。れふしのことも。
⑦ 爾汝。人を輕蔑するの語、孟子にも出づ。

金剛三昧經は、乃ち二覺圓通、菩薩行を示すなり。初め、元曉、疏を造るとき、其の本始二覺を以て宗と爲すことを悟る。故に牛車に坐して、几案を兩角の間に置き、據りて以て草文す。圓覺經は、皆證圓覺、無時無性を以て宗と爲す。故に經首の叙文に、時處を標せず、其の翻譯の代を考ふるに及びて、史に復た書せず。曉公は事を設けて法を表す、圓覺は佛意に冥合す。其れ自覺心靈の影像なるか。

曹溪の六祖大師、其の韜晦の時に方りて、居止を編民に雜へ、勞旅を商農に混すること、十有六年、
 蠻兒^② 海豎、販夫竈婦、以て追呼して、爾汝することを得たり。其の徳、人に加はり、道、天下
 に信するに及んで、累朝の天子と雖も、得て之を師友とせず。其の行、聖賢の分なり、故に貴賤の
 異を知ること莫し。大宋の高僧傳に曰く、「天子累りに召せども、祖竟に往かず。」曰く、「吾れ貌揚ら
 す、北人之を見れば、必ず法を輕んせん」と。是れ果して祖師の言ならんや、不仁者の言なり、至人
 何ぞ嘗て形骸を以て郵と爲さん。況んや其の天形道貌、慈を以て物を攝する者、其れ肯て自ら信せざ
 らん耶。

石頭和尚、南臺に庵すること年あり。偶々米を負ふて山に登る者を見る。之に問ふ、曰く、「供米を
 送るなり」と。明日即ち庵を移して、梁端に下り、遂に梁端に終ふ。塔有りて存す。百丈寺は、
 絶頂に在り、毎日力め作して、以て其の供を償ふ。之を止めよと勸むる者有り、則ち曰く、「我れ徳の
 以て人を勞する無し」と。衆、忍びず、作具を藏し去る。因つて食はず、故に一日作さざれば、一日
 食はずといふの語あり、先徳、身を卒へること、多くは此くの如し。故に六祖は、石を以て腰を墜し、
 牛頭は、糧を負ふて衆に供す。今少年の 苾芻、鉢を撃げ、^③ 錘類して曰
 く、「吾が臂酸し」と。

雪竇禪師、^④ 祖英の頌古を作る。其の首篇に、初祖、梁武に契はざるを

①苾芻。小僧等を云ふ。
 ②蠻類。顔をしめる。
 ③祖英。祖英集一卷あり。

頌じて曰く、「闔國の人追へども再來せず、千古萬古空しく相憶ふとは、老蕭の遇はざるを重嘆する
 詞なり。昧者、乃ち其の事を前に叙して曰く、「達磨既に去る。」誌公問うて曰く、「陛下、此の人を識る
 や否や、蓋し觀音大士應身のみ、佛心印を傳へて、此の土に至る、奈何んぞ禮を爲さざらん耶」と。
 老蕭之を追はんと欲す。誌公曰く、「借使闔國の人追へども、亦復り來らず矣」と。雪竇、豈誌公は、
 天監十三年に没し、而して達磨は、普通元年を以て金陵に至ると云ふことを知らざらんや。予是を以
 て知んぬ、此を叙するは、雪竇の意に非ずと。今傳寫して、又蓋國と作す、
 益々笑ふ可し。又洞山の 麻三斤を頌して曰く、「憶ふに堪へたり、長慶
 の 陸大夫、道ふことを解す、哭す合さや、哭す合からずや」と。憶ふに、
 長慶の語を用ふ、長慶、陸大夫の此の語を聞いて、哭して乃ち衆に問うて
 曰く、「且く道へ、哭す合さや、哭す合からずや」と。事、傳燈錄に見えた
 り。而も昧者易へて曰く、「笑ふ合し、哭す合からず」と。其の旨を失する
 こと甚だし矣。王文公、禪者を見て、多く 韓退之が 大顛に見えし事を問ふ。往々に公に對して妄
 談する者あり。公、禪者の辭を吐く、臆説多く、義理を問はざることを嗟惜す。故に謗を要する者、
 多く此を以てす。宗教に志有る者は、當に之を考證すべし。苟もすべからざるなり。
 僧、予に問ふ、「八識を轉じて四智と成すこと、從上の宗師、頗る其の義を釋する者有りや。」予

①老蕭。武帝を云ふ、蕭氏なればなり。
 ②麻三斤。公案の也。
 ③長慶。慧稜、雪峰存に嗣ぐ。
 ④陸大夫。陸巨、南泉顔に嗣ぐ。
 ⑤韓退之。名は愈、大文豪。
 ⑥大顛。大顛禪師也。

曰く、「曹溪偶有り、最も詳かなり。」曰く、「大圓鏡智、性清淨なり、平等性智、心病無し。妙觀察智、見、功に非ず。成所作智、圓鏡に同じ、五八六七果因に轉ず。但だ其の名を轉じて實性無し。若し轉處に於て、情を留めざれば、繁興して永く那伽定に處す」と。五識第八の親相分を以て、故に成所作智、圓鏡に同じと曰ふ、是れ皆果上に方に轉ず。第六第七、別體なきが故に、但だ能く了知すれば、即ち性平等なり、是れ皆因中に轉ずるなり。

英邵武、開谿明濟の姿あり、蓋し從上宗門の爪牙なり。嘗つて雲居に客として、室を掩ふて人と交はらず、四海を下し視るに、其の意に可なる者有ること莫し。曰く、「吾れ將に此の山に老死せんとす」と。偶々夜、李長者の十明論を讀み、因つて大悟す。久しうして夜、經行す。二僧の、老黃龍、佛手、驢脚の因縁を

① 那伽。以對龍也、龍は佛也。
② 李長者。華嚴學者。
③ 經行。禪堂のうんどう。

擧するを聞き、之を異とす。就いて問ふ、「南公今何の所にか寓す。」對へて曰く、「黃檗に在り。」黎明徑に造る、南公一見して與に語り、自ら及ばずと以謂り。又往いて、翠巖の眞點胸に見えて、方に入室す。眞問うて曰く、「女子出定の意旨如何ん。」英、手を引き其の膝を掴みて去る。眞笑つて曰く、「匙箸を賣る客、未だ眞、是より、其の機辯、窠臼を脱略すと知りて大いに之を稱賞す。是に於て、一時の學者宗向す。晩に、衆僧に圓通に首たり。南公、僧の廬山より來るを見ては、必ず問ふ。曾て英首座に依觀するや否や、識らずと云ふ者あらば、則ち曰く、「汝行脚して廬山に到る、英首座を識ら

ざるは、是れ寶山に手を徒らにするの説なり」と。南公の在世には、肯て開法せず。南公化し去つて、師曰く、「大法我れを捨てて、其れ誰か能く之を荷はん耶」と。遂に出世して泐潭に住す。偈語有り甚だ多し。今止だ其の三首を記す、以て其の人と爲りを想見す可し。曰く、「石門路險鐵關牢。舉目重々萬仞高。無角鐵牛衝得破。毘盧海內鼓三波濤。」又曰く、「萬鍛爐中鐵蒺藜。直須高價莫レ饒レ伊。橫來豎去呵々笑。一任旁人鼓是非。」又曰く、「十方齊現一毫端。華藏重々帝網寒。珍重善財何處去。清宵風撼碧琅玕。」

達觀禪師、嘗て竊かに禪者の義理を問はざることを笑ふ。宗門に四種の藏鋒あるが如きは、初めに曰く、「理に就く。」次に曰く、「事に就く。」「理事俱に藏するに至りては、則ち入つて就く」と曰ふ。「俱に理事に涉らざるは、則ち出でて就く」と曰ふ。
① 毘盧。最大と翻す。
② 夾山。會禪師也。
彼れ字畫を視ずして、輒く就理を易へて、袖裏と作し、出就を易へて、出袖と作し、入就を易へて、入袖と作す。就事は易ふ可からず。則ち孤り之を令す。今徳山四家の録に載する所、具さに存す。晩生末學をして、長老の袖中に必ず一物の出入往來を疑ふ、大いに笑ふ可きなり。晦堂老人、禪者の漫汗なるを見て、則ち笑つて曰く、「彼れ出家して、便ち八陽經を誦する者に依り、師と爲す矣」と。其の見聞、必ず淵源有らん。

南院和尚曰く、「問は答處に在り、答は問處に在り。」夾山曰く、「明中に横骨を抽んで、暗中に舌

頭に坐す。上座の玄旨は、是れ老僧が舌頭、老僧が玄旨は、是れ上座の舌頭。」又曰く、「舌頭を坐却して、別に見解を生ぜよ、他の活意に參じて、死意に參せざれ。」達觀曰く、「纔かに唇吻に涉れば、便ち意思に落つ、並に是れ死門なり、故に活路に非ず、直饒ひ透脱するも、猶ほ沈淪に在り」と。予嘗て惟しむ、洞山、臨濟提倡の旨歸、多く相同じ、蓋し前聖、物の爲にする法式の大意を得たり。楞嚴に曰く、「此の方の眞の教體は、清淨音聞に在り。」故に舊說に多く言ふ、達磨は乃ち觀音の應身なりと。楞伽以て心を印す可しと指す。則ち其の旨、蓋し嘗て佛語心を宗と爲すと曰ふが故なり。又曰く、「南岳の讓公も、亦觀音の應身なり、其の意を味ふに、苟然に非ざるが若き者なり。」

①楞伽。經の名也。
②苟然。かりそめにも、さうとは。

僧有り、予に謂つて曰く、「古人、大修行の人、還つて因果に落つるや、また無やと問ふが如きは、或は答へて曰く、「不落。」或は答へて曰く、「不昧。」如何なるか是れ大悲千手眼」と問はゞ、或は答へて曰く、「通身是。」之を聞く者有らば、則ち曰く、「我れは則ち然らず。」曰く、「偏身是。」或は、「如何なるか是れ佛」と問はゞ、或は答へて曰く、「臭肉等しく蠅を來たす。」之を聞く者あらば、曰く、「我れは則ち然らず、破驢脊上に蒼蠅足れり。」或は、「二問を借つて、以て影草と爲さんと擬する時如何ん」と問はゞ、答へて曰く、「可必。」之を聞く者有らば、曰く、「何ぞ箇の不必と道はざる」と。諸尊宿の所示の如きは、何を以て其の優劣を分たん、其の旨に達することを得ば、法

に於て無礙にして、一切の語言、揀擇を用ふる事無く、手に信せて拈じ來ると謂はんや。則ち彼れ皆問答の錘を輕重して、之を較べ、機に臨んで直に須らく別辨すべしと謂はんや。則ち彼れの理致具さに在り、若し同異すべき無ければ、此れ吾が嘗て疑ふ所、釋くこと能はざるなり」と。予曰く、「我れ子の疑を解かず、然れども聞く、世尊在せし日、比丘有り、根鈍にして多聞の性無し。佛、苾芻の二字を誦せしむ。日夕に之を誦す。苾芻を言へば、則ち已に苾芻を忘れ、苾芻を言へば、則ち又苾芻を忘る。毎に自ら尅して責め、念を係けて休まず。忽ち能く言つて、苾芻と曰ふ。此に於て大悟して、無礙辯才を得たり。子能く苾芻を誦する者の如くせば、當に先徳大慈悲の故に、物の爲にするの心を見るべし。」僧、響應して去る。

③比丘。優特の事なり。
④響應。懼れて言ふ貌。

法昌倚遇禪師は、北禪賢公の子なり。住山三十年、刀耕火種す。衲子門を過ぐれば、必ず之を勘詰す。英邵武、聖上座は、皆黃龍の高弟なり、之と友として善し。法句多く叢林に徧し。晦堂老人、嘗て之に過ぎて、問うて曰く、「承り聞く、和尚近日草堂を造ると、工を畢るや否や。」曰く、「已に工を畢ふ。」又問うて曰く、「幾く工にか成す可き。」曰く、「止だ數百工を用ふ。」遇悲つて曰く、「大好草堂。」晦堂手を拈つて笑つて曰く、「且く天下の人の疑著することを要す」と。臨終の時、人をして徐徳占を要せしむ。徳占、靈源禪師に偕だちて、馳せ往く。至れば則ち方に寢室に坐して、院事什物を以て、監寺に付して曰く、「吾れ此に住してより、今日に至るまで、常住を護惜する

を以ての故に、毎に自ら之に莅む。今行かん矣、汝が輩、精彩を著けよ」と言ひ畢つて、手中の杖子を擧して曰く、「且く道へ、這箇阿誰にか付與せん。」衆、對ふる者無し。地に擲ちて、床に投じ、臂を枕にして化す。

① 首山和尚、嘗て傳法綱要の偈を作りて曰く、「咄咄拙郎君。機妙無人識。打破鳳林關。穿靴水上立。」『咄咄巧女兒。停梭不解織。貪看闘雞人。水牛也不識。』汾陽無德禪師、之を注釋す。然れども學者猶は曉ること莫し。則ち知んぬ、古人神悟穎脫の資、今人企て及ぶ可からずして、遠きこと甚だし。予嘗て嗟いて之を誦す。淳化三年十二月五日、衆に謂つて曰く、「老僧今年六十七、老病相依つて日を過す。今年記取せよ明年の事、明年記取せよ今年の日、明年に至つて時皆爽ふ」と無し。復た衆に謂つて曰く、「白銀世界金色身、情と無情と共に一眞、明暗盡くる時俱に照さず、日輪午の後全身を示す」と。日午に安坐して化す。

大般若經に曰く、「諸の天子、竊かに是の念を作す。諸の藥叉等の言辭咒句、復た隱密なりと雖も、而も當に知る可し。尊者善現、此の般若波羅密多に於て、種々の言辭を以て、顯示すと雖も、而も我れ等が輩、竟に解すること能はずと。善現、彼れが心の所念を知り、便ち之に告げて言く、「汝等天子、我が所説に於て、解すること能はざるか。」諸天子言く、「如是如是、具壽善現、復た告げて言く、「我れ

曾て此に於て、一字を説かず、汝も亦聞かず、當に何の解する所かあるべき。何を以ての故に、甚深般若波羅密多是、文字言説、皆遠離するが故に、此の中に由らば、説者、聽者、及び能く解する者、皆不可得なり。一切の如來、應正等覺、所説の無上正等菩提、其の相甚深なること、亦復た是くの如し」と。曹溪大師、將に入滅せんとせしとき、方に敢て此の令を全提するは、大乘の種性、純熟するを知るが故なり。僧、新州に歸る意旨を問ふ。乃ち曰く、「葉落ちて根に歸す。來時口無し」と。江西の馬祖、南岳の石頭に至りて、則ち大いに之を振耀す。故に石頭を號して眞吼と爲し、馬祖を全提と爲す。其の機鋒、大火聚の如し、之に擬すれば則ち死す。學者、乃ち意思を以て解せんと欲す、亦悞らす哉。

嵩 明教毎に嘆す。「沙門の高尙なるは、大聖慈蔭の力なり、而も晩世紛々たる者、自ら之を卑賤にす。其れ天子を見て、臣と稱するの禮無し。臣の言たる、公卿大夫の職なり、當に僭越して、取つて之を有すべからず。唐の令瑄、暗識にして、首めて其の端を壞る。歷世之に因つて疑はず。彼の山林野逸の人すら、天子猶ほ之を臣とすることを得ず、況んや沙門をや」と。故に其の正宗記を進むる表に、皆首尾に臣某と言ふて、以て故事を存す。其の間に至りて、自ら叙するに當つては、則ち亦止だ名を稱する而已。當時の公卿之を閲て、其の高識を重んず。予昔、湘中に遊び、沙門の道場を作るを見るに、南岳帝君を召すに至り、則ち躬を屈め、倡へて曰く、「臣僧某」

① 首山。省念、風穴沼に嗣ぐ。
② 淳化。北宋太宗の年號、三年は日本一條天皇正曆三年に當る。
③ 明教。契嵩、洞山曉に嗣ぐ、雲門三世。
④ 大聖。釋尊。

と。此れ又何ぞや。

予頃、京淮、東吳の間に遊ぶ。法席至盛なり。然れども主法の者太だ謙し、以て先徳の式を壞る。前輩の升堂の如きは、衣を攝むること定まり、侍者問訊して退く。然して後、大衆敬を致し、側ち立つて肅み聴く、法を重んずるを以ての故なり。主法者に於て何か有らん哉。今は則ち然らず、長老、座に登り拱立して、以て大衆の立定まるを遅ちて、乃ち敢て坐す。獨り江西の叢林、古格易へず。然れども、予、今日の事勢を以て之を観るに、恐らくは他日、京淮、東吳よりも甚だしきこと有らん。

仁宗皇帝、大覺禪師と法喜の游を爲す、宸を和する詞句甚だ多し。

然れども皆上の語に蹤迹して、初より敢て新奇宏妙の言を出さず。其の平日の所作を観るに至りては、則ち驚絶の句甚だ夥し。世に其れ瓦注を爲すかと疑ふは非なり。昔、宋の文帝、鮑明遠を以て、中書舍人と爲す。文帝、文章を好む。自ら謂へらく、人及ぶこと莫しと。明遠其の旨を識る、故に文を爲るに鄙言多し。世謂へらく、其の才盡くと。實は然らざるなり。大覺、身世兩ながら忘す、明遠が、委曲にして君に事ふるの比に非ず。而して仁宗皇帝は、生ながらにして道妙を知り、詞章を涕唾にす。決して宋文の能く髣髴する所に非ず。然れども予は璉公の智深くして、機に應ずるの法、爾らざるを得ざることを知るなり。

- ① 升堂。大殿なる法堂にて説法する式。
- ② 運。まつ。
- ③ 仁宗。宋主。
- ④ 大覺。璉、潯潭澄の法子、育王に住す、雲門五世。

端師子は東吳の人なり、西余山に住す。初め師子を弄する者を見て、遂に悟入す。因つて彩素を以て、皮の色を制爲し、或は堂に升りて客を見るとき、則ち之を披る。雪朝に遇ひ、披て以て城に入る。小兒追逐して諱し。錢を得ば、悉く以て飢寒の者に施す。歳歳以て常と爲す。法華經を誦して功あり、湖人争ふて之を迎ふ。經を開き數句を誦して則ち錢を携へ去る。好んで漁父の詞を歌ふ。月夜には之を歌ふて且に達す。時に狂僧あり、回頭和尚と號す、流俗を鼓動す、士大夫亦其の妄を安んず。潤の守呂公と肉を食するに方りて、師徑に趨り至り、之を指して曰く、「正當與廢の時、如何なるか是れ佛」回頭窘んで以て對ふること無し。師、其の頭を捶ち、推倒して去る。又狂僧不托と號する者あり、秀州に於て説法す、聽く者城を傾く。師、擲住して問ふ、「如何なるか是れ佛」不托擬議す。師、之を趨つて去る。師、初め開堂す、俞秀老疏を作り、其の事を叙して曰く、「回頭を推倒し、不托を趨翻す。七軸の蓮經未だ誦せざるに、一聲の漁父先づ聞く。師、僧官の宣して此に至るを聴き、手を以て耶揄して曰く、「止みね」と。乃ち座に登り、倡へて曰く、「本是れ瀟湘の一釣客、東より西より南北よりす」と。大衆雜然として善と稱す。師顧み視て笑つて曰く、「我れ法王の法を觀するに、法王の法如是」と。下座徑に去る。童子厚、師を請じて墳寺に住せしむ。方に對して食し、子厚、言之に及ぶ。

- ⑤ 端師子。白雲守端、楊岐に嗣ぐ。
- ⑥ 彩素。或は彩帛に作る。素は白練なり。
- ⑦ 擲住。とらへとどめて。
- ⑧ 開堂。入寺開堂と云ふ、嗣法の説法の式、禪宗法式の第一にして法輪を轉するの始め。
- ⑨ 僧官。天子より賜はる僧位。

師、目を噴らし、偈を説いて曰く、「章惇、章惇、我を請じて看填せしめ、我は却つて素を喫し、懶は却つて葷を喫す。」子厚爲に大笑す。呂延安は坐禪を好む、而して子厚は鍛を喜ぶ。師、偈を作り、之に示して曰く、「呂公は坐禪を好み、章公は仙を學ぶを好む、徐六、^⑦ 喻擔板、各自に一邊を見る」と。
^⑧ 圓照禪師、方に身を慧林に乞ふて、南の方姑蘇に歸る。師を丹陽に見て、問うて曰く、「師は端師子に非ず耶。」師曰く、「是。圓照之に戯れて曰く、「汝は村裏の師子耳。」師、聲に應じて曰く、「村裏の師子村裏に弄す、眉毛眼と一齊に動く、口を開却すれば、肚裏直くして籠統、人の取奉を愛せず、直饒ひ弄して帝王宮に到るとも、也是れ一場の乾打閑」と。其の意復た圓照の嘗て詔に應じて、都城に住くことを戲るが故なり。

大覺禪師、昔し南岳の三生藏に居ること年あり。叢林、^⑨ 璉三生と號す。

文學議論、時の名公卿の爲に敬畏せらる。予嘗て其の孫莘老に與ふる書を得て、之を讀み、其の天下の奇才たることを知るなり。其の畧に曰く、「妙道の意、聖人嘗て之を易に寓す。周衰へ、先王の法壞れ、禮義亡ぶるに至つて、然して後、奇言異術、間々出でて俗を亂す。我が釋迦、中土に入るに迫んで、醇ら^⑩ 第一義を以て人に示す。而して始末、慈悲を設爲して、以て衆生を化す。亦時に趣く所以なり。生民より以來、淳樸未だ散せず、則ち三皇の教、簡にして素なるは春なり。情實日に鑿つに及ん

⑦ 喻擔板。一方に疑る者。
 ⑧ 圓照。圓照本禪師。
 ⑨ 乾打閑。俗語なり、事文類聚に、合坐皆笑ふの義とす、俗に謂ふ「からさわぎ」の意。
 ⑩ 第一義。大悟の法なり、禪宗にては之を第一義と云ふ。

で、則ち五帝の教、詳にして文なるは夏なり。時、世と異に、情、日に隨つて遷る、故に三王の教、密にして嚴なるは秋なり。昔し商周の誥誓、後世の學者、曉り難き所あり。彼の當時の人民之を聽いて違はず、則ち俗今と如何ぞや。其の弊にして秦漢と爲るに及んでや、則ち至らざる所無し。而も天下聞くことを願ふに忍びざる者有り。是に於て、我が佛如來、一へに之を推すに、性命の理を以てし、之を教ふるに、慈悲の行を以てするは冬なり。天に四時あり、循環して以て萬物を生成す。而して聖人の教、迭に相扶持し、以て天下を化成すること、亦猶ほ是のごとき而已矣。然れども其の極に至りてや、皆弊無き能はず。弊は迹なり、道は一耳。要は當に聖賢者有りて、世に起つて之を救ふことあるべきなり。秦漢より今に至るまで、千有餘歲、風俗靡々として愈々薄し。聖人の教、列つて鼎に立ち、互に相誣訾して、所從を知らず、大道寥々として、之を返すこと莫し、良に嘆す可きなり」と。子之を讀んで、置くに忍びず、王文公、^⑪ 韓子を非るを觀るに及び、其の詞意此れと相合せり。其の文に曰く、「人、孟子の楊墨を拒むを樂ふて、佛老を以て己が功と爲すこと有り、嗚呼、莊子の謂はゆる夏蟲とは、其れ斯の人の謂ひ乎。道は歲なり、聖人は時なり、一時を執して、歳を疑ふ者は、終に道を聞かず矣。夫れ聖人の言、時に應じて設く。昔は常に是なる者、今は蓋し非なり。士、其の常に是なることを知つて、因つて以て變ず可からずと爲す。變する所の者は言にして、同じき所の者

⑪ 塵塵。なびく。
 ⑫ 鼎。かなへの如くに。
 ⑬ 韓子。非子。
 ⑭ 夏蟲。なつのむし、人の識見の狭小にたとへる。

は道なることを知らず。曰く、然らば則ち孰れか正しき。曰く夫れ春は冬より起ちて冬を以て終と爲す。天下の道術を終る者は、其れ釋氏か。是に至らざる者は、皆謂はゆる夏蟲なり。大般若經に曰く、「應に欲界色界無色界の空なることを觀すべし、善現、是の菩薩摩訶薩、此の觀を作す時、心をして亂れしめず、若し心亂れざれば、則ち法を見ず、若し法を見ざれば、則ち證を作さず。」又曰く、「金翅鳥の虚空に飛騰して、自在に翱翔し、久しく墮落せざるが如し。空に依つて戲ると雖も、而も空に據らず、亦空の爲に拘礙せられず。」昔し洞山の悟本禪師、五位偏正を立て、以て大法を標準す。三種の滲漏を約して、以て褙子を辨す。意に斷じ苟くも爲すに非ず、皆本佛の遺意なり。今の叢林、滲漏の語を聞き、往々に鼻笑す、悟本復た出づと雖も、安んぞ能く爲さんや。

大般若經に曰く、「一切智智清淨、無二、無二分、無別、無斷なるが故に」と。古の宗師、臨濟、德山、趙州、雲門の徒の如きは、皆此の意に洞達す。故に一切時に於て、心太虚に同じ。物の爲に則を爲すに至りては、則ち用ひんと要せば便ち用ふ。聊か其の一戲を觀るに、則ち將つて大千を搏取すること、陶家の手の如し。未だ了證せざる者は、當に事を以て明かすべし。草を鞭たば血流れ、頑石吼聲す。則ち情と非情との異無し。雪中に竹に啼かば、笱之が爲に苗す。則ち今昔の時無し。指を嚙んで子を悟つて、蔡順來り歸る、則ち間隔の處無し。自ら猶子に乳して、德秀乳流る、則ち男女等の相無し。肇公曰く、「傷ましい夫、人情の惑へることや」

①肇公。羅什の弟子、姚秦の人。
②寒山子。寒山といふ仙僧に

久し、目して眞に對すれども覺ること莫し」と。亦是を以てする而已。

山谷禪師毎に曰く、「世に相貌を以て、人の福を見ること、是れ大いに然らず、福本象無し、何を以てか之を觀ん。惟其の人の量の淺深を視る耳。」又曰く、「人の壽夭を觀るには、必ず其の用心を視る、夫れ動もすれば、欺誑に入る者、豈長世の人ならんや。」寒山子曰く、「語直ければ背面無し、心眞なれば罪福無し」と。蓋し心語相應は、人の常に然る者たり、而して前聖之を貴ぶこと以あり、世道の交々喪ふを見ること甚だし。大瀉の眞如禪師、一生門弟子に誨ふるに、但だ事を作すこと實頭なれと曰ふ。雲蓋の智禪師、示す所有るには、必ず曰く、「但だ心を瞞すること莫れ、心自ら靈聖なり。」と。

て、詩に長ず、寒山詩。
①眞如。大瀉眞如禪師。
②雲蓋。守智、黃龍南に嗣ぐ。
③地爐。禪堂の中にあり火をたいて暖をとるところ。
④褙。袖なし羽織。

予、湘山の雲蓋に在るとき、地爐に夜坐し、
① 帷を以て首に蒙りて、夜久しく僧の相語るを聞くに、曰く、「今四方皆臨濟の兒孫、平實の禪を説くを誘る。例に隨ひ、虚空中に筋斗を抛つ可からざるなり、須らく悟を求めしむべし。箇の什麼をか悟る。古人悟れば、則ち土を握つて金と成す、今の人悟れば、正に是れ鬼を見ると説く。彼れ皆狂解未だ歇まず、何れの日か家に到り去らん。」僧曰く、「只だ趙州に『承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆし、是なりや否や』と問ふが如きは、答へて曰く、『鎮州に大羅衛頭を出す』と、此の意如何ん。」其の僧笑つて曰く、「多少分明なり、豈獨り臨濟下のみ此れを用つて

予、湘山の雲蓋に在るとき、地爐に夜坐し、
① 帷を以て首に蒙りて、夜久しく僧の相語るを聞くに、曰く、「今四方皆臨濟の兒孫、平實の禪を説くを誘る。例に隨ひ、虚空中に筋斗を抛つ可からざるなり、須らく悟を求めしむべし。箇の什麼をか悟る。古人悟れば、則ち土を握つて金と成す、今の人悟れば、正に是れ鬼を見ると説く。彼れ皆狂解未だ歇まず、何れの日か家に到り去らん。」僧曰く、「只だ趙州に『承り聞く、和尚親しく南泉に見ゆし、是なりや否や』と問ふが如きは、答へて曰く、『鎮州に大羅衛頭を出す』と、此の意如何ん。」其の僧笑つて曰く、「多少分明なり、豈獨り臨濟下のみ此れを用つて

人を接せんや。趙州も亦老婆なることは是くの如し」と。予戲に之に語つて曰く、「この僧問端未だ穩かならず、何ぞ如何なるか是れ天下第一等の生業」と問はざる、答へて、「鎮州に大蘿蔔頭を出す」と曰はゞ、平實更に分明なり。彼れ南泉に見ゆるを問うて、而して此れを以て對ふること、却つて虛空中に筋斗を打するを成す。聞く者、傳へて以て笑ひを爲す。」

靈源禪師、予が爲に言ふ、彭器資、毎に尊宿に見えて必ず問ふ、「道人命終に多く自由なり」と。

或は云ふ、「自ら旨決有り」と。聞く可き乎。往々に妄りに之に言ふ者あり、器資竊かに之を笑ふ。暮年に乞ふて濫江に守たり、禮を盡して、晦堂老人に致す。郡齋に至り、日夕道を問ふ。從容に問うて曰く、「臨終に果して旨決有り乎。」晦堂曰く、「之れ有り。」器資曰く、「願くは其の説を聞かん。」答へて曰く、「公の死する時を待つて、即ち説かん。」器資、覺えす起立して曰く、「此の事、須らく是れ和尚にして始めて得べし。」予、其の言を嘆味して偈を作りて曰く、「馬祖伴有らば則ち來らん、彭公死する時即ち道はん、睡裏虱子人を咬む、手に信せて摸り得れば、革蚤。」

- ①筋斗。もんどり。
- ②虱。音シツ。
- ③革蚤。のみ。
- ④楊大年。億居士、翰林學士、廣慧連に嗣ぐ、首山三世の名居士なり。
- ⑤山林。叢林と同じ意。

余夜僧と楊大年が作る所の佛祖同源集の序を閲る。「昔し如來、然燈佛の所に於て、親しく記莂を蒙る。實に少法の得可き無し、是を大覺能仁と號す」と曰ふに至りて、巻を置いて長嘆す。大年は士大夫なり、其の辯慧、以て佛祖無傳の旨に達するに足れり。今山林の弟子、反つて首を仰いで、人に從つて禪道佛法を求む、笑ふ可しとす。僧曰く、「石頭大師曰く、『竺土大億の心、東西密に相付す。』豈其れ妄に之を言はん耶。」予謂つて曰く、「子、其の文を讀むこと誤れり、謂はゆる密付とは、醫巫の家に、其の術を以て、人に背いて相爾汝するが若くなるに非ざるなり。直に其をして自ら悟明せしむるを、密と爲す耳。故に長慶の獻禪師曰く、『二十八代の祖師、皆傳心を説いて、傳語を説かず、但だ疑情を破つて、終に佛の心體上に於て、話頭を答へ出さす。』道明上座、六祖に大庾嶺頭に見ゆるが如きは、既に發悟して則ち曰く、『此の外更に密意有りや也た無や。』六祖曰く、『我が適に説く所は密意に非ず、一切の密意、盡く汝が邊に在り』と。特に然らずや、釋迦の如きは、然燈佛の所に於て、但だ授記を得る而已。如し法の傳ふ可き有らば、即ち之を付與せん矣。阿難亦嘗て猛省して曰く、『將に謂へり、如來我に三昧を惠み給はんと。』前聖の語訓具さに在り、以て心に鏡みつ可し。然のみならず、香嚴は擊竹の聲を聞き、馮山を望んで再拜す、高亭は江を隔て、徳山に見えて、即ち横に趨り去る。何を以てか、密に耳語せん哉。」

- ①竺土。印度の釋迦さま、悉同契の語。
- ②長慶。嶺。
- ③話頭。古則公案。
- ④香嚴。智閑、馮山に嗣ぐ、唐の名僧、昭宗乾寧二年化す。
- ⑤高亭。簡、徳山に嗣ぐ、唐の名僧。
- ⑥曹山。本寂、洞山悟本に嗣ぐ、唐の曹洞の祖。
- ⑦耽。耽の俗字なり、曹山の諱なり。

曹山の本寂禪師 耽章の曰く、「正命食を取る者は、須らく三種の塵を具すべし。一には披毛戴角。二には不斷聲色。三には不受食。」時に會中に、稠布袴と云ふ者あり、問ふ、「披毛戴角、是れ什

麼の墮ぞ。答へて曰く、「是れ類墮。」進んで曰く、「不斷聲色、是れ什麼の墮ぞ。」答へて曰く、「是れ隨墮。」進んで曰く、「不受食、是れ什麼の墮ぞ。」答へて曰く、「是れ尊貴墮。」因つて又爲に其の要を擧して曰く、「食とは即ち是れ ① 本分の事なり、本分の事、有ることを知つて取らず、故に尊貴墮と曰ふ。若し初心を執つて、自己及び聖位有ることを知る、故に類墮と曰ふ。若し初心に ② 己事有ることを知つて、光を回す時、聲色香味觸法を擯斥して、寧謐を得て即ち功勳を成し、後に却つて ③ 六塵等の事を執りて、分に随つて之に味任せざれば、即ち礙へらる。所以に ④ 外道六師は、是れ汝の師なり。彼の師の墮する所、汝亦随つて墮せば、乃ち食を取る可し。食とは即ち是れ正命食なり。食すれば亦是れ却つて六根門頭に就いて、見聞覺知す。只だ是れ他に染汚せられざるを將つて墮と爲す。且つ是れ向前他に均しきに同じ。本分の事すら尙は取らず、豈に況んや其餘事をや。曹山、凡そ墮と言ふは、混すること得ず、類すること齊しからざるを謂ふ耳。凡そ初心と言ふは、謂はゆる悟了同未悟耳。」

唐 溫 尚書 造、嘗て圭峰の密禪師に問ふ、「理を悟り妄を息むの人は、復た業を結ばず、一期壽終の後、靈性何くにか依る。」密、書を以て之に答へて曰く、「一切衆生、覺靈空寂を具せざることは、佛と殊なること無し。但だ無始劫來、未だ嘗て了悟せざるを以て、身を妄執して、我相と爲す。

- ① 本分の事。生死の大事を云ふ悟の根本。
- ② 己事。悟心のこと。
- ③ 六塵。色、聲、香、味、觸、法。
- ④ 外道六師。印度にある外道等のるゝにたとへる。
- ⑤ 溫。姓。
- ⑥ 尚書。唐の官名。
- ⑦ 造。名。

故に愛惡等の情を生じ、情に随つて業を造り、業に随つて報を受け、生老病死、長劫に輪廻す。然れども身中の覺性は、未だ曾て生死せず。夢に驅使せられて、身本安閑なるが如く、水の氷を作れども、而も濕性異ならざるが如し。若し能く此の意を悟らば、即ち是れ法身本自ら無生なり、何ぞ倚託有らん。靈々として味まず、了々として常に知る。從來する所無く、亦所去無し。然れども多生妄に習ひ、執つて以て性成し、喜怒哀樂、微細流注す。眞理然も顛達すと雖も、此の情以て率に除き難し。須らく長へに覺察して、之を損して又損すべし。風の頓に止んで波浪漸く停るが如し、豈一身の修する所、便ち佛の用に同じうす可けんや。但だ空寂を以て自體と爲す可し、色身を認むること勿れ。眞如を以て自心と爲し、妄念を認むること勿れ。妄念若し起らば都て之に隨はざれ。即ち命終の時に臨んで、自然に業、繫ぐこと能はず、中陰有りと雖も、所向自由にして、天上人間、隨意に寄託す。若し愛惡 已に泥びなば、分段の身を受けず、自然に短を易へて長と爲し、龜を易へて妙と爲す。若し、微細の流注、一切の寂滅は、圓覺の大智、朗然として獨り存す。即ち随つて千百億の身を現じて、有縁の衆生を度す、之を名けて佛と曰ふ。本朝の韓侍郎宗古、嘗て書を以て、晦堂老師に問うて曰く、「昔、和尙に聞いて開悟し、曠然として疑無し。但だ無始より以來、煩惱習氣、未だ頓に盡くることが能はず、之を奈何が爲ん。」晦堂答へて曰く、「敬つて、書中に論及することを承る。昔時、開悟、曠然疑無し、但だ無

- ⑧ 已泥。原本、已泥の上、情の字を逸するに似たり。
- ⑨ 曠然。ひろく大なり。

始以來の習氣、未だ頓に盡くこと能はず。然れども、心外に剩法無ければ、煩惱の習氣を知らず、是れ何物としてか、而も之を盡さんと欲する。若し此の心を起さば、翻つて賊を認めて子と爲るに成る。從上以來、但だ言説有るは、乃ち是れ病に隨つて藥を設く。縦ひ煩惱習氣有るも、但だ如來の知見を以て之を治す。皆是れ、善權方便、誘引の説なり。若し是れ定めて習氣の治す可き有らば、却て是れ心外に法として之を盡す可き有り。譬へば、靈龜の尾を塗に曳いて、迹を拂へば、逆生するが如し。謂つ可し、心を將つて心を用ふれば、轉た病を見ること深し。苟くも能く明達すれば、心外に法無く、法外に心無し。心法既に無し、更に誰をして頓盡せしめんと欲する邪。伏して來論を奉じて、略ぼ少答を叙べて、以て山中の信と爲す耳。二老は古今の宗師なり、其の隨宜方便、自ら意味有り、初めより優劣無し。然れども圭峰答ふる所の詞は、正に韓公所問の意なり。而も語、宗を失はず、正見を開廓することは、密を以て之を晦堂に較べば、所得多からん矣。

永明和尚曰く、「夫れ祖佛の正宗は則ち眞の唯識なり、才かに信處有らば、皆人の爲にす可し。若し修證の門を論せば、諸方皆云ふ、功未だ諸聖に齊しからず。且つ教中に許す所、初心の菩薩は、皆比知す可し、亦教に約して會することを許す。先づ開解を以て信入して、後に無思を以て契同す。若し信門に入らば、便ち祖位に登る。且く現今世間の事に約するに、衆生界の中に於て、第一に比知、第二に現知、第三に教に約して知る。」第一に比知とは、且く即今有漏の身の如きは、夜皆夢有り、夢

中に見る所、好惡の境界、憂喜、宛然たり、覺め來れば床上に安眠す、何ぞ曾て是れ實ならん。並に是れ夢中の意識、思想の所爲なり。則ち覺時所見の事、皆夢中の如くにして、實無しと比知す可し。夫れ過去、現在、未來三世の境界は、元是れ第八阿頼耶識の親相分なり。唯だ是れ本識の所變なり。若し現在の境は、是れ明了、意識分別す。若し過去未來の境は、是れ獨散の意識思惟す。夢覺の境殊なりと雖も、俱に意識を出す。則ち唯心の旨、比況、昭然たり。第二に現知とは、即ち是れ事に對して分明なり。況を立つるを待たず、且つ現に青白の物を見る時の如きは、物、本自ら虚なり。我れ青、我れ白と言はず、皆是れ眼識、同時の意識に分與し、計度分別して、青と爲し、白と爲す。意を以て辨じて色と爲し、言を以て説いて、青と爲す。皆是れ意言なり。安より安置し、六塵鈍を以ての故に、體、自ら立せず。名、自ら呼ばず。一色既に然り、萬法咸く爾り、皆自性無し、悉く是れ意言なり。故に曰く、「萬法本閑なり、而して人自ら闢し。」是を以て若し心起る時あらば、萬境皆有なり。若し心の起處を空しうせば、萬境皆空なり。則ち空、自ら空ならず、心に因るが故に空なり。有、自ら有ならず、心に因るが故に有なり。既に空に非ず有に非ず、則ち唯識唯心なり。若し心を無にせば、萬法安くにか寄らん。又過去の境の如き、何ぞ曾て有ならん。念の起處に隨ひ、忽然として現前す。若し想、生ぜざれば、境終に現せず、此れ皆衆生の日用、以て現知す可し。功成ることを待たず、豈修得を假ら

①宛然。さながら。
 ②阿頼耶識。Ālaya-vijñāna 識又は無没と譯す。
 ③昭然。あきらま。

んや。凡そ心有る者は、並に證知す可し。故に先德曰く、「大根人の唯識を知る者の如きは、恒に自心の意言を觀じて、境と爲す。此の初觀の時、未だ聖と成らずと雖も、分に意言を知る、則ち是れ菩薩なり。」第三に、教に約して知るとは、大經に曰く、「三界唯心、萬法唯識。」此は是れ所證の本理、能證の正宗なり。予嘗て此の言を三復せり。佛祖の所示、廣大坦夷にして、明白簡易なること此くの如し、而も亦之を誦信する者有ること鮮きは何ぞや。清涼國師、言有り、曰く、「行人、勤、勇、念、知、顯修の儀に當り、貪等の世事、無始の惡習を以て之を離ること甚だ難し、世間の慈父の、孝子に離るるよりも過ぎたり。故に須らく精進して、方に能く除遣すべし。勤は則ち策勵を勤めて、勇猛にして息まざらんことを欲す。念は則ち明記して忘れず。知は則ち決斷して悔なし。予、清涼の訓を守り、以て永明の旨に遵ふて、諸々の同志と與に、圓寂道場に入らんことを願ふ。

嵩明教、初め洞山より康山に遊び、迹を開先の法席に託す。主者、其の年少にして、文學に銳きを佳しとするを以て、命じて書記を掌らしむ。明教笑つて曰く、「我れ豈汝が一盃の薑杏湯の爲にせんや。因つて之を去り、杭の西湖に居す。三十年、關を閉ちて、妄りに交はらず。嘉祐中に、譏する所の輔教編、定祖の圖、正宗記を以て、關に詣して之を上る。翰林王公、素時に開封に權た

- ① 坦夷。たひら。
- ② 清涼國師。華嚴宗の祖、名は澄觀、唐の初の人、圭峰の師なり。
- ③ 書記。記室と同じ、禪宗役僧の名。
- ④ 薑杏湯。梅湯に當るべし。
- ⑤ 嘉祐。北宋仁宗の年號。
- ⑥ 關。宮闕にて御所也。

り。表を爲り、朝に薦む。仁宗皇帝、加嘆すること之を久しうす。其の書の中書に下す。宰相韓公、參政歐公、其の文を閲て大いに驚き、朝の士大夫に譽む。書竟に藏に入ることを賜ふ。明教の名、遂に天下に聞ゆ。晩に移りて、靈隱の北、永安蘭若に居す。清旦、金剛般若經を誦して音を輟めず、齋罷んで書を読む。賓客至れば、則ち清談して世事に及ばず。嘗て曰く、「客去つて清談少く、年高うして白髮鏡し」と。夜分に觀世音の名號を誦す、十萬聲に満ちて寢に就く、其の苦硬清約の風、以て鍾山の僧遠に追配するに足れり。予嘗て其の手書を見るに、月禪師に與ふるに曰く、「數年より來、紙被一翻を製し、以て苦寒を禦がんと欲す、今幸に已に之を成す。想ふに、之を聞いて、大いに笑はん」と。臨終に安坐微笑して、筆を索め偈を作りて曰く、「後夜月初明。予將獨自行。不學大梅老。猶貪鼯鼠聲。」師、法を洞山の聰禪師に得たり。而るに宗派の圖、德山遠公の法嗣の列に系くるは誤れり矣。

- ① 藏に入る。一切經の中に入る。
- ② 蘭若。寺と譯す。
- ③ 僧遠。鍾山の清僧也。
- ④ 洞山。靈門匡眞、德山緣密、文殊應眞、洞山曉暉、明教契嵩、雲居舜老夫。

國譯石門洪覺範林間錄卷上終

國譯石門洪覺範林間錄卷下

大覺禪師、皇祐二年、十二月十九日、仁宗皇帝、詔して後苑に至らしめ、化成殿に齋す。齋畢り、宣を傳へて、南方禪林の儀範に効ひ、開堂演法せしむ。又左街副僧録、慈雲大師清滿に宣して、啓白せしむ。滿、恩を謝し畢り、倡へて曰く、「帝苑春回つて、皇家會々啓く、萬乘既に舜殿に臨む、兩街堯眉に奉することを獲たり。爰に和煦の辰に當り、正に是れ闡揚の日なり。宜しく祖道を談じて、上、宸衷に副ふべし。謹んで白す」と。璉、遂に座に陞る。問答罷んで、乃ち曰く、「古佛堂中、曾て異説無し。流通の句の内に、誠に多談有り、之を得る者は、妙用虧くること無く、之を失ふ者は、途に觸れて滯を成す。所以に溪山雲月、處々風を同じうし、水鳥樹林、頭々道を顯はす。若し迦葉門下に向はば、直に得たり。堯風蕩々、舜日高明、野老謳歌し、漁人鼓舞することを。此の時に當つて純ら無爲の化を樂しむ、焉んぞ愆廢の事有ることぞ知らん」と。皇情大いに悦ぶ。

杜祁公、張文定公、皆致政して睢陽に居す、里巷相往來す。朱承事と云ふ者有り、醫藥を以て二老の間に遊ぶ。祁公勁正にして、未だ嘗て雜學せず。毎に安道が佛に依することを笑ふ、賓客に對し

①宣、勸宣。
②承事、官名。

て、必ず此を以て之を嘲ける。文定但だ笑ふ而已。朱承事、間に乘じて文定に謂つて曰く、「杜公は、天下の偉人なり、惜しい哉、未だ此の事を知らず、公、力有り、盍んぞ之を勸發せざる。」文定曰く、「君、此の老と縁熟すること、我れに勝れり、我れ止だ能く之を助けん耳。」朱、嚙齧して去る。一日、祁公、朱を呼んで切脈せしむ、甚だ急なり。朱、使者に謂つて曰く、「汝、先づ往いて相公に白せ、但だ、首楞嚴を看ること、未だ了らすと云へ。」使者、告ぐる所の如く、馳せ白す。祁公默然たり。久しうして乃ち至る、几に隠りて揖して坐せしむ。徐ろに曰く、「老夫、君疏通して事を解すと以へり、意はざりき、近ごろ亦、闢茸に例す。謂はゆる楞嚴の如きは、何等の語にして、乃ち爾も、耽着す。聖人の微言は、孔孟に出でたるは無し、此を捨て、彼れを取る、是れ大なる惑なり。」朱曰く、「相公、未だ此の經を讀まず、何を以てか孔孟に及ばざるを知らん。某、之を觀るを以てせば、之に過ぎたるに似たり」と。袖中より、其の首卷を出して曰く、「相公試に之を閱よ。」祁公熟々朱を視て、已むことを得ずして乃ち取り、默看す、覺えず軸を終ふ。忽ち起つて大いに驚き、曰く、「世間何れよりしてか此の書有るや」と。使を遣はして、盡く其餘を持ち來らしめ、徧く之を讀む。朱が手を捉へて曰く、「君は眞の我が知識なり、安道之を知ること久し、而も以て我に告げざるは何ぞや。」即ち駕を命じ來し、文定を見て其の事を叙ぶ。安道曰く、「譬へば、人の物を失つて、忽ち已に尋ね得るが如し。但

③嚙齧、おつおつする。
④闢茸、猥賤なり、いやしきこと。
⑤耽着、耽は耽に同じ。

だ當に其の之を得るを喜ぶべき而已。之を得るの早晚を追悔す可からざるなり。僕、相告げざるに非ず、公と朱君と、縁熟するを以ての故に、之を遣はす耳。佛祖の人を化すと雖も、亦必ず同事に藉るなり」と。祁公、大いに悦ぶ。

荆州 福昌の善禪師は、明教寛公の子なり、人と爲り、敬嚴にして、大法を秘重す。初め住持の時、屋廬十餘間、殘僧三四輩のみ。善、晨香夕燈、陸座說法、千衆に臨むが如し。而して叢林の受用、宜しく有るべき所の者は、咸く之を修備す。過客至れば、肅然として敬を増す。十餘年にして、弟子方に集る、天下風に向つて長く想ふ。南禪師、悦公と亦會下に在り、南公曰く、「我れ時に寒を病む。薬を服し被を須めて、汗を出す。文悦をして徧院に之を借らしむ、皆有ること無し。百餘人例して、紙を以て之を爲す、今は則ち然らず。重氈の上に、褥を以て之を覆ふ、一日三覺、快活の時世と謂ふべし。」

華嚴論に曰く、「若し法性に隨はば、萬相都て無し、若し智力に隨はば、衆相隨つて現す。隱顯縁に隨ふこと、都て作者無し。凡夫は執着して用つて、無明と作す、執障既に無ければ、智自在なり。」永明禪師曰く、「一眞の境を離れず、化儀百變す。是を以て箭、石虎を穿つ、功力の能くする所に非ず。酔ふて三軍に告ぐ、豈麴蘖の造する所ならんや。筍、寒谷に抽んづ、陽和の生する所に非ず、魚、冰河に躍る、豈網羅の致す所ならんや。悉く心の感を爲して、此の靈通

① 福昌。重善。
② 明教師寛。雲門に嗣ぐ。
③ 悦。雲峰、大愚芝に嗣ぐ、汾陽三世。
④ 麴蘖。かうぢ。

を顯はす。故に知んぬ、萬法の施爲、皆自心の力耳。」

金峰の玄明禪師は、曹山の 耽章禪師の嗣なり、道貌奇古にして、機辯衆に冠たり。一日陸座して曰く、「事存すれば函蓋合ふ、理應すれば箭鋒挂ふ。若し人道ひ得れば、我れ半院を分つて、伊れに興へん。」時に僧有り衆を出づ。明、座を下りて約住して曰く、「相見は好きことを得易く、事を共にすれば人の爲にし難し」と、去る。

大本禪師、年八十にして、蘇州の靈巖山に終ふ。行に臨み、門弟子請ふて曰く、「和尚、道天下に偏し、今日、偈告安坐無くんばある可からず。」本、熟々視て曰く、「癡子、我れ尋常、尙は偈を作るに懶し、今日特地に什麼をか圖らん。尋常、臥せんと要せば便ち臥す、今日特地に坐す可からざるなり。」紙筆を索めて、五字を大書して曰く、「後事、守榮に付す」と。筆を擲ち、
① 耽臥。ぐうぐうねると云ふの意。
② 耽章。曹山耽章禪師。
③ 本禪師。靈巖大本禪師。

首楞嚴經に、二種の轉依とは、一には、染を轉じて淨を得、二には、迷ひを轉じて悟を得、菩提は是れ生得。謂く、二障障へて生ぜず。故に今障を斷じて得るを生得と名づく、涅槃は名づけて顯得と爲す。本性清淨なれども、客塵翳ふが故に、今斷じて、彼れ顯を名づけて顯得と爲す。然れども、轉位に六有り、第一、損力益能轉、謂く、初二位、勝解慚愧力を以て、本識中、染種の勢力を損し、

淨種の功能を益して、漸く現行を伏するを亦名づけて轉と爲すなり。第二に通達轉。見道達眞の力に由りて、二障の籠を斷じ、一分の眞實を證する、轉依なるが故に。第三に、修習轉。謂く、地地漸く俱生を斷じて、眞を證する轉依なり。第四に、果滿轉。謂く、究竟位、金剛定を以て、永く本來一切の龜重を斷じ、頓に佛果圓滿を證する轉依なり。第五に、下劣轉。謂く、二乘は苦を厭ひ寂を欣び、眞の擇滅を證して、堪能に勝ふること無きが故に。第六は、廣大轉。謂く、大乘位には、俱に欣厭無し、二空に通達し、二障を雙へ斷じ、頓に無上菩提を證す、堪能に勝ふこと有るが故に。

唐の高僧、懶瓚と號す、衡山の頂、石窟の中に隱居す。嘗て歌を作る、其の畧に曰く、「世事悠悠、不如山丘。臥藤蘿下。塊石枕頭」と。其の言は宏妙にして、皆佛祖の奥を發す。德宗其の名を聞き、使を遣はして、詔を馳す。詔の使者、其の窟に即いて宣言す。「天子詔有り、尊者幸くは起つて恩を謝せよ。」瓚、方に牛糞火を撥き、煨芋を尋ねて之を食す。寒涕膺に垂れ、未だ嘗て答へず。使者之を笑ふ、且つ瓚に涕を拭へと勸む。瓚曰く、「我れ豈工夫の俗人の爲に涕を拭ふ有らん耶。」竟に致すこと能はずして去る。德宗之を欽嘆す。予嘗て其の像を見るに、垂願瞋目、氣韻超然として、犯干す可からざる者の如し。爲に其の上に題して曰く、「糞火但知る黃獨の美、銀鈎那ぞ識らん紫泥の薪、尙は心緒の寒涕を收むる無し、豈工夫の俗人を問ふ有らんや。」

懶瓚。唐の德宗頃の仙僧。

律部に曰く、「昔し一國有り、大いに亂る、民争ふて他邦に逃る、道旁の室廬皆空なり。一老兵之に過る、呱呱の聲を聞き、入りて之を視れば、嬰兒の屋梁を仰視する有り。老兵隨つて之を觀るに、乃ち飯の糲を懸くる耳。爲に解開して之に示すに、則ち灰なり。嬰兒之を見て即ち死す。蓋し其の母、棄て去らんと欲するとき、殺すに忍びず、此の糲を懸けて、給いて此は飯なりと云ふ。故に其れ念を係けて忘れず、其の灰たるを識つて、則ち餘想無し矣。乃ち知ぬ、三界生死の留滯は、皆想の所持なり。故に古の達法の大士、臨終に超然として自得するは、別道無し、但だ法の根源を識る而已。」

の糲。はらおび。

叢林に相傳ふ、「石頭和尚、身を施して虎に食ふ。祝して曰く、「我が宗如し、他日大いに振はゞ、必ず先づ吾が足を食せよ。」虎果して足よりして食す」と。予竊かに之を笑ふ、紹聖の初め、南臺に遊び、秦布衲が、石頭の明上座を祭る文を見るに、其の身を施して虎に食ふを叙べて、甚だ詳かなり。乃ち知ぬ、後人明むこと能はず、遂に相傳へて、遷禪師と爲すなり。又曰く、「清涼の法眼禪師、臨終に書を以て李國主に別る、主、所居に幸す、而して法眼去らず、侍者壓すに米糲を以てして卒す」と。本傳を按ずるに、法眼は周の顯德五年、戊午七月十七日を以て疾を示す。閏月、剃髮沐浴して、衆に告げて坐逝す。未だ嘗て先づ書を以て國主に約せざるなり。而るに韓希載、悟空禪師の碑を作りて、則ち曰く、「師、臨終に書を以て皇帝に別る、中夜に鐘聲を聞き、昇元閣に御して、泣いて之を送る」

と。又曰く、洞山の悟本禪師、母の行乞するを見て、伴りて識らざることを爲す。母竟に路旁に死す。往いて之を視るに、米數合有り、爲に大衆の粥鍋中に投じて、以て冥福を薦む」と。悟本は獨り、寒溪に庵して、百結にして最も年有り、新豊に住するに至り、已に六十餘、巖頭、雪峰、欽山、三人相尋いで至りしより、是に於て、衆を積むること幾んど千人、則ち母蓋し翅だ八十歳のみならず矣。借使ひ其の子の顯著なるを聞けども、東吳より、孤行して來ること、亦難からずや。又曰く、「玄沙、出家せんと欲し、其の父の従はざるを懼れて、同じく魚を捕ふるに方り、因つて母を覆へして、之を溺死せしむ」と。玄沙は天資高妙なり、必ずしも爾らず。獨り知らず、何の據る所にして、便ち爾く疑はざる。此れ直だ不情の者之を記して、以て自ら藏む、安んぞ先徳を誣毀して、罪逆と爲すとも、必ず其の咎に任する者有るを知らん、慎まざる可からざるなり。

香山居士 白樂天、心を内典に醉はしむ、之と與に遊ぶ者は、多く高人勝士なり。其の濟上人に與ふる書を觀るに、深を鉤め、隱を索りて、精確高妙なり。未だ嘗て卷を置き長嘆して、其の人と爲りを想見せずんばあらず。恨らくは濟公の所答を見ざることを。因つて濟上人の樂天に答ふる書一首を補ふことを作す。樂天の問詞を并せて此に録す。

①日月、弟子太原の白居易、濟上人の侍者に白す。昨者に頂調の時、愚蒙を以てせず、言、佛法に及ぶ。或は未了の者、重ねて討論を許せ。今經典の間、未論の者、其の義二有り、面り問答を欲すれ

①白樂天。居易、唐代名儒。
②日月。何月何日。

ども、恐くは彼此 卒々にして、語言盡きす。故に粗ぼ文字に形はす。願はくは、詳かに之を覽て、敬んで報章を佇んで、以て未悟を開け、所望所望。佛、無上の大慧を以て、一切衆生を觀じ、其の根性の大小等しからざることを知りて、方便智を以て、方便法を説く。故に ① 闡提の爲には、十善の法を説き、小乗の爲には、② 四諦の法を説き、中乗の爲には、十二因縁の法を説き、大乘の爲には、③ 六波羅密の法を説く。皆病根に對して、投するに良藥を以てす。此れ蓋し方便教中、不易の典なり。何となれば、若し小乘人に對して、大乘の法を説かば、心則ち狂亂狐疑して信せず、謂はゆる大海を以て、牛跡に内るること無れとなり。若し大乘人の爲に、小乗の法を説かば、是れ穢食を以て寶器に置く。謂はゆる彼れ自ら瘡無し、之を傷むこと勿れとなり。故に維摩經に、其の義を總べて云く、「大醫王と爲り、病に應じて藥を與ふ。」又首楞嚴三昧經に云く、「先づ何の法を説くことを思量せざらんや、其の所應に隨ひ、而も爲に説法す」と。正に是れ此の義耳。猶ほ説法者の人の根性に隨はざるを恐るるなり。又法華經に戒めて云く、「若し但だ、佛乘を贊せば、衆生、苦に没在して、是の法を信すること能はず」と。法を破して信せず、故に此くの如きは、獨り説者の病を救ふこと能はざるを慮るのみに非ず、亦恐らくは聞く者信せずして、罪苦に没在することを。則ち佛の付囑、豈丁寧ならずや。何んぞ則ち法王經に曰く、「若し根基を定めて、小乗人の爲に、小乗の法を説き、大乘人の爲

① 卒卒。には、かに。
② 闡提。信不具と譯し、外道者也。(Tschankha)
③ 四諦。苦、集、滅、道。
④ 六波羅密。布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧をいふ。

に、大乘の法を説き、闍提人の爲に、闍提の法を説かば、是れ佛性を斷じ、是れ佛身を滅す。是の説法の人は、當に百千萬劫を歴て、諸の地獄に墮すべし。縦ひ佛出世すとも、猶ほ未だ出づることを得ず。若し人中に生るれば、唇缺け舌無からん。是くの如きの報を獲ん、何を以ての故に、衆生の性は、即ち是れ法性なり。本より已來、増減あること無し。云何が中に於て、病藥を分別せん。又云く、「諸法の中に於て、若し高下を説かば、即ち邪説と名づけん。其の口當に破るべく、其の舌當に裂くべし。何を以ての故に、一切衆生、心垢は同一垢、心淨は同一淨、衆生若し病めば、應に同一病なるべく、衆生須らく藥すべきは應に同一藥なるべし。若し多法を説かば、即ち顛倒と名づく。何を以ての故に、安りに分別して、善惡の法を拆ち、一切の法を破するが爲の故に、機に隨つて法を説くは、佛道を斷するが故に、此れ又了然不壞の義なり。金剛三昧經に云く、「皆一味道を以てす。終に小乘を以てせず。諸の雜味有ること無く、猶ほ一雨の潤すが如し。又金剛經に云く、「是の法平等にして高下有ること無し、是を阿耨多羅三藐三菩提と名づく。此の後の三經に據らば、前の三經と義甚だ相戻れり、其の故何ぞ哉。若し維摩詰、富樓那に謂つて云ふに依ると云はゞ、先づ當に入定して此の人の心を觀じて、然して後に説法すべし。又云く、「人根を觀せざれば、説法すべからず」と。夫れ富樓那の通慧を以て、又親しく如來に奉りて、大弟子と爲る、尙ほ未だ人の心を觀知すること能はず、況んや後五百歲、末法中の弟子、

●阿耨云。梵語、支那では無上正等覺、この上もない正しく平等なる悟りと云ふこと。
●富樓那。辯才第一、釋迦十大弟子の一。

豈能く盡く人の心を觀知して、而して後に説法せんや。設使ひ人の心を觀知すとも、若し彼れ小乗の心を發せしに、而も爲に大乘の法を説かば可ならんや。若し未だ彼れが心を觀知すること能はずして、己が意に率つて説かば、又可ならんや。既に未だ觀知すること能はず、與に默然として説かざれば、又可ならんや。若し義に依つて、語に依らずと云はゞ、則ち上の六經の義、互に相違反せり。其れ將に孰れに依らんとするや。若し了義經に依ると云はゞ、三世の諸佛、一切の善法は、皆此の經より出づ。孰れをか名づけて、不了義經と爲さんや。況んや諸經の中に、維摩、法華、首楞嚴の説と同じき者に非ず、法王、金剛三昧の説と同じき者、亦一に非ず、偏く擧ぐ可からず、故に二義の中に於て、各々三經を擧ぐ。此の六經は、皆上人の常に講讀する所の者なり。今故に引いて以て問を爲す、必ず甚深の旨有らん。今且く人有り、忽ち法を上人に問ふ、上人或は能く其の心を觀知し、或は其の心を觀知すること能はず、應病與藥を將つて、爲に説かんや。同一病一藥を將つて、爲に説かんや。若し應病與藥ならば、又是れ高下あり、是れ雜味あらん。即ち法王等の三經の義に反く。豈徒だ其の義に反くのみならんや、又上の所説の如きの罪報を獲ん。若し同一病一藥にして爲に説かば、必ず當に大乘を説くべし。大乘は即ち佛乘なり。若し佛乘のみを説せば、且つ隨應せず、且つ病を救はず、即ち維摩等の三經の義に反く。六の者は皆如來説なり。如來は是れ眞語者、實語、不誑語、不異語者なり。今此れに隨はば則ち彼れに反く、彼に順へば此れに逆ふ。設し上人に問ふものあらば、其れ將た何の法を以て焉に對へ

ん。此れ其の未だ論らざる者の一なり。又五蘊とは色、受、想、行、識、是れなり。十二因縁とは、無明は行を縁し、行は識を縁し、識は名色を縁し、名色は六入を縁し、六入は觸を縁し、觸は受を縁し、受は愛を縁し、愛は受を縁し、取は有を縁し、有は生を縁し、生は老、死、憂、悲、苦、惱、を縁す、是れなり。夫れ五蘊、十二因縁は、蓋し一法なり。蓋し一義なり。略して之を言へば則ち五、之を詳かにせば則ち十二と爲る。名数の多少殊ありと雖も、其の倫次轉遷に於ては、合に條貫を同じうすべし。今五蘊の中には、則ち色、受、想、行、識、相次いで、十二因縁の中には則ち行、識、色、入、觸、受、想の縁、一には則ち色、行の前に在り、一には則ち色、行の後に次ぐ。正しく之を序するに既に類せず、逆つて之を倫づるに、又同じからず。若し佛、次第にして言へば、則ち此の雜亂有るべからず。若し偶然にして説くと謂はゞ、則ち當に名づけて、因縁と爲すべからず。前後不倫、其の義安んか此に在る。其の未だ論らざる者の二なり。上人は耆年大德、後學の宗師なり、出家の中に就いて、又説法を以て佛事を作す、必ず能く二義を研精し、合せて之に通ず。仍つて望むらくは、指陳して翰墨に著はせ、蓋し諸を篋笥に藏めて、永々に忘れざらんことを欲するなり。其餘の疑義は亦續いて咨問せん。居易頓首。と。予、其の答を補ふて曰く、辱く書を賜ひ、教乘を以て問を爲すことを蒙る。魯鈍の姿を顧み惟ふに、何ぞ以て、天縱の辯に當るに足らん。然れども敢て疲陋を竭し、以て外護の法の爲にするの勤めたるを塞がざら

◎天縱。天よりゆるさる。

んや。居士、論する所の六經の二義と夫の行色不倫の説と、通せずとする者の如きは、痛く自らの所問の端の方便智の三言を思はざるに在るのみ。此の三言を了せば、則ち百千の妙義、無盡の法門と雖も、究めて解せざる可けんや。矧んや謂はゆる維摩、法王前後の六經、相戻るの義をや。方便智とは、將の兵に將たるが如し、權謀の施す所、定式有るに非ず、其の發すること、雷霆の如く、機括の如し。故に能く過を未然に消し、衝を千里に拆たん。一時に在るのみ、豈典故に據らんや。夫れ軍勢の虛實、將氣の勇怯、陣形の可否、成敗の先見、或は定論あり。吾が教の三乘に例せば、根を觀じて法を授け、參亂す可からざるを以てす是なり。勇怯の氣を以て、虛實の勢を爲し、以て其の事を施すは即ち誤れり。吾が法に例せば、謂はゆる大乘の法を以て、小乗の人に授く可からず、而して小乗の人、終に大乘の法に堪受せず。維摩、法華等の三經、丁寧告諭する所以の如き者是なり。法王等の三經、又明かに告げ直に指して、纖悉に之を蕩除す。亦當に爾るべき所なり。何を以て之を知る、兵に將たる者の如きは、意、亂を濟ひ以て國を安んずるに在り、則ち如來の意、豈迷を開き以て智を顯はさんと欲するに非ずや。三乘の語言を執して、佛の方便智と爲すは、失の甚しきなり。彼れは特だ衆生の根器を品第するの説なり。了すること能はざる者は、反つて常見に墮す。即ち外道なり、佛道に非ざるなり。衆生の佛性、無始より來、是の事有ることなしと執する者は、又斷見に墮す。即ち外道なり、佛道に非ざるなり。華嚴經に曰く、凡愚の人、佛の方便に逆ふて、三乘有りと執す。法華經に曰く、過

去佛を尋念すれば、亦應に三乘を説くべし』と。來書の疑ふ所、以つて釋く可し。涅槃經に曰く、『早く成佛を得んと欲する者は、與に早く成じ、遅く成佛を欲する者は、與に遅く成す』と云ふ。起信論に曰く、『世尊、勇猛の衆生の爲には、成佛一念に在り、懈怠の衆生の爲には、果を得ること須らく僧祇を滿つべし』と説き給ふは、眞の方便智の旨なり。神にして之を明らむれば、則ち能く變通與奪して、之を施して以て衆生を成就するなり。一代の時教は、三宗を以て之を攝す。謂はゆる法相、破相、性宗なり。前の六經の二義は、乃ち法相、破相の二宗の攝する所なり。此の二宗は自ら相難することを許さず、建立、蕩除、宗異なるを以ての故なり。又法師たる者、人の根を定觀すること能はず、過慮して誤つて人に授くるに法を以てし、且つ罪苦あらんことを疑ふ。夫れ知法の比丘は、凡夫、煩惱を具足するの軀と雖も、然も其志好明達にして、慧辯猛利なり。果位小乘の比す可きに非ず。迦陵鳥の殻に在りて、則ち聲衆鳥を壓するが如く、堅好木の地に苗んづれば、則ち已に群木に秀づるが如し。又況んや維摩に呵せられて、富樓那、自ら其の過を言ふこと以あるをや。是くの如くにして論せば、恐らくは尙ほ疑に紆はれんことを。請ふ、近事を借りて、以て之を明らめん。王公大人の天下の士を閱ること、必ずしも龍章玉山に非ず、其れ必ず先づ言語を以てす。言語は徳行の候なり、故に曰く、『有徳の者は、必ず有言なり』又曰く、『其の由る所を觀、其の安んずる所を察せば、

①迦陵鳥、かりよう類、極樂の鳥にて美聲也。
 ②堅好木、唐木にて美材也。
 ③候、兆、しるし。

人焉んぞ廣さんや。』古の聖人と雖も、能く此を外にすること莫し。則ち知法の者、人の根の大小を觀ること、又豈他の術あらんや。居士の疑ふ所の、色、受、想、行、識と、夫の十二有支因縁の法と、名次倫です、互に錯繆有るが如きは、未だ名目の理を辨せざる故なり。夫れ色等の五蘊は、乃ち三苦已に成るの軀なり、十二有支は、乃ち三世生因の法なり。華嚴の十地品に云ふが如きは、第一義に於て、了せざるが故に、無明と名づく。所作の業果は是れ行行依止、初心は是れ識、四取蘊を共生す。名色等と爲すは、其の本末の、法を叙ぶ。理固に然るなり。般若經に則ち曰く、『色即是空、空即是色、色不異空、空不異色、受想行識も亦復た是くの如し』とは、有法の眞ならざるを破する故なり。且つ色體尙ほ爾り、況んや四蘊は、但だ名のみなるをや。般若の諸經は、有を破するの教、故に五蘊を言へば、則ち色、行の前に居す。華嚴の十地品の諸經は、法を叙ぶ。故に色、行の後に在り。略して言へば五、詳かに言へば十二なるに非ず、法の本づく所、理に本づくことを要す、而も當に義に於て、必ずしも名句を守りて以て自ら滯るべし。病多くして久しく講を廢す、前の陳ぶる所は皆教乘の深旨なり。敢て臆斷意論に非ず、言謂の及ばざるに至りては、模を以て、魔佛を鑄る可し。同異を了辨することは、又未だ遽かに言ふ可からざるなり。』

④法。法は沿、疑はつぐ也。

斷際禪師、嘗て異僧と天台に遊ぶ、行くこと數日、江の漲るに値ひ、濟ること能はず、杖を植つる

こと、之を久しうす。異僧笠を以て舟に當て、之に登りて浮び去る。斷際嫂罵して曰く、「我れ早く汝を知らば、定めて其の脛を捶折せば、乃ち快からん。」異僧嘆じて曰く、「道人猛利なること、我が及ぶ所に非ず」と。雪峰、巖頭、欽山、湘中より江南に入る。新吳山の下に至り、欽山、足を澗の側に濯ふ。菜葉を見て、喜んで指して、以て二人に謂つて曰く、「此の山に必ず道人有らん、流に流れて之を尋ぬ可し。」雪峰悲つて曰く、「汝、智眼太だ濁れり、他日如何が人を辨せん。彼れ福を惜しまざること此くの如し、住山して何か爲んや」と。古の人、師を擇び友を結ぶこと、是くの如く其れ審かなる哉。

法燈の泰欽禪師、初め洪州の雙林に住す。乃ち曰く、「山僧、本深く山谷に藏れ、日を遣し、生を過ぎんと擬す。清涼老人不了底の公案有るに縁り、所以に出で來り、他の爲に了却す。若し人有りて問はゞ、便ち伊れに説似せん。」時に一僧出でて問ふ、「如何なるか是れ老人の未了底。」欽杖を拽いて之を撃つ。僧曰く、「何の過か有る。」欽曰く、「祖禪了せざれば、殃兒孫に及ぶ」と。李國主從容として問うて曰く、「先師、什麼の不了底の公案かある。」欽曰く、「現に分析する底。」國主之を駭く。欽、少年の時、其の悟解已に逸格なり、然れども未だ人の爲に知られず、獨り法眼禪師のみ、深く之

- ① 雪峰、存、德山に嗣ぐ。
- ② 巖頭、靜、德山に嗣ぐ。
- ③ 欽山、文遠、洞山に嗣ぐ。雪峰岩頭と欽山と三人を雪巖欽と云ふて、中より禪友なり。
- ④ 法燈泰欽、法眼益に嗣ぐ、法眼二世、清涼に住す。
- ⑤ 公案、古則公案は公府の帖の如きを云ふ。
- ⑥ 説似、ときしめす。
- ⑦ 祖禪、おやのこしたおきて。

を奇とす。性、繩墨を忽にして、事を事とせず。嘗て清涼より、化に維揚に遣はす。戒律を奉せず、時を過して未だ歸らず、一衆傳へて以て笑ひを爲す、法眼偈を遣はし、往いて之を呼ぶ。既に歸りて、衆の爲に浴を焼かしむ。一日法眼、大衆に問うて曰く、「虎項下の金鈴、何人か解き得る」と。對ふる者、皆契はず、欽、適に外より至る、法眼、前語を理して之に問ふ。欽曰く、「大衆、何ぞ繋ぐ者解き得ると道はざる。」是に於て人々觀を改む。法眼曰く、「汝が輩、這の回渠れを笑ふこと得ざれ」と。

王文公、大拜に方り、賀客門を塞ぐ。公默然たること甚だ久し。忽ち壁間に題して曰く、「霜筠雲竹鍾山寺、老を投じて歸らん歎此の生を寄す。」又、元宵に宴を相國寺に賜ひ、俳優を観る。坐客懼ぶこと甚し。公、偈を作りて曰く、「諸の優戯場の中、一は貴く復た一は賤し、心に知んぬ本自ら同じきことを、所以に欣怨無し。」予、嘗て同學に謂つて曰く、「此の老人、通身是れ眼、渠れを瞞すること、一點も亦得ず。」

臨濟大師曰く、「大凡宗乘を舉唱するには、須らく、一句中に三玄を具し、一玄中に三要を具すべし」と。玄あり要あり、諸方の衲子、多く其の語を溟滓す。獨り汾陽の無德禪師、能く妙に其の旨に達す。偈を作りて之を通じて曰く、「三玄三要事分ち難し。旨を得て言を忘るれば道親しみ易し。一句明々として萬象を該ぬ。重陽九日菊花新なり」と。特だ臨濟宗のみ喜んで三玄を論するに非ず、石

頭が所作の參同契にも、備さに此の旨を具ふ。竊かに嘗て深く之を觀るに、但だ玄要の語を易へて、明暗と爲すのみ。文止だ四十餘句、而も明暗を以て論ずる者、之に半ばせり。篇首に便ち標して曰く、「靈源明に皎潔たり、枝派暗に流注す。」又之を開通發揚して曰く、「暗に上中の言に合し、明に清濁の句を明らむ。暗に在りては、則ち必らず上中を分ち、明に在りては、須らく清濁を明らむべし。」此れ體中玄なり、其の宗を指して其の意を示すに至りては、則ち曰く、「本末須らく宗に歸すべし、尊卑其の語を用ふ、故に下に廣く明暗の句を叙し、^① 奕々聯連して已ます。」此れ句中玄なり。其の辭盡くるに及んで、則ち又曰く、「謹んで參玄の人に白す、光陰虚しく度ること莫れ」と。道人日用に、能く時を遣れ候を失はざれば、則ち是れ眞に佛恩に報ゆ、此れ意中玄なり。法眼、之が注釋を爲し、天下の學者、之を宗承す。然れども予獨り其の三つの法を分たす、但だ一味に體中玄の解を作して、石頭の意を失ひしことを恨む。李後主、「明中に暗ありし」の注辭に當り、「玄黃眞ならず、黑白何ぞ咎めん」と曰ふを讀みて、遂に開悟す。此れ句中玄を悟りて、體中玄と爲すのみ。^② 安楞嚴の句讀を首楞嚴に破するも、亦明處あるが如し。予、學者の其の旨を雷同することを懼るれども、宗門の妙意指趣は、今の叢林口を絶ちて言はず、老師宿德は日に以て凋喪し、末學小生は日に以て諱論にして、復た明辨すること無し。因つて先德の銓量する大法の宗趣を此に記し、

① 靈源。叢林の規矩等。
 ② 突突。さかんなること。
 ③ 玄黃。くろき、是非にたとふ。
 ④ 黑白。くろしろ、善惡にたとふ。
 ⑤ 安楞嚴。楞嚴經の一種

以て有志者を俟つ。此の方の教體は、音聞を以て機に應ず、故に明導の者、假りに語言を以て、其の智用を發す。然れども言を以て言を遣り、理を以て理を辨すれば、則ち妙精圓明にして、未だ嘗て間斷せず、之を流注眞如と謂ふ。此れ汾陽の謂はゆる一句明々として萬象を該ぬる者なり。之を得る者は、神にして之を明らめ、然らざれば語下に死す。故に其の機に應じて用ふるに、皆窠臼を脱略して、影迹に滞らざらしむ。之を有語中の無語と謂ふ。此れ汾陽の謂はゆる重陽九日菊花新なる者なり。三玄の設け、本猶は病を遣る。故に達法の者、其の意を知ること貴ぶ。意を知らば、則ち索爾として虚閑に、縁に隨つて^① 任運なり、之を時を遣れすと謂ふ。此れ汾陽の謂ゆる意を得て言を忘るれば道親しみ易しと云ふ者なり。古塔主、喜んで此の道を明らむことを論ず。然れども三玄を論すれば、則ち言を以て傳ふ可し。三要を論するに至りては、則ち説なくんばあるべからず。豈一玄中に三要を具す、玄あり要ありと曰はざらんや。親しく此の道を證するに非ざるよりは、能く辯すること莫し。

① 索爾。索は大繩、又は緊然也。
 ② 任運。天運自然に任ずる也。
 ③ 玉圓林。廬山の智識也。
 ④ 空堂。さかんなること。
 ⑤ 戒五祖。師戒、明覺寛に嗣ぐ、雲門の三世。

廬山^① 玉洞の林禪師、雲門の北斗に身を藏す因縁の偈を作りて曰く、「北斗藏身為に擧揚す。法身此れより露堂々、雲門、他家の子を賺殺して、直に如今に至るまで護に度量す。」五祖の^② 戒禪師は雲門の的孫にして、機辯有り、嘗て祖峰の法席を罷めて、山南に遊び、林に見えて、偈を作るの意を問

ふ。林、目を舉げて之を視る。戒曰く、「若し果して此の如くならば、雲門、一錢に直らず、公亦當に兩目無かるべし」と。遂に去る。林、竟に言ふ所の如し。而して戒も、暮年に亦一目を失ふ。今妄意を以て先徳の旨を測度し、後生を疑悞する者、亦以て少しく戒む可し。

天台宗の講徒曰く、「昔し智者大師、西竺異比丘の言を聞くに、龍勝菩薩嘗て灌頂部に於て、大佛頂首楞嚴經十卷を誦出し、五天に流在す。皆諸經に未だ聞かざる所の義なり。唯だ心法の大旨なり、五天の世主、保護秘嚴して、妄りに傳授せず。智者之を聞き、日夜に西に向ひて禮拜して、早く此の土に至り、佛の壽命を續がんことを願ふ。然れども竟に見るに及ばず。唐の神龍の初に、此の經、方に廣州に至りて翻譯す。今市工販鬻して天下に徧し、而も學者、往々に生を畢るまで、嘗て之を識らざる者あり、法輕ければ、則ち信種自ら劣なり。嘆す可きなり。」

①神龍。唐の中宗の年號、日本文武天皇慶雲ころなり。
②販鬻。うりひきぎ。
③元符。北宋哲宗の年號、日本堀川天皇承徳のころなり。
④仁禪師。雪峯存に嗣ぐ。初め南臺に住し、後、鎮境寺に遷住す。

古の老宿住山、多く物に託して意を寓し、既に自ら游戲し、亦人を悟さんとす、子湖の犬を畜ひ、道吾の巫衣端笏の如し。獨り雪峰、歸宗、西院、皆木蛇を握る。故に雪峰、西院に寄する偈に云く、「本色住山の人、且た刀斧の痕無し。」予、元符の間に疎山に至る。仁禪師の畫像を見るに、亦木蛇を握る。嘗て僧あり、問うて曰く、「和尚の手中、是れ什麼物ぞ。」答へて曰く、「是れ曹家の女。」因つて

其の孤韻超拔、能く熱惱を清涼にすることを嘆じて、爲に贊を作りて曰く、「三支の習氣、其の毒熾然なり、識心を薰蒸して、盤屈糾纏す。衆生明めすして、横に疑怖を生ず。忽然之を見て、輒ち自ら驚仆す。空華の世間、本と生滅を離る。廓然たる十方、其の窟穴を露はす。惟だ矮師叔のみ、是れ大幻師なり。萬法を與奪して、自在に娛嬉す。乃ち知んぬ大千皆公の戲具なることを、手中の木蛇、是れ曹家の女。」

①三支。食と眠と癡なり。
②頼耶。第八阿頼耶識の略。諸法の根本なり。

永明和尚問うて曰く、「此の根本識心、既に稱して一切の法體と爲す。又常住不動と云ふ。只だ萬法の如きは、此の一心に即して有るか、此の一心を離れて有るか。若し心に即せば萬法遷變す、此の心云何が稱して常住と爲さん。若し此の心を離るれば、復た云何が一切の法體と爲すことを得ん。自ら答へて曰く、「開合して縁に隨ひ、即するに非ず、離るゝに非ず、縁會するを以て、故に合す、縁散するを以て、故に開く。開合は但だ縁、卷舒體なし、縁但だ開合す。縁亦本空なり。彼此知無くして、能所俱に寂す。」故に密嚴經の偈に曰く、「譬へば金石等の、本來水相無く、水と共に和合して、水の若くに流動するが如し。」藏識も亦是くの如し、體、流動に非ざれども流る。諸識共に相應して、法と同じく流轉す、鐵の磁石に因りて、周回して轉移するが如し。二つ俱に思あること無く、狀ち思覺有るが若し。頼耶と七識と當に知るべし。亦復た然ることを、習繩の繋ぐ所、人無くして有るが若し。衆生の身に普徧し、諸の陰趣に周行す。鐵と磁石と展轉して相知らざるが如し。予嘗つて諦かに

一切衆生を觀るに、動轉遷移の中に迷ひ、心を生じ執着して、以て實に然りと爲す。是を以て、生あり、死あり、罪行はれ、福行はると横計す。嬰兒の自ら旋りて、屋廬の轉すると見るが如し。諸佛大悲を以て、爲に方便を作して、無情の類、心念あること無くして、而も遷流あるを以て、爲に識心本來自ら寂なるに譬へ、即ち無生大解脱門に入らしむ。

潭州の道吾山に、湫あり、毒龍の蟄する所なり。墮葉波に觸るれば、必ず雷雨日を連らぬ、過ぐる者敢て喘がす。慈明、泉大道と同じく遊ぶ。泉、其の衣を牽いて曰く、「同じく浴す可し」と。慈明肘を掣き、徑に去る。泉、衣を解き躍り入る。霹靂隨ひ至り、腥風雨を吹き、林木、掀播す。慈明、草中に蹲り、大いに驚き、泉、死せりと意へり。須臾にして晴霽す、忽ち頸を引いて、波間より出で、笑つて呼んで曰く、「因」と。又嘗て融峰頂に夜坐す。大、蟒あり、之を繞盤す。泉、衣帯を解き、其の腰に縛す、中夜見えず、黎明に杖を策き、徧山に之を尋ぬ。帶、枯松の上に纏はる、蓋し松の妖なり。又後洞より、一の石羅漢の像を負ふて南臺に至る。像、無慮數百斤、衆僧驚駭し、其の來るを知ること莫し。後洞の僧も亦其の去ることを知ること莫し。遂に相傳へて、今に至るまで飛來羅漢と號す。又衡山縣を過ぐるとき、屠者の肉を斫るを見て、其の旁に立ち、憐む可きの態を作し、其の肉を指し、

七識。末那識とて、凡夫心の根本也。
泉大道。汾陽照に嗣ぐ。
掀播。はれあがる。
因。舟を引く聲よりたとへる、こゝあとがえーいとあゝと云ふこゝろ、ちから入れてだす聲。
縛。うはばみ。
ゆはふ。

又其の口を指す。屠問うて曰く、「汝啞なるか。」即ち點頭す。屠大いに之を憐み、巨樹を割いて、鉢中に置く。泉、其の望外に出づるを喜び、連呼して感謝と曰ふ。市人皆笑ふ。泉、自若として去る。後に南嶽の芭蕉菴に住す。横逆に遭ひ、其の衣を民にせらる。郴州の牢城に役し、盛夏に土を負ふて城を壑ぐ。通衢を経て、擔を弛べて坐す、觀る者堵の如し。偈を説いて曰く、「今朝六月六、谷泉罪を受くること足る、是れ天堂に上らざれば、便ち是れ地獄に入らん」と。言ひ訖りて微笑して寂す。異香郁然たり、邨人今に至るまで、之に供事す。泉は親しく汾州の無德禪師に見ゆ。南山の清源道人、予に謂つて曰く、「我れ十餘年、老黃龍の侍者と作る、其の慈明に見えし事を説くを聞くに、甚だ詳かなり、嘗て喟然として嘆じて曰く、「我れ平生、谷泉文悅を得ず、又争でか慈明を識得せん」と。」

壑。塞也。
喟然。ためいきついでなげくこと。

靈源禪師、予に謂つて曰く、「道人保養すること、人の病に、須らく藥を服すべきが如し、藥の靈驗は見易し、口を忌むことを要須せば、乃ち可なり。然らざれば藥を服すとも何の益あらん。生死は大病、佛祖の言教は是れ良藥、染汚の心は是れ雜毒、之を忌むこと能はざれば、生死の病、時として損すること無けん」と。予、其の言を愛し、圓覺經を追念するに、曰く、「末世の諸衆生、心に虛妄を生せず、佛説き給ふ、是くの如きの人は、現世に即ち菩薩なり。」法華經に曰く、「若し精進の心を起さば是れ妄なり、精進に非ず、但だ能く心安ならざれば、精進涯り有ること無し。」南岳の思大師、

法華三昧に悟入す。即ち誦して曰く、「是れ眞の精進、是れを眞の法供養と名づく。」汾陽の無業大達國師、一生、學者の間に答ふるに、但だ「莫妄想」と曰ふ、是れを稱性の語、見道の徑門なりと謂ふ。禪者其の言を易り、反つて玄妙を求む、笑ふ可し。

三祖の信心の銘、誌公の十二時の歌、永嘉の證道の文、禪者誦せざる可からず、退之が大顛に見ゆる事、傳大士の四相の頌、宗門に言はずと雖も、何ぞ傷まんや。

定上座は何の許の人なることを知らず、臨濟の會中、龍象と號稱す。初め臨濟に至りて問ふ、「如何なるか是れ祖師。」西來意。臨濟下座し、搗住して曰く、「速かに道へ、速かに道へ。」定擬議す。濟之を掌して輒ち推し去る。傍僧呼んで曰く、「何ぞ禮拜せざる。」定拜起して、汗雨の如し、因つて大悟す。巖頭、雪峰、欽山三人、河北に往く。道に定に鎮府に逢ふ。問うて曰く、「臨濟和尚健なりや否や。」定曰く、「已に化し去れり」と。相顧て嘆息す。又問ふ、「何の言句の衆に示す有る。」定曰く、「尋常上堂に曰く、汝等諸人、赤肉團上に、一無位の眞人あり、常に面門より出入す、未だ證據せざる者は看よ」と。欽山曰く、「何ぞ赤肉團上、非無位の眞人と道はざる。」定忽ち擒住して曰く、「且らく道へ、無位の眞人と非無位の眞人と相去

- ① 南岳思。慧思といひ法華に通ず。
- ② 無業大達。汾陽の大徳也。
- ③ 傳大士。雙林善慧大師といひ、輪藏を作る。
- ④ 定上座。臨濟に嗣ぐ。
- ⑤ 龍象。會下の中のえらもの。
- ⑥ 西來意。達磨の支那に來た意旨。
- ⑦ 掌。びつしやり手のひらでやつた。
- ⑧ 無位の眞人。これが禪宗悟りの根本じやと云ふこと。
- ⑨ 擒住。とらへとどめる、まあまつたとの意。

ること多少ぞ、速かに道へ速かに道へ。」欽、色動いて對ふること能はず、巖頭、雪峰、之を解せと勸む。定曰く、「若し是れ這の兩箇の老凍臚にあらざれば、尿牀の鬼子を壘殺せん」と。又橋を過り、三の講人、方に法義を論ずるを見る。定、杖に倚り之を聴く。講者戲に問うて曰く、「禪者、如何なるか是れ禪河窮めて底に到らん。」定、捉住して、水中に抛置せんと欲す。兩講人、驚き之を抱持して、哀告す。定曰く、「若し是れ汝が輩にあらすんば、且く這の漢をして、窮めて底に到らん」と。臨濟の宗旨、直下に便ち見て、復た情を留めざることを貴ぶ。定公用ふる所、舒卷自在なること、明珠の盤を走りて、影迹を留めざるが如し。畏仰す可けん哉。

- ① 解。ゆるせ。
- ② 尿牀の鬼子。便所の鬼にて、惡罵するの言也。
- ③ 擒。やい馬鹿やらう。

南禪師、積翠に居りし時、僧あり侍立す。顧視之を久しうして問うて曰く、「百千の三昧、無量の妙門、一句と作して汝に説與す。汝還つて信するや否や。」對へて曰く、「和尚の誠言、安んぞ敢て信せざらん。」南公其の左を指さして曰く、「這邊に過ぎ來れ。」僧將に趨らんとす、忽ち之を咄して曰く、「聲に隨ひ色を逐ふ、甚の了期かあらん、出で去れ。」一僧之を知りて、即ち趨り入る。南公、前語を理して之に問ふ、亦對へて曰く、「安んぞ敢て信せざらん。」南公又其の左を指さして曰く、「這邊に過ぎ來れ。」僧堅く往かす。又之を咄して曰く、「汝來りて我に親近せしに、反つて我が語を聽かず、出で去れ」と。其の門風壁立、佛祖と雖も、亦將に氣を喪はんとす。故に能く臨濟已墜の道を起す。而るに今人其の家風を誣ゆ。但

だ是れ平實の商量と、笑ふ可きなり。

予常に愛す、王梵志の詩に云く、梵志翻つて襪を着くれば、人皆是れ錯と謂ふ。寧ろ偏が眼を刺す可し、我が脚を隠す可からず。と、寒山子の詩に云く、人は是れ黒頭の蟲、剛ひて千年の調を作す。鐵を鑄て門限と爲す、鬼見て手を拍つて笑はん」と。道人自ら行處を觀じ、又世間を觀じ、當に是くの如く游戲すべきのみ。

淨業障經に曰く、世尊、無垢光に謂つて曰く、寢ねて欲を犯すと夢む、本と差別無し、一切の諸法は、本性清淨なり。然れども諸の凡夫は、愚小無智にして、無有の法に於て、如なることを知らざるが故に、妄りに分別を生じ、分別を以ての故に、三惡道に墮す。古佛同聲に偈を説いて曰く、諸法は鏡像に同じ、亦水中の月の如し。凡夫愚惑の心は、癡悲愛を分別す。諸法は常に無相なり、寂靜にして根本無く、無邊にして取る可からず、欲性も亦是くの如し。然れども教乘の論する所、開遮一にあらず、故に曰く、九結十纏、性空寂なりと雖も、初心の學者は、且く須らく之を離るべし。是を以て諸佛所説の深經には、先づ新發意の菩薩に於て、説く可からざるを誡む、種子の習重、現行を發起することを慮る。又觀淺く根浮にして、信解及ばざるが爲の故なり。

◎世尊。十號の一、釋迦牟尼佛を云ふ。

道吾の眞禪師、孤硬にして大知見を具す、俱に禪林に重名あり。當時慈明の會中に、先づ會、眞の

二大士を數へて、龍象と爲す。然れども法を開くこと、皆遠方の小利にして、衆才かに二十餘輩、諸方より來る者は、必ず之を勘驗す、往々崖を望んで退くもの甚だ多し。眞、病に臥す。院主問ふ、「和尚近日尊候如何。」答へて曰く、「粥飯頭に氣力を得ず。」良久して曰く、「會す麼。」對へて曰く、「不會。」曰く、「猫兒の尾後に研槌を帶ぶ。」或は問ふ、「如何なるか是れ佛。」答へて曰く、「洞庭蓋無し」と。予、偈を作りて曰く、「洞庭蓋無し、法身を凍殺す、趙州食を貪り、牙齒に津を生ず。」

翠巖の眞點胸、英氣逸群にして、虚りに許可せず、嘗て南昌の章江寺に客たり。長老政公、亦慈明に嗣ぐ。性、講説を喜び、學者多く義學を尙ぶ。眞、一日政を見て、則ち手を以て其の衣を握げ、兩脛を露はし、緩歩して過ぐ。政恠んで、之を問ふ、對へて曰く、「前廊後架、皆是れ葛藤、正に恐らくは絆倒せん耳。」政、爲に大笑す。又問うて曰く、「眞兄、我れ偏と同參なり、何ぞ人を見て便ち我れを罵ることを得たる。」眞、熟視して曰く、「我れ豈汝を罵らん、吾れ一喙を畜へ、佛を罵り祖を罵るに準備す。汝何ぞ預らんや。」政、之を如何ともすること無し。而して去りて、南禪師に見えて曰く、「我れ他日、十字街頭に箇の粥、鉢の主人と做り、僧ありて黄檗より來らば、我れ必ず之を勘せん。」

◎尊候。あなたのごきげん。
◎喙。くちばし。
◎鉢。飯に同じ。
◎堂頭。その寺の住持の和尙。

南公曰く、「何ぞ必ず他日にせん、我れ黄檗の僧と作らん、汝今試に問へ。」眞便ち問ふ、「近離什麼の處ぞ。」曰く、「黄檗。」眞曰く、「見説く、堂頭老子、脚跟地に點せずと、是なりや否や。」曰く、「上座、

何れの處に這の消息を得來る。眞曰く、「人あり傳へ至る。南公笑つて曰く、「却つて是れ汝脚跟地に點せず。」と、眞亦大笑して去る。好んで學者に、魯祖當日來參の者を見れば、「何が故ぞ便ち面壁し去る」と問ふ。未だ其の機に契ふ者あらず。自ら偈を作りて曰く、「千山と萬山とを坐斷して、人に勸めて是非を除却すること難し、池陽近日消息無し、果して當年自觀せざるに中る。」

衡嶽の楚雲上人、唐末に生る、至行あり。嘗て血を刺して、妙法蓮華經一部を寫す、長さ七寸、廣さ四寸、而して厚さ之に半す。梅檀の匣を作りて、福嚴の三生藏に藏む。又八字を其の上に刻み、曰く、「若開此經一誓同慈悲氏」と。皇祐の間に、貴人あり、遊山して之を見て、其の妄を疑ふ。人をして鉗を以て之を發かしむ、血ありて綫の如くに出づ。須臾にして風雷山谷に震ふ。烟雲屋に入り、相捉へども相見えず。日を彌りて止まず、貴人大いに驚き、誠を投じて懺悔す。嗟乎、願力の持する所、乃ち爾も異なり。予、嘗て經游して之を頂戴す、細かに看れば、血綫依然たり。貫休詩あり之に贈りて曰く、「皮を剔り血を刺して、誠に何ぞ苦む、爲に寫す靈山九會の文、十指瀝乾して七軸を終ふ、後來の求法更に君無し。」

魯祖。達磨を云ふ。
皇祐。年號。
貫休。禪月大師、唐の名僧。

永明和尚曰く、「今の學者、多く解會を求むることを好む、此れ豈究竟ならんや、解は但だ情を遣らんが爲めのみ、説は但だ執を破せんが爲めのみ。情消し執盡くれば則ち説解何ぞ存せん、眞性了然た

り、寂にして存浪無し。所以に若し即と不即とを言はゞ、皆是非に落つ。警かに有無を掛ければ、即ち正念に非ず、故に三祖大師云く、「纔かに是非あれば、紛然として心を失す」と。時に僧ありて問ふ。「凡そ有無に涉れば、皆邪念と成る、若し能所に關すれば、悉く有無に墮つ、如何んが是れ正念にして知らん。」答へて曰く、「瑞草嘉蓮に生じ、林華早春に結ぶ」と。此れは是れ禪宗の妙、諸の方便中に於て、最も親語たり。

白雲端禪師、蠅子窓を透るの偈を作りて曰く、「光を尋ぬるが爲に、紙上に鑽る、透ること能はざる處、幾多か難し。忽然撞着す來時の路、始めて覺ゆ平生眼に瞞せらることを。」北斗に身を藏す因縁の偈を作りて曰く、「五陵の公子花に遊ぶに慣ふ、未第貧儒古より多し、冷地に他人の富貴を見て、等閑に幘頭を奈何ともせず」と。予謂ふに、此の老、筆端口あり、故に多説少説、皆刺語なし。

警。わづかにとよむ、ちらりとの意。
白雲。名は守端、五祖派に關ぐ。
幘。頭巾。

道宣律師、二祖の傳を作りて曰く、「可、賊に遇ふて臂を斫らる、法の心を御するを以て、初めより痛苦無し」と。蜀の僧神清、其の説を引き、以て左書す。予之を讀み、毎に失笑す。且つ宣、是非を辨するに暗きを嘆するなり。既に林法師と二祖とを列して傳を聯らぬ。林の傳に於て則ち曰く、「林、賊に遇ふて臂を斫られ、呼號して已まず、故に人呼んで、無臂林と爲す。」林、二祖と友として善し、

一日同じく餅す。其の亦一手を以て進むを恠み、其の故を問ふ。對へて曰く、「我れ臂無きこと舊し」と。豈之に游從する人、賊の爲に臂を斫らるること、久しうして知らず、反つて相問ふ者あらんや。夫れ二祖は、法を求むるを以ての故に、世に知る者なし。林公は賊に遇ふを以ての故に、人皆之を知る。宣、之を雷同して、先聖を辱誣するは過てり。彼の神清何爲る者ぞや、據つて以て書せ爲す、又以て一笑を發す可し。然りと雖も孟子曰く、「盡く書を信せば、書無きに如かず」と。學者亦以て此に鑒む可し。

慈明老人、性豪逸にして、繩墨を忽にす、凡聖測ること莫し。初め南源を棄てて、其の母を歸省し、銀盃を以て之が壽を爲す。其の母、諸を地に投じ、罵りて曰く、「汝少うして行脚するに、布囊を負ひ去る、今安ぞ此の物を得ん、吾れ望むらくは、汝が我れを濟はんことを、今反つて我れを置いて地獄の滓と作さんと欲すや」と。慈明、色作ぢす、徐ろに之を收めて辭し去る。神鼎の誣公師叔に謁す。誣公は首山の子なり、望、叢林に高し、住山三十年、影、山を出でず、諸方其の意に當る者あること莫し。慈明通謁して、法姪と稱す、一衆大いに笑ふ。誣公、人をして問はしむ。長老、「何人の嗣ぞ」と。對へて曰く、「親しく汾陽に見え來る。」誣、之を訝り、出でて與に語る。應答流るゝが如し、大いに之を奇とす。會々道吾席を虚しうす。郡、移書して、大禪伯を得て之を領せしめんと欲す。誣、慈明を以て召に

①神鼎洪誣。首山省念に嗣ぐ。
②禪伯。禪僧を尊びて用ゐる職稱の一なり。

慈明老人、性豪逸にして、繩墨を忽にす、凡聖測ること莫し。初め南源を棄てて、其の母を歸省し、銀盃を以て之が壽を爲す。其の母、諸を地に投じ、罵りて曰く、「汝少うして行脚するに、布囊を負ひ去る、今安ぞ此の物を得ん、吾れ望むらくは、汝が我れを濟はんことを、今反つて我れを置いて地獄の滓と作さんと欲すや」と。慈明、色作ぢす、徐ろに之を收めて辭し去る。神鼎の誣公師叔に謁す。誣公は首山の子なり、望、叢林に高し、住山三十年、影、山を出でず、諸方其の意に當る者あること莫し。慈明通謁して、法姪と稱す、一衆大いに笑ふ。誣公、人をして問はしむ。長老、「何人の嗣ぞ」と。對へて曰く、「親しく汾陽に見え來る。」誣、之を訝り、出でて與に語る。應答流るゝが如し、大いに之を奇とす。會々道吾席を虚しうす。郡、移書して、大禪伯を得て之を領せしめんと欲す。誣、慈明を以て召に

應せしむ。湘中の襜子、其の名を聞き、聚りて之を觀る。予謂らく、慈明の道、臨濟を將に仆れんとするに起す、而して平昔廓落なること乃ち此くの如し。神鼎微りせば、則ち殆んど亦谷泉の流ならん。然れども至人の示現、要するに有思議心の能く知る所に非ざるなり。教中に、女子出定の因縁あり、叢林の商畧甚だ衆し。道眼明白にして、親しく作家を見るに非ざるよりは、能く明らむること莫し。大愚の芝禪師、毎に僧に問うて曰く、「文殊は是れ七佛の師、什麼として此の女子の定を出し得ざる。」岡明菩薩は、下方よりして至る。但だ彈指一聲して、便ち能く定を出すし。對ふる者あること莫し。乃ち自ら對へて曰く、「僧、寺裏に投じて宿す、賊は不愼の家に入る」と。予、其の語を滋愛す。偈を作りて之を記して曰く、「出定只だ彈指を消す、佛法豈工夫を用ひんや、我れ今用ひんと要せば便ち用ふ。岡明と文殊とに管せず。」雲庵和尚之を見て、明日升座、前話を用ひて乃ち曰く、「文殊と岡明と、見處優劣ありや也た無や。若し無しと言はゞ、文殊何が故ぞ女子の定を出し得ざる、只だ今日、行者法鼓を擊動して、大衆同じく座前に列するが如きは、岡明、女子の定を出すとは是れ同か是れ別か。」良久して曰く、「道ふことを見ずや、佛性の義を識らんと欲せば、當に時節因縁を觀すべし。」亦偈あり、曰く、「佛性は天真の事なり、誰か云ふ別に師ありと、岡明彈指の處、女子出禪の時、纖毫の力を費さず、何ぞ曾て所思を動せん、衆生總に平等、日用自ら疑ひ多し。」

①廓落。志をうしなふことに川ふ。
②岡明菩薩。過去佛の一也。
③下方。四十二億河沙の國土。
④彈指。つまはじき。

大愚之禪師、偈を作ること絶だ精峭なり。予猶は老成の多く之を誦するを見るに及ぶ。其の僧、洞山に問ふ、「如何なるか是れ佛。」答へて曰く、「麻三斤」の偈を作るに曰く、「眸を横にして、梵字を讀み、舌を弾じて眞言を念す。火を吹いて尖髻を長じ、柴生じて滿竈烟る。」又雲門、普字の偈を作るに曰く、「佛を説き法を説いて廣く、鋪舒す。矢上に尖を加ふ也た太だ愚なり。明眼の衲僧、傍に、觀見す。一條の拄杖、兩人拈く。」又示衆に曰く、「沙裏油無く事哀む可し、翠巖飯を嚼んで嬰孩に餵む。他時好惡端的を知らば、始めて覺ゆ從前滿面の灰。」

李留後端愿、達觀禪師に問うて曰く、「人死して識何れの所に歸すべき。」答へて曰く、「未だ生を知らず、焉んぞ死を知らん。」對へて曰く、「生は則ち端愿已に知る。」曰く、「生、何れより來る。」李留後擬議す。達觀其の胸を搯ちて曰く、「只だ這裏に在り、箇の什麼をか思量する。」對へて曰く、「會せり、只だ程を食ることを知つて、蹉路することを覺えず。」達觀拓開して曰く、「百年一夢。」又問ふ、「地獄畢竟是れ有か是れ無か。」答へて曰く、「諸佛、無中に向つて有を説き、眼に空華を見る。太尉は、有中に就いて無を覓め、手に水月を、搯る。笑ふに堪へたり、眼前に牢獄を見て過ぎず、心外に天堂を見て生を欲することを。殊に知らず、欣怖心に在れば、善惡境を成すことを。太尉、但だ自心を了せば、自然に惑無し。」進んで曰く、「心、如何か了せん。」答へて曰く、「善惡師

- ① 眸、ひとみ。
- ② 梵字、印度の文字、こゝでは經文をさす。
- ③ 普、あまねくの意、偏界會て現はるなど下語せり。
- ④ 鋪舒、しきのべる。
- ⑤ 觀見、うかがひみる。
- ⑥ 李留后、達觀に嗣ぐ、居士。
- ⑦ 蹉路、みちをまごつく。
- ⑧ 搯、音さ、とる。

て思量すること莫れ。」又問ふ、「不思議の後、心何れの所にか歸す。」達觀曰く、「且く請ふ。太尉宅に歸り、潤州の浮玉山に住す、禪者景向す。嘉祐五年、正月、元日、堂に登りて、出世の始末を叙す。大衆悲戀す。下座、方丈に入りて跏趺坐す。衆復た擁して至る。手を以て揮ひて曰く、「各壁に就き、立つて、諱しきこと勿れ」と、少頃して寂然として逝す。」

予、大宋の僧史會略を讀み、隋の大匠楊公素が識度明正を愛す。嘗て嵩山に遊び、畫壁を見る、指ざして道士に問うて曰く、「此れ何の像ぞ。」對へて曰く、「老子胡を化して成佛せしむる圖なり。」楊公曰く、「何ぞ胡を化して、道を成せしめずして、反つて成佛せしむるや。」道士答ふるに能はず、傳へて以て名言と爲す。

⑨ 通禪師、長沙峯に嗣ぐ。

雪竇の通禪師は、長沙峯大蟲の子なり。毎に諸の同伴に謂つて曰く、「但だ時中常に在らば、識盡きて功成す、瞥然として起らば、即ち是れ他を傷ましむ。而も況んや言句をや。故に石霜の諸禪師の宗風に、多く内紹外紹、臣種王種、借句挾帶を論す。直饒ひ未だ嘗て照を忘れざるも、猶ほ外紹とし、之を臣種と謂ひ、亦之を借と謂ひ、之を誕生と謂ふ。然れども絲毫も隔てずして、王子の生下して、即ち能く紹種なるが如きには若かず、之を内紹と謂ひ、之を王種と謂ひ、之を句と借とに非すと謂ふなり。借の言たる、一色邊の事のみ、已むことを得ずして、機に應じて生を利すれば、則ち挾帶と成る。」と、汾陽の無德禪師の偈に曰く、「士庶公侯一道に看る、貧富賢愚漸次と名づく。將に知る、修

行亦須らく眼を具すべし。』と、予參じて此に至り、毎に自ら嗟笑す。嗟くらくは、堂中の首座、先師の意を味して、脱去することを。笑ふことは羅山大師契はず、而も巖頭を識ることは、棗栢大士の論を観るに及んで、曰く、「當に止觀の力を以て、功熟して乃ち證知すべし、急も亦成ることを得ず、緩も亦得ず。但だ常に休せざることを知らん、必定して虚しく棄てず、乳中に酪あるが如し、要は須らく其の縁を待つべし。彼の縁縁の中に、本と作者有ること無し、故に其の酪成り已る。亦來處あることなし、亦是れ本有に非ず、如來の智慧海方便も亦是くの如し。』と是を以て知んぬ、古の老宿の行處は、皆聖賢の言なりと。

① 止觀。止觀法にて、座禪も亦、止觀の一なり。
② 盤山積。寶積禪師也。

幽州 盤山の積禪師、言あり、曰く、「地の山を擧げて、山の孤峻なることを知らざるに似たり。石の玉を含んで、玉の瑕なきを知らざるが如し。若し能く是くの如くならば、是れ眞の出家なり。」と、大法眼禪師曰く、「理極りて情謂亡し、如何ぞ喻齊あらん、到頭霜夜の月、任運前溪に落つ、果熟して猿の重きを兼ね、山長くして路の迷ふに似たり。頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」遂導師曰く、「老僧平生、百、所解なし、只だ是れ日々一般、此の間に住すと雖も、縁に隨つて任運、今日諸上座、本と異なることなし。』と。

古の人だ機智あり、故に能く縁に遇ふて即ち宗し隨處に主と作る。巖頭和尚曰く、「汝但だ綱宗を識りて、本と是の法無し。』予嘗て客と靈雲見桃華の偈を論じて曰く、「三十年來劍客を尋ぬ、幾回か葉落ち

又枝を抽んづ。桃花を一見してより後、直に如今に至るまで更に疑はず。瀉山老子、大人の相無し、便ち云く、縁より入る者は、永く退失なし。獨り、玄沙のみ曰く、適當なることは、甚だ適當、敢保す、老兒猶は未徹在。客、予に問ふ、「未徹の處安く在るや。」爲に偈を作りて曰く、「靈雲一見して再見せず、紅白枝々花を著けず、耐がたし釣魚船上の客、却つて平地に來りて魚蝦を捕る。』

五祖戒禪師、喜んで弟子を勘驗す。時に大岳、雪竇號して飽參とす、且つ機辯あり、東山の下に至る。雪竇、大岳をして先づ往かしむ。岳、包腰して、徑に方丈に入る。時に戒、外より歸りて之を見。呼んで曰く、「什麼を作す。』岳、首を回らし、手を以て圓相を畫して之に示す。戒曰く、「是れ什麼ぞ。』岳曰く、「胡餅。』戒曰く、「爐竈の熱に趁ひ、更に一箇を搭げよ。』岳、擬

議す。拄杖を曳いて、門を趁ひ出す。岳曰く、「顯川這の關西子、面目なし、休し去らば好し。』戒、暮年に其の徒を棄て、來つて高安に遊ぶ。 洞山寶

① 洞山寶。五祖戒に嗣ぐ、雲門三世。
② 大愚。守芝、無徳の會下。
③ 瀉山大圓。百丈大智に嗣ぐ。

禪師は、其の法嗣なり。寶、名を好み、之を賣つて禮を爲さず。 大愚に至る、未だ幾くならざるに、拄杖を僧堂前に倚せ、談笑して化す。五祖、人を遣はし來つて、骨石を取り歸つて塔す。

瀉山の大圓禪師曰く、「道人の心は、質直無偽なり、背無く而無く、詐妄の心無し。一切時中視聽尋常にして、更に委曲無し。亦眼を閉ぢ、耳を塞がす、但だ情物に附するなくして即ち得。從上の諸

聖、唯だ是れ濁邊の過患を説く。如許多の惡覺、情見、想習の事なきが若く、譬へば秋水の澄淨清淨にして無爲淡竹、無礙なるが如し、喚んで道人と作す。亦無事の人となづく。或もの問ふ、「頓悟の人更に修することを用ふるや否や。」曰く、「若し眞實に悟得する底は、他自ら時節を知る、修すると修せざると、是れ兩頭の語なり。今縁に従つて一念頓に自理を悟ることを得と雖も、猶ほ無始の習氣あり。未だ頓に淨むること能はず、須らく渠をして現業の流識を淨除せしむべし。即ちこれ修するなり。別に一法の渠をして修行趣向せしむるあるべからず。聞より理に入り、理の深妙を聞いて、心自ら圓明にして、感地に居せず、縦ひ百千の妙義あるも、抑揚時に當る。此乃ち得坐披衣、自ら活計を作すことを解することを始めて得、要を以て之を言はゞ、則ち實際理地、一塵を受けず、萬行門中、一法を捨てず。若し也單刀入せば、則ち凡聖情盡き眞常を體露す。理事不二にして、即ち如如佛なり。今時の學者、常に佛性本來具足、何ぞ復た修することを須ひんと疑ふ。設し修行せずんば、聖を證するに縁なし。情向背に隨ひ、終に斷常に落つ。三世の如來、十方の菩薩、所有の修習、皆自ら覺性に隨順することを知らざる而已。」則ち大瀉の所謂、修と不修とは是れ兩頭の語、亦宜ならずや。

法眼禪師の子に、慧明道人といふものあり、知見甚だ高し、諸方を下視す。初め大梅山に菴す、禪者あり、來りて遊ぶ。明問うて曰く、「近離何れの處ぞ。」對へて曰く、「城都。」曰く、「上座城都を離れ

①感地。修行のたらの境界。
②慧明。報恩に住す、法眼に嗣く。

て、此の山に到る、則ち城都に上座を少き、此の山には上座を剩す。剩せば心外に法あり、少くれば心法周からず。道理を説得せば即ち住し、會せずんば即ち去れ。禪者、能く對ふことなし。又遷つて天台山に止まる。彥明道人といふものあり、俊辨自ら負んで來りて師に謁す。師問うて曰く、「從上の先徳悟る者ありや。」對へて曰く、「之あり。」曰く、「一人、眞を發し源に歸る、十方虚空、悉く皆消殞せん。」手を舉げて指して曰く、「只今天台山巖然たり、如何んか消殞し去ることを得ん。」明、目を張り直に視て遷れ去る。又諸老宿に問うて曰く、「雪峰の塔の銘に曰く、「夫れ縁よりして有るものは、始終にして成壞す、縁より有るに非ざる者は、歷劫も長く堅し。堅と壞と即ち且つ止む。」雪峰只今什麼の處にか在る。」予謂ふに禪宗は、大機大用を貴ぶ、知解を貴はず、雲菴、毎に曰く、「汝が輩皆有ることを知る、只これ用ふること得ず。」慧明道人の如きは、善く用ふる者と謂つべし。

③紹聖。宋の哲宗皇帝在位中の年號。

予、傳燈錄を讀むに、老安の子所謂破竈墮といふもの、深く無生を證するを愛す。恨むらくは、之と同時に生ぜざることを。紹聖中に、再び廬山に遊び、其の畫像を見て、爲に贊を作つて曰く、「嵩山屋老。竈有レ神。民爭祠之。日宰烹師與二門人一偶經行。即而視之因嘆驚。此唯土瓦和合成。是中何從有聖靈。以杖敲之輒墮。傾。須臾青衣出笑迎。謝三師爲我談無生。言訖登空如鳥輕。門人問之。拜投レ誠伏地。但聞破墮聲。君看一體情非情。皎如朗月懸青冥。未證據一者以事明。

鞭草血流石吼升。涅槃門開見二戸底。老安憐兒。爲作名。金屑雖貴。翳三眼晴。」と。

金華の 懷志上座、性夷粹にして經論に飽く、東吳の學者之に尊び事ふ。嘗て客に對して曰く、

「吾れ天台 賢首唯識の三宗の義を會して、之を折中して一書を爲し、以て影迹の諍を塞がんと欲す。」

適禪者あり、坐末に居して曰く、「賢首宗の祖師誰とか謂ふ。」志曰く、

「杜順和尚。禪者の曰く、「順に法身の頌あり曰く、「懷州牛喫レ禾。

益州馬腹脹。天下覓レ醫人。灸二猪。左膊上。」此の義天台唯識二宗の、何

の義にか歸合する耶。志對ふること能はず。禪者の曰く、「何ぞ游方し去ら

ざる。志是に於て、講を罷めて南詢して 洞山に至る、時に雲菴和尚焉

に在り、之に従つて遊ぶこと甚だ久し。去つて湘上に遊ぶ、石頭の雲溪に

菴すること二十餘年、氣韻閑淡にして、過客之に謁するに、多く言はず、

侍者之に問ふ。答へて曰く、「彼は 朝の貴人、多知多語なり、我れは粥

鉢僧。之を見て自然口吻運鈍し去る。僧問ふ、「住山何んの趣味かある。」答

へて曰く、「山中住、獨り柴門を掩ふ別趣なし、三箇柴頭品字に煨く、毫を撥くことを用ひざれども、

文彩露はる。」又曰く、「萬機俱に罷んで 癡憨に付す、蹤迹常に容す野鹿の參することを、麻衣を脱せ

す拳を枕と作す、幾く生の夢か綠蘿の菴に在る。」年六十二にして、江南に歸つて、故人照禪師に依る

①懷志。眞淨文に嗣ぐ、黃龍南の三世。

②夷粹。質實純粹なること。

③賢首。華嚴宗の祖師。

④杜順。華嚴宗の高僧。

⑤講。經文を講釋する敎家。

⑥洞山。雲庵禪師住山の寺。

⑦粥。朝廷の貴官。

⑧鉢。飯の俗字。

⑨癡憨。おろか、ばかもの。

ことを思ふ。照、龍安に住す、遂に徑に去る。予嘗て偈を作つて之に寄す、曰く、「看徧三湘。萬頃山

江南歸去臥龍安。只將一味無求法。留與叢林作樣看。」又曰く、「關中拋擲亦奇哉。句裏藏

身活路開。生鐵心肝含笑面。不下虛參。見作家一來。」

杭州、上天竺の辨才法師元淨は法華三昧を悟り、至行あり、天台敎を宏め、號して第一と稱す。東吳

の講者之に宗向す。時に秀州に狂人あり、回頭と號す、左道以て流俗を

鼓す。宣言す、當に牽堵波を建て、吳人の 福田と爲すべしと、施者雲の

如くに 委る。然も杭の境に入るを憚る、辨才欺くべからざるを以ての故

なり、已むことを得ずして既に來る。先づ錢十萬を以て、上天竺に詣して

僧に飯す。且つ使を遣はして問を通じて曰く、「今修造の錢若干を以て、願

はくは一堂に供僧せん。」淨其の書に答へて曰く、「道風遠來山川勝を増

す、誨言まづ至る、喜慰量るべし。營建の淨檀を以て、飯僧の用と爲ること

を承はる。竊に聞く、敎に明文あり、手用を許さず、聖者既に明誨を遺す。知らず佛に白す、當

に何の辭を以てすべき、報章を符聞し、即ち疏文を撰せしむ。狂人大いに驚きて、其の徒に見ゆること

を慚づ。然も淨の門弟子、亦且つ之を禮して、以て俗に化せよと勸む。淨、語を厲して曰く、「出家の兒

は須らく眼を具して始めて得べし、彼れ誠に聖者ならば、吾れ敢て恭せざらんや、如し其れ誕妄なら

①萬頃。ひろひろとした山。
②左道。正道ならざる道をいふ。
③福田。幸福のどくだみなり。
④委。委積、つもりつもの。
⑤道風。あなたの御きぶんば、とほきところまで光りますの意なり。
⑥手用。手は互の俗字、牙とまぢがへめようにすべし。

ば、知つて之に同ず、是れ正念を失す。吾れ聞く聖者、他心通を具す、今夕當に爾が曹と度んで請じて、明日に於て、此の山に就いて、十方の諸佛と同齋すべし。即ち法の如く嚴敬して、跪いて疏の文を読み之を焚く。明日衆を率ゐて出で迎ふ。所謂、狂人は竟に至らず、學者皆服す。

汾陽の無德禪師、七十一員の善知識に見ゆ。前後八たび請すれども、皆出世せず、襄陽の白馬寺に燕居す。并汾の道俗千餘人、其の居に詣して、説法を勸請す。既に宗風大いに振ふに至るも、迹闔を越えず、自ら院を出でざるの歌を爲りて、以て志を見はす。北地苦寒、因つて夜參を罷む。忽ちに梵僧の雲に乗じて至るあり、説かざる所以の意を問ふ。師、衆僧夜立すべからざるを以て、詞と爲す。梵僧の曰く、「時失ふべからず、此の衆多からずと雖も、然も中に六人あり、異日大宗師と爲り、道人天に磨ふ。大慈を開きて法施を爲すべし、慍むべからず。」と言卒つて没す。師明日上堂に曰く、「胡僧金錫の光、法の爲に汾陽に到る、六人大器を成す、爲めに敷揚することを勸請す。時に大愚芝、石霜圓、瑯琊覺、法華舉の諸公、咸く會下に在り。

永嘉禪師偈に曰く、「若以レ知知レ寂此非無縁知一如手執二如意一非三無二如意手一若以二自知一知亦非二

- ① 他心通。六神通の一。
- ② 汾陽。善昭首山に嗣ぐ、無德、太子院大中に住す。
- ③ 白馬寺。支那佛教最初の寺、摩訶竺法蘭の古迹。
- ④ 燕居。安居に同じ、宴居ともかく、閑居ともいふ。
- ⑤ 慍。おほふ、蒙らしむの意。
- ⑥ 大愚守芝。瑞州興陽に住す。
- ⑦ 石霜圓。慈明と號す。
- ⑧ 瑯琊覺。滁州琅琊、唐昭と號す。
- ⑨ 法華全舉。舒州法華に住す。
- ⑩ 永嘉。眞覺、六祖惠能に嗣ぐ。

無縁知一如手自捉拳非三是不二拳手一亦不知知寂亦不自知一知不可爲二無知一以二性了然一故不同於木石一如手不執物。亦不自作拳不可爲無手。以二手安然一故不同於兔角。一。智覺禪師の曰く、「斯れ禪宗の妙たるが故に、今之を用ひて復少しく異なり。彼れ但無縁の眞智を顯はし、以て眞の道と爲すを以て、若し奪はゞ但本心を顯はして、妄心に隨はず。未だ智慧の心原を照了することあらず、故に須らく能所平等にして、等しく照を失はざるを。

無知の知と爲すべし、此れ知の空寂無生に於けることは、如來藏性、方に妙ある耳。智覺の意偈に言を兼ねて、悟を明さんと欲す。永嘉は止だ悟の後の病を説く。二老の言は皆是なり、然も天下の理、豈一言を以て盡すべけんや。永嘉の偈、必ず奪はずんば亦可なり。

正宗記に、三祖大師を評して曰く、「尊者初め自ら其の姓族郷邑を道はずと雖も、後の世に於ける、復三十餘載、豈口に絶つて略云はざらんや、此れ疑ふべし。曰く、予、房が碑を視るに曰く、「大師嘗て道信に謂ふて云く、「人あり借問せば、我が處に於て法を得と道ふことなけれ。此れ尊者自ら絶つを明すの甚だしきなり。至人物の迹を以て、大道の累と爲す、乃ち其の心を忘る。今正法の宗、猶は之を遺ることを欲す、況んや其の姓族郷俗間の事をや、肯へて以て意とせんや。予讀んで此に至りて、明教の所得の多きことを知

- ① 智覺禪師。名は永明。
- ② 正宗記。明教大師契嵩の撰。
- ③ 三祖。僧璨、慧覺、智禪師、達磨三世。
- ④ 大師。三祖大師、即ち鑑智禪師を指す。
- ⑤ 道信。四祖大醫道信禪師、達磨の四世。
- ⑥ 借問。試に問ふこと。
- ⑦ 至人。聖者と同じ。

る。王文公、亦曰く、「古の有道の者は、功業の、以て其の懷を累すに足らざることあり、況んや身後の名をや。亮公の西山に逃れ、常公の大梅に庵し、歸宗の目を昧はし、法正の名姓を言はざるが如き、是の諸老、皆能く其の所聞を踐む者なり、固に其の化し去る數百年、凛々として尙ほ生氣あり。彼れ此に意なし、世争でか此を以て、之を與せん。蓋し理固とに然り。」

南禪師、歸宗に住する時、化を遣はして度上に至る、化人還つて白して曰く、「虔に信士劉君あり、行くに臨んで送りて郊外に至り、祝して曰く、『我が爲に、老師の偈一首を求めて、子孫世々の福田と爲さん』と。」明年に師偈を以て之に寄せて曰く、「虔上僧歸廬岳寺一首言居士乞伽陀。授毫示汝箇中意。近日秋林落葉多。後四十年、雲庵復た歸宗に住す、法席前日よりも盛んなり。劉君の子此の偈を持し來つて、僧に針し其の事を叙ぶ。雲庵上堂偈あり、曰く、『先師昔住三金輪一日。有偈君家結淨緣。我住三金輪。還有偈。却應下留與子孫傳。』」

- ① 西山亮。馬祖に嗣ぐ、亮庵主といふ。
- ② 常公。大梅法常は馬祖に嗣ぐ。
- ③ 昧。音び目に物の入ること。
- ④ 化。遷化、死すること、僧家に用ふ。
- ⑤ 南。黃龍南禪師、石霜圓に嗣ぐ。
- ⑥ 歸宗。廬山にある寺の名。
- ⑦ 伽陀。偈と同じ、梵語。
- ⑧ 雲庵。眞淨克文を指す。

涅槃經の中に、「佛は大福德と爲す」と讚するを聞くことあり。怒つて曰く、「生れて七日を経て、母便ち命終、豈大福德の相と謂はんや。」讀者曰く、「年志俱に盛にして卒業ならず、之を打てども噴らす、之を罵れども報せず、是の故に我れ大福德相と言ふ。」と、怒るもの聞いて、心に服する故に、慈を無盡の福德の相と爲す。故に沙門、世の福田を能くするもの、慈を以て身を修むる故なり。

永明和尚の曰く、「此の重玄門名言路絶ゆ、隨智の演ぶる所、以て見聞を廣む。唯證して方に知る、情の解する所に非ず、若し親しく證する時は、悉く是れ現量の境にして、處々法界に入り、念々遮那を見る若し但文義の解する所に隨はゞ、只是れ陰識の依通なり。逆順の境に當つて、時に還つて滯礙を成す、差別の間處に遇ふ、皆是れ疑情なり。」鹽官の安禪師の如き、華嚴を講する大師に問うて云く、「華嚴經、幾ばく種の法界ありや。」對へて曰く、「略して之を言へば、十種の法界あり、廣めて之を言へば、重々無量なり。」鹽官拂子を擧して云く、「是れ第幾重の法界ぞ。」大師 俛首して之に答へんと擬す。鹽官訶して曰く、「思ふて知り應つて解せば、是れ鬼家の活計、日下孤燈、果然として照を失す出で去れ。子華嚴宗に聞くに曰く、『勝熱婆羅門の、火聚刀由は、是れ般若の無分別智なり。』彼の義を疏する者、葉公が龍を畫くに、眞龍忽ち見ゆれば、筆を投じて怖走するが如し。」

- ① 遮那。毗盧舍那の略、大日と譯す。
- ② 鹽官齊安。馬祖に嗣ぐ。
- ③ 俛首。くびをたれて。
- ④ 勝熱婆羅門。耐熱苦行の外道也。
- ⑤ 洞山惠圓。珂州洞山に住す、宗派圖には遷道に嗣ぐとあり。
- ⑥ 遷道者。開先善遷道者、德山遠に嗣ぐ、雲門の三世。
- ⑦ 南禪師。黃龍慧南を云ふ。

焚いて相向ひ危坐する而已。申時より三鼓に至る、圓公、即ち起つて曰く、「夜深けぬ、和尚の 偈息を妨ぐ。」趨り出で、明日各山に還る。南公、偶々 永首座に問ふ、「汝廬山に在つて、今の洞山老を識るや否や。」永曰く、「識らず、止其の名を聞く。」久しうして進んで曰く、「和尚此の回之を見る、如何なる人ぞ。」南公の曰く、「奇人なり。」永退いて侍者に問ふ、「汝和尚に隨つて洞山を見る、夜語して何事にか及ぶ。」侍者實を以て告ぐ。永笑つて曰く、「天下の人を疑殺す。」と、

誌公和尚の十二時の歌、大いに佛祖の要妙を明す。然も年代寢遠くして、昧者多く其の語を改め易へて、以て其の私に循ふ。其れ大いに意を害する者なり。夜半は子、心無生に住するも、即ち生死の心法、何ぞ曾て有無に屬せん、用ひる時は便ち用ひよ、文字を没すと曰ふが如き、乃ち生死何んぞ曾て有無に屬せん。言は則ち工なり、然れども下の句、血脈貫かす。既に生死有無に屬せすと曰ふ、又用ひる時は便ち用ひよと曰ふ何んぞや。

子湘山の道林に在り、僧あり、子に謂ふて曰く、「吾れ初め六祖の風 幡の因縁を看ること久し、偶々首を仰いで、架に就いて衣を取るとき、方に其の旨を薦む。予戲れて曰く、「目を擧げて風幡を見る時に非ずや。」僧之を首肯す。予曰く、「佛祖夜一僧の微語を聞いて、即ち謂ふて曰く、「風幡の動くに非ず、仁者の心動く。」縦ひ其の目を暗中に張るも、二僧何を以てか之を識らん。」僧大いに慥つて去る。

- ① 偈息。よるふすこと。
- ② 永首座。傳記末考
- ③ 誌公。梁の實誌和尚、武帝のときの人。
- ④ 昧者。愚迷のもの。
- ⑤ 利。利。てらに立てるはた。
- ⑥ 架。たな。
- ⑦ 祖師。六祖をさす。
- ⑧ 無盡居士。性は張名は商英、天覺と號す、宋の名臣。

無盡居士、嘗て子の爲に言ふ、頃ごろ京師に慧林の一僧、禪を談じて諸方に肯はざるを見る、吾れ問ふ、蜺子の祖師西來意に答へて、乃ち「神前の酒臺盤」と曰ふ意旨如何。「其の僧目を張つて直に視て曰く、「神前の酒臺盤。」無盡之に戯れて曰く、「廟中是の夕、燈あるときは則ち已まん、然からずんば、蜺子の佛法遂に虚施と爲す。」と。

靈源禪師子に謂ふて曰く、「吾れ嘗て龍舒に在りて、龍門の顯道人の課言を逃るゝ者あることなし。意必ず道ふことあらん。」顯の曰く、「但所見あるを發するを見る。能く其のらば、即ち道ふ微思惟に入り、即ち靈あらず。」

子が故人、耶溪鄒の正臣、能く 五行を言ふ、其の精妙世に一二を以て數ふ。亦嘗て子に告ぐるに此の意を以てす、彼の術の至れるもの、且爾り、況や此れより大なるもの有りて、思慮を以て求むるを欲する乎。

鄧峯の永庵主、嘗て僧潘奇に問ふ、「汝久しく見す、何んの爲す所ぞ。」奇曰く、「近ごろ偉藏主に見ゆ、箇の安樂の處あり。」永の曰く、「試に我れに擧似せよ。」奇因つて其の所得を叙ぶ。永曰く、「汝は是、偉は未だ是ならず。」奇測るゝことなうして、歸つて偉に語る。偉大いに笑つて曰く、「汝は非、永は非ならず。」奇走りて、積翠の南禪師に質す、南公亦大いに笑ふ。永之を聞いて偈を作つて曰く、「明暗相參殺活機。大人境界普賢知。同條生不同條死。笑倒庵中老古錐。」と其の語言を觀るに、當

- ① 蜺子。洞山价の法嗣。事跡頗る異り、日々江岸に出で、蝦蟇を採へ食し、夜は東山白馬廟に宿る、世人蜺子といふ。
- ② 靈源。惟清、黃龍心に嗣法す。
- ③ 五行。木、火、土、金、水。
- ④ 鄧峰永。傳未詳。

時の法喜、游戲の逸韻を想見するに、永公をして今に施さしむ。則ち其の詬辱を取ること必せり。

臨濟大師、臨終付法の偈に曰く、「汎流不止問如何。眞照無邊說似他。離相離名如不取。吹毛用了急須磨。」傳ふるもの急に還つて磨すと作す。曹山和尚、枯木龍吟獨體無識の語を釋して、偈を作つて曰く、「枯木龍吟方見道。獨體無識眼方明。喜識盡時消息盡。當人那辨濁中清。」而も傳ふるもの消不盡と作す。二宗の兩偈、甚だ微にして、一び其の旨を失すれば、則ち害を爲すこと甚だ大いなり、故に辨せざるべからず。言ふ所用ひ了つて、急に須からく磨すべし。者は船子の曰く、「直に須からく身を藏す處、蹤跡を没すべし。沒蹤跡の處、身を藏すことなし」と是れなり。喜識盡る時、消息盡く、當人那ぞ、濁中の清を辨せんとは、達觀の所謂「偏正手に縱横」超然として、十成を忌む。龍門須らく透ることを要すべし、鳥道行くに堪へず、石女霜中に織る。泥牛火裏に耕す、兩頭如し脱得せば、枯木一枝榮ゆ」といふ、是れなり。

無盡居士、嘗て予に問うて曰く、「悟本大師、五位君臣の偈を作る、其の正中來に曰く、「但能莫觸當今諱。也勝知朝斷舌才。」先德の意、妙挾を明すと雖も、然も知朝斷舌必らず本據有つて言ふか、前古斷舌の事なし、矧んや又知朝と曰ふ尤も謂れなし、將に後世傳錄の誤に非ず耶。」予曰く、「舊本に曰く、「也勝前朝斷舌才」と。意は隋の賀若弼が父教、宇文護が爲に忌害せらるゝことを用

曹山。名は本寂、洞山に嗣ぐ、悟本大師といふ、支那曹洞宗の元祖。
達觀。名は曇穎、杭州錢塘の人。
超然。はるかなり。
悟本大師。前の◎を見よ。

ふ。刑に臨みて之を戒めて曰く、「吾れ舌を以て死す。若弼が舌を引いて、錐を以て之を刺し、血を出して口を慎しましむ。隋は唐の前に興る。前朝刺舌、知朝に非ざること明けし、然るに斷舌刺舌、意は則ち同じき耳。」無盡予に屬して之を記せしむ。

道園禪師、南雄州の人、性純至、少うして游方す、飽參と雖も、未だ大いに通透せず。南禪師 黃檗の積翠庵に居ると聞き、往いて之に依る。一日下板に燕坐す、兩僧の百丈野狐の因縁を擧するを聞く。一僧の曰く、「只不昧因果の如きは、也未だ野狐身を脱得せず。」一僧聲に應じて曰く、「便ち是ならば、因果に落ちず、亦何ぞ曾て野狐身に墮らんや。」圓 悚然として其の語を異とす、自ら其の身の起つを覺えず、行いて庵頭に上らんことを意ふ。澗を過ぎて忽ちに大悟す。南公に見えて、其の事を叙ぶること、未だ終らざるに涕願に 交ぶ。南公、侍者の榻に就いて熟寐せしむ。忽ち起きて偈を作りて曰く、「不落不昧。僧俗本無忌諱。一丈夫氣宇如王。爭受三囊藏被蓋。一條柳標任縱橫。野狐跳入金毛隊。」南公大いに笑ふ。久しうして又風幡の偈を作つて曰く、「不是風一分不是幡。白雲依舊覆青山。年來老大渾無力。偷得忙中些子閑。」予昔、雲庵の大いに之を稱賞して、其の機鋒、英邵武に滅せずと謂ふを聞く。雲庵化し去る、偶々故書を檢するに、其の手づから此の二書を疏するを見る。意傳へんと欲して、而も

黃檗。臨濟和尚の師なり。
悚然。ぞつとして、又はあつげにとられる。
交。おまぶ、つたふこと。
柳標。杖。
英邵武。清澤洪英、姓は陳、邵武軍の人、黃龍南に嗣ぐ。

未だ果さざるもの、若し、是に於て之を録す。或は聞く、圓公は大庚の雪峰寺に住す。
 皓月供奉、長沙岑禪師に問うて曰く、「永嘉の云く、『了すれば、即ち業障本來空、未だ了せざれば
 應に須からく、夙債を償ふべし。』只、師子尊者、二祖大師の如きは、什麼としてか、亦夙債を償ふ。
 長沙曰く、「大徳本來空を識らず。』曰く、「如何なるか是れ本來空。』長沙の曰く、「業障是。』又問うて曰
 く、「如何なるか是れ業障。』長沙の曰く、「本來空是。』乃ち偈あり、曰く、「假
 有元非有。假滅亦非無。涅槃債債義。一性更無殊。』龍勝の
 中觀論に曰く、「業は縁より生ぜず、非縁より生ぜず。是の故に則ち能
 く業より起る者有ること無し。業なく作者なく、何んぞ業の果を生ずること
 と有らん、若し其れ果あること無くんば、何んぞ業を受くる者有らん。』問
 うて曰く、「汝種々に業果報及び業を起す者を破し、現に衆生の業を作し、
 果報を受くるを見る、是の事云何。』答へて曰く、「世尊の神通の如きは、變
 化人の作す所なり、是くの如き變化人、復變化人を作す、初の變化人の如
 し、是を名けて作者と爲す。變化人の作す所、是を則ち名けて業と爲す。
 諸の煩惱及び業、皆幻と夢との如し、亦炎と響との如し。龍勝の意を以て、長沙の言を會して、無
 作の妙旨に達せば、此の世界に遊ぶこと、夢中に了了として、醉裏に惺々たるが如くならん。」

- ①永嘉。記道歌を作る、了すれば云々はその一句也。
- ②夙債。前生にてつくりしつみと。
- ③師子。印度の人、觀宗第二十祖にして、鷄勒那夜闍に嗣法す。
- ④二祖。惠可大師、達磨に嗣ぐ。
- ⑤大徳。尊敬して皓月をさす。
- ⑥龍勝。龍樹菩薩のこと、印度の人。
- ⑦中觀論。三論の中。
- ⑧了了。さかしきこと。
- ⑨惺惺。心さときこと。

汾州の無徳禪師、徒に示すに、多く洞山の五位、臨濟の三玄を談す。廣智の歌を作つて、十五
 家の宗風を明すに至る。豈後進の參尋を惜つて、少を得て足れりと爲るを視て、之を警しむるに徧參
 を以てするに非ずや。今の知識に問ふもの有らば、則ち答へて曰く、「吾が家自ら本分の事あり、彼れ
 皆古人の一期、建立の門庭言語のみ、何んぞ究むるに足らんや。」と正に字
 を識らざるものあり、巻を執りて、屋愚子に問へば、屋愚の「此れ墨紙に
 填てる耳。安んぞ我に問ふことを用ひんや」と曰ふが如し、三尺の童子も、
 笑はざるは莫し。昔僧あり、雪峰和尚に問ふ、「臨濟に四喝あり、意旨如
 何。』雪峰の曰く、「我れ初め發足便ち、河北に往く、意はざりき、中途、大
 師化し去る、因つて之に見ゆるに及ばず、他家の宗旨、我れ未だ知ざる所
 なり、汝彼の兒孫を尋ねて、之に問へ。』僧以て、南院に問ふ。且つ雪峰嘗
 て之を遣はすの意を言る、南院雪峰を望んで再拜して曰く、「和尚は眞の善
 知識なり。嗚呼、今、讒々として人に語つて、屋愚子の如くなる者、雪峰
 の用處を聞かば、面熱し汗下らざるべけん耶。」と。
 雪峰悦禪師、僧の籠を荷ふて至るを見て、則ち曰く、「未だし、更に三十年して、定んで馬に乗つ
 て行脚せん。」法雲の秀禪師、包腰して至るものを聞いて、色顔面を動かす、彼れ心を叢林に存する

- ①無徳。汾陽善昭禪師を指す。
- ②十五家。五家七宗等の禪宗十
五流。
- ③屋愚子。俗言、馬鹿者の意。
- ④臨濟。四喝四通りの喝の用。
- ⑤河北。地名。
- ⑥南院。名は惠顯。
- ⑦讒々。あらしふ、いかりよぶ
こゝろに形容する。
- ⑧雪峰文悅。南岳、大愚芝に嗣
ぐ、汾陽三世。
- ⑨法雲秀。圓通、天衣懷に嗣ぐ。

こと、豈淺淺ならん哉。今少年、苾芻、其の畫像を見て、則ち指して曰く、「這の通方の漢ならず、也死耶。」

首楞嚴經に曰く、「一切の世間、生死相續す。生は順習に従ひ、死は流變に従ふ、臨命終の時、未だ煖觸を捨てず、一生善惡俱に時に頓に現す。舌の釋此に至つて多く之を略す、滋以て恨と爲す、寶積經を讀むに及んで、此を釋するに意あり。

今其の下に系けて曰く、「善惡の業は自らの作る所、時に一生の中、何ぞ自ら見ざる。捨壽の時に至つて、方に始めて頓に現する者、人生夢の如し、方に夢を作す時、豈能く自らは是れ夢、夢に非すと知らんや。要は須らく覺時夢中の事、了然として自ら現すべし、尋釋を待たず、亦復是くの如し。」

福嚴の感禪師、面目嚴冷、孤硬叢林に秀出す。時に之を感、鐵面と謂ふ。衆僧に江州の承天に首たり。時に佛印の元禪師、將に遷つて新州の斗方に居り、郡守に譽あり。之を嗣續せしめんと欲す、且つ感を召して、其の事を語る。感の曰く、「某念此に至らず、和尚終に推し出して、衆の爲に粥飯して、主人と共に叢席を成さんと欲す、敢て徳を忘れず。然若らず法を嗣がしめば、則ち某自ら師あり。」佛印、心に之に服す。業已に之を言ふ。因つて成就して、復た易へず、遂に法を開いて、黃龍の子と爲る、道

①淺淺、水の疾くながるるにたとふ。

②苾芻、梵語、譯して僧、又は比丘とも云ふ、元と草の名。

③首楞嚴經、十卷。

④孤硬、ひとりかたいちな。

⑤鐵面、感師の硬面、鐵に比せる也。

⑥承天、寺名。

⑦佛印元、雲居に住す、開先に嗣ぐ。

⑧粥飯、音キ。

⑨粥飯、大衆にちちそうする。

價一時に重し。居常包を懸け、杖を方丈に倚る、宿夕の計を爲さず、郡將已下皆之を信敬す。太守あり、其の姓名を忘る、新に車を下り、事を以て之に臨む。感笑つて偈を作り、郡庭に投じ、搦せすして去る。偈に曰く、「院是大宋國裏院。州是大宋國裏州。州中有院不容住。何妨一鉢五湖游。」と太守人をして之を追はしむるに、已に江を渡り去る。

餘杭の政禪師、住山標致最も高し。時に蔣侍郎、錢塘に守たり、師と方外の友たり、師毎に來り之に調す。則ち一の黃牛に跨り、軍持を以て、角上に掛く、市人争ふて之を觀る、師自若たり。

郡庭に至りて、始めて牛を下つて笑語、終日にして去る。一日蔣公、師を留めて曰く、「適々過客あり、明日府中に當に會あるべし、吾が師因に飲まず、能く我が爲に少しく留まること一日せよ、因つて清話せんと欲す。師之を諾す、蔣公喜ぶこと甚だし。明日人をして之を要せしむ。一偈を留めて去る、

曰く、「昨日曾將今日一期。出門倚杖又思惟。爲僧只合居三岳。谷國士筵中甚不宜。」と坐客皆其の高韻を仰ぐ。又山中の偈を作つて曰く、「

橋上山萬層。橋下水千里。唯有白鷺鷥。見我常來此。冬爐擁せず、荻花を以て毯を作り、足を中に納る。客至れば之を共にして、清論窮りなし、秀氣人に逼る。秋夏好んで月を翫ぶ。膝を大盆の中に盤し、池上に浮べ、自ら其の盆を旋し、吟笑して旦に達す、率ね以て常と爲す。九

①郡庭、郡のやくしよ。

②政。百丈惟政禪師、慧明に嗣ぐ。

③住山。住持する風彩。

④標致。道德の高きことを云ふ。

⑤高韻。けだかきやうす。

⑥盤。わだかまること、さかぶれのこと。

⑦旋。かへす、あちらこちらと

峰鑑詔禪師、嘗て門下に客たり、詔、坦率、垢汗にして、事を事とせず、毎に竊かに之を笑ふ。一夕將に臥せんとす、師人をして詔を呼ばしむ、已むことを得ずして、纏繞して至る。師の曰く、「好月、勞生、擾々たり、能く幾人か之と對するに暇あるか。」詔唯々す。已にして、行者を呼んで熟炙せしむ。詔方に飢ゑて、藥石を作すと意へり、久しうして乃ち橋皮湯一盃のみ。

靈源禪師、予の爲に曰く、「居士あり、吳敦夫といふ、才敏銳にして、學道に意あり、自己多く、知識に見ゆ、心地明淨なり。偶々、鄧隱峰の傳を閱するに、其の倒に卓つて化し去つて、而も衣亦身に順じて褪せずといふを見て、竊かに之を疑ふて曰く、「彼れ化の異なること固に測ること莫うして、衣亦之に隨ふは何んぞや。」以て晦堂老人に問ふ、晦堂の曰く、「汝今衣順じて地に垂る、復之を疑ふ乎。」曰く、「疑ふ所なし。」晦堂笑つて曰く、「此れ既に疑ひ無ければ、則ち彼れ倒に化す、衣亦體に順ず、何んの之を疑ふこと有らん哉。」敦夫言下に了解す。故に其の一時、應機の辨、雷の如く霆の如く、昏墊を開警するもの多し。

- ① 舟のやうにひつくりかへす。
- ② 九峰。清潭澄に嗣ぐ、雲門三世。
- ③ 坦率。ひろくさつぱりしたる、むとんぢやくのこと。
- ④ 垢汗。あかやあせでもかまはぬ。
- ⑤ 纏繞。かほをしかめて。
- ⑥ 勞生。ごくらう、莊子大宗師に出づ。
- ⑦ 擾々。みだる。
- ⑧ 行者。僧院に居る俗人。
- ⑨ 藥石。禪寺に夕食を「やくせき」と云ふ。
- ⑩ 靈源。名は惟清、黃龍死心に嗣ぐ。
- ⑪ 知識。禪宗の宗師たち。
- ⑫ 鄧隱峰。馬祖に嗣ぐ、五臺に住す、唐代の名僧。

① 金剛經に曰く、「爾時慧命、須菩提、佛に白して言さく、「世尊、願る衆生あり、未來世に於て、是の法を説くを聞いて、信心を生ずるや不や。」佛の言はく、「須菩提、彼れ衆生に非ず、衆生に不ざるに非ず。」何を以ての故に、須菩提、衆生の衆生といふは、如來、衆生に非ずと説く、是を衆生と名づく。」此の義深渺にして、從上の聖賢、語秘に旨妙にして、學者、多く聽瑩して、佛意卒かに明めず。獨り定林老人のみ、解して曰く、「慧命を以て、衆生を觀ること、第五大の如く、第六陰の如く、第七情の如く、孰れを衆生と爲す。衆生を以て、衆生を觀る、然して後、妄りに其の有たることを見ば、則ち衆生は、慧命者の衆生に非ず、是れ衆生の衆生而已。衆生の衆生は即ち衆生に非ず。然るに是れ乃ち所謂衆生なり。則ち是の法を説くを聞き、苟くも能く本性相を悟らば、何爲ぞ、信心を生ぜざらん、慧命を以て、衆生を觀ば、其の有と爲すを見ず、則ち云何か衆生を度せんや。」曰く、「衆生に衆生ありて、而も衆生有に非ず、慧命、衆生無うして而も衆生、無に非ず、是の義を以ての故に、衆生を度す。」

② 大智禪師の曰く、「此の事は、是れ一切の名目にあらず、何を以てか、實語を以て答へざるや。」曰く、「若爲ぞ、虚空を雕琢し得て、佛の相貌と爲す、若爲ぞ説いて、虚空は是れ青黃赤白と道ふ、維摩に云ふが如し、法は比あることなし、喩ふべき無きが故に、法身無爲にして、諸數に墮せず。」

と、故に曰く、「聖體名なし、説くべからず、實理空門の湊り難きが如し、喩へば太末蟲の處處に、能く泊まる、唯火燭の上に泊まる能はざるが如し。衆生も亦爾り、處處に能く縁すれども、般若の上に縁する能はず、毎に學者を見るに、多く誤つて、其の意を領す、衆生般若に於て、參求すること能はずと謂ふ耳、非なり、此の法は情識の到る所に非ず。」故に三祖大師の曰く、「非思量の處、識情測り難し。」と

青龍の道氣法師、金剛般若經に於て、深く妙旨に達す。嘗て疏を造る、此の經を疏して、精博淵微、法の體相を窮む。諸師能く其の藩垣を望むこと莫し。唐の明皇、亦意を經の義に留む、自ら之を注釋す。「是人先世罪業應墮惡道以今世人輕賤故、先世罪業則爲消滅」といふ處に至つて、自ら其の義を決する能はず、以て氣に問ふ。氣對へて曰く、「佛力法力は三賢十聖も亦測ること能はず。陛下、曩般若に於て聞薰一ならず、更に注想に沈んで、自ら現行を發す。」明皇是に於て、筆を下して休まず、其の天縱神悟の辨、一期の應答、滯惑を言下に掃ふて、般若を現前に掲ぐ。豈意思義解の日を同じうして語るべけんや。

雲門大師、有る時僧を顧視して曰く、「鑿。僧之に對へんと擬す、則ち曰く、「嘆。」後學其の語を録して偈を爲りて、顧鑿の頌と曰ふ。徳山

- ① 維摩。印度の長者、維摩經十卷あり。
- ② 三祖。僧肇、道安、慧遠三世。
- ③ 藩垣。さかひざき。
- ④ 天縱。天賦の伶俐なることにして、縱はゆるす也。
- ⑤ 雲門大師。雲峰、眞覺義存に副ぐ、匡眞文偈。
- ⑥ 鑿。顧鑿の三語の一、禪宗にては雲門一流の警策に用ひる。

の圓明禪師は雲門の高弟なり、顧の字を刪り去つて、之を抽願の頌と謂ふ。因つて偈を作つて之を通ず、又之を擡簡商量と謂ふ。偈に曰く、「相見不揚眉。君東我亦西。紅霞穿碧海。白日透須彌。」雲庵亦偈あり、曰く、「雲門抽願自有來由。一點不到、休休休休。今の禪者、多く之を漫汗す。其の意旨を問ふに則ち往往に、瞠目怒り視て曰く、「此れは是れ道眼の因縁なりと亦、悞らずや。又其の室中語に曰く、「盡大地是れ法身、枉げて箇の佛法の知見を作す、如今拄杖を見て、但喚んで拄杖と作す、屋を見て但喚んで屋と作す」と。校證する者之を易へて曰く、「枉げて箇の佛法中の見を作す。」又曰く、「小より一頭の水牯牛を養ふ、溪西に向つて放たんと擬す、他の國王の水草を食むことを免れず、如かず處に隨つて、些子を納る、他惣べて妨げず。」今の本には乃ち曰く、「他惣べて見す」と。此くの如きの類、甚だ衆し。然るに此の二字、細事と雖も、其れ先徳の妙旨を失す、傷ますと爲や、當に知者あるべき耳。

英邵武、臨終に安坐して、門弟子の爲に、出家行脚の因を説き竟つて、乃ち曰く、「吾れ即ち化せば、骨石を普會塔に藏むべし。吾れ生平大海衆と居す、死して之と離るゝことを忍びず、他あるに非ず古の聖賢、叢林に因つて以て、情見を折伏し、道果を成辨せざるは莫し。今時の衲子、徳薄く垢

- ① 嘆。喝、咄等と同様に用ふ。
- ② 圓明。廬州徳山の鎌密、雲門に副ぐ。
- ③ 抽願。願の字をぬくと云ふこと。
- ④ 漫汗。人を馬鹿にすること、蔑視すること。
- ⑤ 瞠目。目をみはる。
- ⑥ 悞。誤と同じ。
- ⑦ 水牯牛。めうし。
- ⑧ 普會塔。修行の雲水の亡僧の墓と同一の石塔にといふ事、普く會まるの意なり。

重く、志願衰劣にして、多く厭退を生ず、是れ大いに憫笑すべきなり。師既に化す、衆終に忍びず、已むことを得ずして、水中に投ず、故に泐潭に今復、英禪師の塔あることなし。

舜老夫、天資英特にして、叢林に飽く。初め棲賢より移つて雲居に居る。牒を授け、障座、衆に白して杖を曳いて去る。暮年に身を以て、衆を律して尤も謹嚴なり。嘗て少しく不安なれば、即ち維那に白して、涅槃堂に下る、病愈ゆれば、即ち方丈に入る。惜むらくは其の傷慈なることを、開示する所有れば、但曰ふ「本自ら無事、我れに従つて何をか求めん。」と南禪師、時に已に積翠に居る、之を聞いて侍者に謂ふて曰く「老夫、耄せり、何んぞ有事を無事ならしめ、無事を有事ならしめざる、是れを淨佛國土成就、衆生と謂ふ。」と。

三祖大師、信心銘を作りて曰く「至道無難。唯嫌揀擇。但莫憎愛。洞然。明白。毫釐有差。天地懸隔。」と故に知る古の得道の者、一切舊に仍らずといふこと莫し。僧あり、永明和尚に問ふ、「衆生と佛と既に同體と曰ふ、何故に苦樂殊なることある。」答へて曰く、「諸佛は法性に悟達して皆自心の原を了す、妄想生せず、正念を失はず、我所の心滅す、故に生死を受けず、即ち究竟して、常に寂滅、寂滅を以ての故に、乃ち樂み自ら歸す。一切衆生は、眞性に迷ふて、本心に達せず、種々の妄想を以て、正念を得ず、故に

- ①舜老夫。雲居老夫曉舜、洞山聰に嗣ぐ、雲門五世。
- ②障座。大殿の説法する座にのぼる式。
- ③涅槃堂。病僧の入る寮なり、延壽堂とも云ふ。
- ④傷慈。慈悲すぎるを云ふ、慈悲にすぎがつくことなり。
- ⑤耄。わするるといふて、八十九十を云ふ、おいはれといふこと。
- ⑥永明。智覺。

即ち憎愛す。憎愛を以ての故に、心器破壊し、即ち生死を受け、諸苦自ら現す、法要を知らんと欲せば、心を守るを第一とす、若し一人も眞心を守らざれば、成佛を得ること、是の處り有ることなし。悦禪師、妙年にして奇逸なり、氣諸方を壓す。雪竇に至る時、壯歲なり、之と辨論す、雪竇常に之に下る。茶を會する毎に、必ず其の中に、特榻せしめ、以て之を尊異す。是に於て、悦首座の聲價、東吳に照映す。悦公出世するに及んで、道大いに光耀す。蘭上座といふ者あり、雪竇の法窟より來る。悦公之を勸詰す、大いに驚き、且つ衆に譽あり、相從ふこと、年を彌りて後去る。前輩の後進を推轂す。其の公なること此くの如し、初めより未だ嘗て雲門臨濟を以て、其の心を二つにせず、今は則ち然らず、始は名位を以て惑ひ、卒に宗黨を以て膠す、固に里巷無知の俗の如し。古聖の道、復興らんことを求むるも、亦難からざらん哉。

- ①悦。雲峰。
- ②特榻。上座にいすをかまうける。榻は椅子なり。
- ③勸詰。かんがへなじる、商量するなり。
- ④推轂。車のこしきをおす、人をおしすすむるを云ふ。
- ⑤膠。につちもさつちもゆめ、ゆうづのつかぬこと。
- ⑥行乞。僧家の托鉢、こゝろなり。
- ⑦疏。請待の文章、又は趣意をのべる文章。

舜老夫、初め洞山より、武昌に如いて、行乞す。先づ一の居士の家に至る、居士高行あり、郡の爲に敬せらる、意に與奪する所、之に従はざるは莫し。故に諸方の乞士、至れば必ず之に謁す。舜老夫、方に年少うして、其の飽參なることを知らず、頗る之を易る。居士の曰く、「老漢一問あり、上人語相契はゞ則ち、疏を開き、如し契はずんば即ち請せん。却りて新豐に還れし

と。問ふ、「古鏡已に磨する時如何。」對へて曰く、「天を照し地を照す。」未だ磨せざる時如何。曰く、「黒きこと漆の如し。」居士曰く、「却りて請ふ山に還れ。」舜即ち馳せ歸つて、聰禪師に舉似す。聰代語を爲す、舜即ち趨つて問うて曰く、「古鏡未だ磨せざる時如何。」聰曰く、「此漢陽を去ること遠からず。」磨して後如何。曰く、「黃鶴樓前鸚鵡洲。」舜言下に於て大悟す。聰公機鋒觸るべからず、眞の雲門の孫なり。嘗て自ら松を植ゑて、口に金剛經を誦すること、輟まず、今洞山の北嶺を、金剛嶺と號す、松皆天に參す、乃ち師手づから植ゆるなり。筠の守、許公式、詩を以て贈つて曰く、「語言全不滯、高躡三祖師蹤。夜坐三連雲石、春栽二帶雨松。鑑分金殿燭、山答二月樓鐘。有問西來意、虛堂對二遠峰。」

南禪師、久しく泐潭の澄禪師に依る。澄已に其の悟解を稱す。分座說法せしむ。南書記の名、一時に藉甚なり。其の慈明の席下に、夜參を聞くに及んで、氣已に奪はる。往いて咨詢せんと謀る、三たび寢堂に至つて三たび進まず。因つて慨然として曰く、「大丈夫、疑あり、斷せずんば、何をか爲さんと欲する乎。」と即ち入室す。慈明左右を呼び、榻を進めしむ。且く坐せしむ。「南公某、實に疑あり、願はくば、誠を投じて決せんことを求む、惟だ大慈悲の故に、法座を借まされ。」慈明笑つて曰く、「公已に衆を領じて行脚す、名諸方に傳ふ。未だ透らざる處ありて、以て

- ① 舉似。あげしめす。
- ② 代語。代りてその主意を拈弄す。
- ③ 許式。洪州太守、舜老夫と同參、洞山曉に嗣ぐ。
- ④ 藉甚。熾なること。
- ⑤ 寢室。住持正寢の堂なり。

商略すべき爾、何んぞ必らず復入室せんや。」南公再三懇求すること已まず、慈明の曰く、「雲門三頓の棒の因縁、且く道へ、洞山當時、實に棒を喫するの分ありや、棒を喫するの分なしや。」對へて曰く、「實に棒を喫するの分あり。」慈明の曰く、「書記の解識此に止まる、老僧固に汝が師と作るべし。」と即ち禮拜せしむ。南公平生の負ふ所、此に至りて伏膺す。予嘗て靈源禪師に聞く、曰く、「昔晦堂老人、親しく積翠に従つて聞く所なり。因つて舊説に同ず、併せて此に録す。

福州の善侍者は、慈明の高弟なり。當時の龍象は、道吾の眞、楊岐の會を數ふ。然も皆之に推服す。嘗て金鑾に至る、眞、點胸自ら親しく慈明に見ゆることを負み、天下に意に可なる者、有ること莫し。善と與に語る、其の未だ徹せざるを知りて之を笑ふ。一日山行す、眞の舉論鋒發す、善、一の瓦礫を取つて石上に置く。曰く、「若し者裏に向つて、一轉語を下し得ば、儼に許す曾て老師に見ゆることを。」眞、左右を視て之に對へんと擬す、善喝して曰く、「佇思停機、識情未だ透らす、何んぞ曾て夢にだも見え去らん。」眞大いに愧悚して、且く霜華に還らんことを圖る。慈明、來るを見て曰く、「本色行脚の人、必らず時節を知る、什麼の忙はしき事ありてか、解夏未だ久しからず、早く已に此に至る。」對へ

- ① 書記。黃龍南をさす、書記の役を命ぜらる、五侍者の外の役僧。
- ② 侍者。禪宗の役僧名、住持の左右に給事するもの、善侍者は福州資福に住す。
- ③ 龍象。すぐれた學者たちを云ふ。
- ④ 道吾。吾眞、慈明に嗣ぐ。
- ⑤ 楊岐。方會、慈明に嗣ぐ。
- ⑥ 點胸。むれなうつ、眞のあざ名。
- ⑦ 鋒發。意氣するどきこと。
- ⑧ 一轉語。禪宗では評語を、一てんこと云ふ。

て曰く、「善兄の毒心を以て、終に人を礙塞せらる、故に復來りて、和尚に見ゆ。」慈明の曰く、「如何なるか佛法の大意。」對へて曰く、「無三雲生三嶺。上。有三月落三波心。」慈明、目を瞑して喝して曰く、「頭白く齒豁に猶ほ此れ等の見解を作す、如何んが生死を脱離せん。」眞、敢て仰ぎ見ず、涙願に交ぶ。久しうして進んで、曰く、「知らず如何なるか、是れ佛法の大意。」慈明の曰く、「無三雲生三嶺。上。有三月落三波心。」眞、言下に大悟す。眞公、爽氣逸出、機辨迅捷なり、叢林之を憚る。法を翠嶺に開く。嘗て曰く、「天下の佛法、一隻の缸の如し。」大寧の寛師兄、頭に坐し、南福頭其の中に在り、可眞梢を把る、東を去る也我に由る、西を去る也我に由る、善公尋いで七閩に還る。伴狂垢汚なり、世に之を識る者あることなし。或は聞く晚に鳳林に住すと。

- ① 礙情。ぼんなう、まうさう。
- ② 霜華。慈明禪師の居りし地。
- ③ 解夏。夏は九十日づつ冬と夏に守る、九十日の禁足日なはりて。
- ④ 兄。唐音にてよむ、即ちびん也。
- ⑤ 大悟。已事を諦め盡すこと。
- ⑥ 缸。船の俗字。
- ⑦ 大寧。道寛、大寧は寺の名、洪州に在り。
- ⑧ 南福頭。黃龍南。
- ⑨ 可眞。翠嶺、慈明下。
- ⑩ 化。僧の死を化と云ふ、死ぬ。
- ⑪ 移檄。急書を發して。
- ⑫ 長老。禪僧の法階の一。
- ⑬ 監寺。禪宗の役僧の名、そのとりしまりするやく。

楊岐の會禪師、慈明に従つて遊ぶこと最も久し、至る所の叢林に、師必ず寺主と作る。慈明、化し去つて、迹を九峰に託す、忽ちに宜春より移檄して、命じて楊岐に居らしむ。時に長老勤公、驚いて曰く、「會監寺、何ぞ會て禪に參せん、萬か一も之を受けば、恐くは州郡の望を失はん、私かに之を憂ふ。」會、請を受け、即ち座に升り、機辨逸格、一衆爲に傾く。下座、

勤、前んで其の手を握つて曰く、「且く箇の同參を得たり」と。曰く、「如何なるか是れ同參底の事。」勤曰く、「楊岐、犁を牽き九峰、把を披く。」と曰く、「正當與麼の時、楊岐前に在る耶、九峰前に在る耶。」勤、擬議す、會、喝して曰く、「將に謂へり同參却つて同參にあらず」と。是れより道價諸方に重し、衲子其の門を過ぐれば、伏膺せずといふこと莫し。嘗て雪に因つて衆に示して曰く、「楊岐乍住屋壁踈。滿床盡布雪。眞珠一縮却。項暗嗟。呼。翻憶古人樹下居。」と、其の活計風味の類此くの如し。

- ① 犁。からすき、農家の田を耕すに用ふ。
- ② 把。爬と同じ、手がきの道具。
- ③ 與麼。そんなら。
- ④ 擬議。いきつまる。
- ⑤ 道價。徳力のれうち。
- ⑥ 仰山。鴻山に嗣ぐ。

仰山和尚に僧問ふ、「尋常和尚人に示すに、多く圓相を作し字を畫き作す、意旨如何。」山曰く、「此れ亦閑事、汝若し會するも、外より來らず、會せざるも亦失はず。吾れ今汝に問はん、汝參禪學道の時、諸方の老宿、汝が身上に向つて、那箇か是れ汝が佛性と指さば、語底是耶、默底是耶、總に是耶、總に不是耶。若し語底是なりと認むれば、盲の象の耳鼻牙を摸する者の如し。若し默底是なりと認むる耶、是れ無思無念、象の尾を摸する者の如し。若し不語不默底、是れ中道なることを取せば、象の背を摸する者の如し。若し總に是と道はば、象の四足を摸する者の如し。若し總に不是と道はば、本象を拖いて、空見に落在す。正當の諸盲皆云ふ、象を見る安ぞ止だ象上に於て名貌差別することを知らん耶。若し汝、六句を透得せば、象を摸することを要せず。最も第

一と爲す。如今の覺覺是なりと道ふ莫れ、亦不是と道ふ莫れ。所以に祖師の曰く、「菩提本無是。亦無非菩提。更覓菩提處。終身累劫迷。」又曰く、「本來無一物。何處有塵埃。」と、其の弟香嚴老亦曰く、「^①的々無兼帶。獨立何依賴。路逢達道人。莫下將語默。對」と、其嘗て僧に問ふ、「既に語默を將つて對せず何を以てか之に對せん。」僧未だ答ふるに及ばず、忽ちに^②板鳴る。予曰く、「子が答話を謝す。」と。

龍勝菩薩曰く、「若し先きに生ありて後に老死あらしめば、老死せずして、生あり、生は老死あらず、若し老死あらしめて、而して後に、生ある者は、是れ則ち無因と爲す、生せずして老死あり。」此の偈を以て、衆生の生死の際を觀ば、^③環の上に始末を尋ぬるが如く。是の處り有ることなし。吾れ是を以て知んぬ、古の此の意を得る、去住の間に於て、了に留礙せざることは、特に其れ物に不二なる耳。

維摩經に曰く、「善來文殊師利、不來の相にして來り、不見の相にして見よ。」と、文殊師利の言く、「是くの如く居士、若し來り已らば、更に來らず、若し去り已らば、更に去らず。所以は者何、來る者は從來する所なし、去るもの所至なし。見るべき所の者は、更に見るべからず。」と、起信論に曰く、「若し心に見あらば、則ち不見の相あり。心性は見を離る、即ち是れ法界を徧照す

①香嚴。鴻山に嗣ぐ、仰山の法弟也。
②的的。あきらかなること。
③板。禪宗の叢林には進退を報するに木板をつるして之を鳴らす開板と云ふ、朝夕にならず、金板をつるす、之を雲板と云ふ、飯の時、朝午に鳴す。
④善來。ようおいでたな。

る義、故に乃ち知る、心外に法なし。」と徧照の義、成す。苟くも去來の相見あらば、則ち正義を遺る、人の、風性本動くと言ふが如きは、是れ大いに然らず。風本動かす、能く諸物を動す。若し先きに動あらば、則ち自體を失して、復た更に動かす、則ち動を知る者は、乃ち其の未だ嘗て動せざることを明す所以なり。去來の相見も亦復是くの如し。

洞山の聰禪師は、詔の曲江の人なり、文殊の應天の眞和尚に見え、初め廬山に遊ぶ。之を知る者あること莫し。時に雲居の法席、最も盛なり、師燈頭と作る。僧衆の泗州の僧伽、近く楊州に於て出現すと談するを聞いて、問を設くる者あり、曰く、「既に是れ泗州の大聖、什麼としてか、楊州に向つて出現す。」聰曰く、「君子は財を愛す之を取るに道あり。」一衆大いに驚笑ふ。僧あり、蓮華峰の祥庵主の所に至り、之を舉似す。祥公大いに驚いて曰く、「雲門の兒孫、猶ほ在り。」と、中夜に雲居を望んで之を拜す、聰の名遂に叢林に重んぜらる。祥公は奉先の深禪師の嗣なり、知見甚だ高うして、氣諸方を壓す。嘗て衆に示して曰く、「是れ此の事の如きは最もこれ急切、須らく是れ明取して、始めて得べし。若しこれを明らめ得ば時中、拘繫を被ることを免る、便ち處に隨つて安閑なることを得ん。亦心を將つて捺伏することを要せざれ。須らくこれ自然に、他の古轍に合し去つて、始めて得べし。纔かに學處の分

①燈頭。火をともし役。
②僧伽。印度の人、唐睿宗景雲元年三月寂、年八十三。
③祥庵主。奉先深に嗣ぐ、雲門三世。
④深禪師。奉先道深融照、寺の名は金陵、雲門に嗣ぐ。
⑤捺伏。おしふくする。
⑥古轍。むかしよりの佛祖の説話などをいふ。

すること

劑に到つて、便ち須らく箇の道理を路布すべし、以て佛法の爲めに、幾ばく時か、心地休歇し去ることを得ん。」と、上座却りて請ふ、與麼に相委せば好し、臨終に上堂、拄杖を擧げて衆に問うて曰く、「汝道へ、古佛者裏に到つて、什麼としてか肯て住せざる。」衆對ふる者あること莫し。乃ち自ら曰く、「他の途路に力を得ざるが爲めなり。」復曰く、「作麼生か力を得去らん。」拄杖を肩上に横たへて曰く、「柳樗横擔不顧人。却入二千峰萬峰去。」と、言ひ訖つて化す。嗟乎、今の學者、其の識趣前輩と何んぞ其れ相遠き耶。祥公の聰燈頭の一語を聞いて、其の雲門の兒孫たるを知るが如き、其の後、能く其の言を逃るゝ莫し。今對面して終身論辨すと雖も、邪正を辨する者あることなし。其の故は何んぞや、其の死生の際に臨んで、超然として、自ら得ること、此の如くなるを以て、則ち其の平生、養ふ所高妙なること知るべし。惜いかな、之を嗣ぐ者あること莫きことを。師 西峰雲豁禪師と 兄弟なり。

百丈山の第二代 法正禪師は、大智の高弟なり。其の先に嘗て涅槃經を誦して、姓名を言はず、時に呼んで涅槃和尚と爲す。住して法席を成す、師の功最も多し。衆をして田を開かしめ、方に大義を説く者は、乃ち師なり。黄檗、古靈の諸大士、皆之を推尊す。唐の文人武翊黃、其の碑を撰して甚だ詳かなり。柳公權が書、妙なること古今に絶す。傳燈に載する所、百丈の惟政禪師、又馬祖の

- ① 者裏、このうち。
- ② 西峰、奉先深に嗣ぐ、雲門三世。
- ③ 兄弟、てしきやうだい。
- ④ 百丈山、洪州に在り、南昌府大雄山大智院。
- ⑤ 法正、百丈涅槃とも云ふ、大智に嗣ぐ。
- ⑥ 黄檗、希運、百丈大智に嗣ぐ。
- ⑦ 古靈、神贊、同上。

法嗣の列に係くるは、誤れり。正宗記を観るに則ち惟政法正あり、然も百丈の第代數ふべし。明教、但だ皆其の名を見て、辨すること能はずして、俱に存す。今當に柳が碑を以て正と爲すべし。古佛の偈に曰く、「人の路土を掘りて、私に人造を像と爲すが如き、愚人は像生すと謂ふ、智者は路土と言ふ。後時に官行かんと欲す、還りて像を將て路に填つ、像本生滅なし、路亦新故に非ず。」又偈に曰く、「諸色心現時。如二金銀隱起。金處異名生。與金無二前後一故。」と。文殊師利の言く、「此の會の諸の善事、本より未だ曾て爲す、一切の法も亦然り、悉く前に等し、所以に正に作の時無作なり、作者なきを以ての故に、爲す時に當つて、爲す。自性なきを以ての故に、任從、萬法縱横、常に無生の際に等し。乃ち知る磁石は、決して鐵を吸はざることを。無明諸行を緣せず。」と。龐公臨終の偈に曰く、「空花落影。陽燄翻波。」永明和尚、其の言を嘆味して曰く、「此れ有無の見到に墮せず、妙に無生の旨を得たり、學者深く之を觀すべし。」と。

- ① 明教、契嵩、正宗記を作る。
- ② 任從、さうあらうとままよ。
- ③ 龐公、龐居士、馬祖に嗣ぐ、唐の人。
- ④ 大智度論、龍樹の造るところ百卷あり。

大智度論に曰く、「復次に人あり、地を堅牢と爲し、心を形質なしと謂ふ、皆是れ虛妄なり。是を以ての故に、佛心力を大と爲すと説きたまふ。般若波羅蜜を行するが故に、此大地を散じて、以て微塵と爲すと。地は色香味觸の重き故に、自ら所作なし。水は香を少くが故に、動作地に勝つ。火は香味を少くが故に、勢ひ水に勝つ。風は色香味を少くが故に、動作火に勝つ。心は四事なきが故に、爲す

所の力大なり。又心に煩惱^①結使の繫縛多きを以ての故に心力をして、有漏の善心を少がしむ。煩惱なしと雖も、心諸法の相を取するを以ての故に、其力亦少し。二乗無漏の心、相を取せずと雖も、智慧量あるを以て、無漏の道を出づる時に及んで、六情俗に隨ひ、分別して諸法の相を取す、故に心力を盡さず。諸佛及大菩薩は、智慧無量無邊にして常に禪定に處し、世間の涅槃に於て、分別する所なし。諸法は實相、其れ實に異ならず、但智に優劣あり。般若波羅蜜を行ずるもの、究竟清淨にして、罣礙する所なし。一念中能く十方一切の恒河沙等の如き、三千大千國土の大地、諸山微塵を散す。故に知る其心に、此大力ある衆生は、妄に隔てられ自ら覺知せず。我願はくば、此の法を聞く者、禪定に隨順して、而も自ら修行して、覺體本來清淨なりと稱せしむ。此れ興役功用の難に非ず、^②第之を心に約する耳。今、家山十方に徧く、衣食老を終ふべく、人生憂ふべきもの、皆已に免離す。此に於て、以て意を爲さざるは、則ち佛祖の恩徳を背負するに非ずや。

景福の順禪師は西蜀の人なり。遠識あり、人と爲り、^③勸業、叢林の後進、皆之を母徳とす。法を老黃龍に得たり。昔蜀を出づるとき、^④圓通訥と偕に行き、已にして又大覺璉と遊ぶこと甚だ久し。其の像に賛する者あり、曰く、「與訥偕行。與璉偕處。得法於南。爲南長子。」と、然も縁薄く

①結使。むすびつかはる、しばられる。
 ②無漏。煩惱なきを云ふ。
 ③勸業。つとめ、かしらの意。
 ④母徳。母の如くなづく。
 ⑤圓通居訥。洞山榮に嗣ぐ、智門祥の孫、雲門四世。
 ⑥大覺璉。育王に住す、勸業澄に嗣ぐ、雲門五世。
 ⑦利。寺といふこと、梵利のる。

居る所、皆遠方の小刹なり。學者其の門に過ぎて、能く識るなし、師亦超然として自ら樂しむ。世境を視ること、飛埃の目を過ぐるが如し。壽八十餘、香城山に坐脱す。顏貌生けるが如し。平生潘延之と善し、將に終らんとす、人をして延之を要せしむ、別れを叙ぶ、延之至りて師去る。其の衆に示すに、多く偈を爲る、皆徳言なり。偈あり、曰く、「夏日人人把扇搖。冬來以炭滿爐燒。若能於此全曉。塵劫無明當下消。」又趙州勸婆の偈を作つて曰く、「趙州問路婆子。答云直與麼去。皆云勸婆老婆。婆子無備雪處。」と、同道のもの相共に擧す。又黃龍三關の頌を作つて曰く、「長江雲散水滔々。忽爾狂風浪便高。不識漁家玄妙意。偏於波浪裏。」又曰く、「南海波斯入大唐。有二人別寶便商量。或時遇賤或時貴。日到西峰一影漸長。」又曰く、「黃龍老和尚。有二箇生緣語。一山僧承嗣伊。今爲君擧。爲君擧貓兒。偏解捉老鼠。」と。
 朱顯謨世英、昔南昌に官として、雲庵を識る。未だ幾くならず、移りて江東に漕たり。書を以て來つて佛法の大意を問ふ。雲庵之に答へて曰く、「書を辱うす、佛法を以て問を爲す。佛法の至妙無二、但だ妙に至らず、則ち手に長短あり。苟し妙に至らば、則ち心を悟るの人、實の如く自心を知る。究竟本來成佛す、如實自在、如實安樂、如實解脫、如實清淨、而も日用に唯だ自心を用ひよ、自心の變化、把得して便ち用ひよ、是非を問ふこと莫れ。心を擬して思量す已に不是なり、心を擬せず、一一天眞、一一明妙、一一蓮華の水に著かざるが如し。」

①顯。音せん、なみのうごき聲。
 ②承嗣。法をうけつぐ。

所以に自心に迷ふ、故に衆生と作る、自心を悟る、故に成佛す。衆生即ち佛、佛即ち衆生、迷悟に由るが故に、彼此あり。如今の學者、多く自心を信せず、自心を悟らず、自心の明妙受用を得ず、自心の安樂解脱を得ず、心外に妄りに禪道あり、妄りに奇特を立つ、妄りに取捨を生ず。縦ひ修行するも、外道二乗の禪寂斷見の境界に落つ。」と云庵の言、蓋し一時の弊を救ふ。然かも其の旨要、曉然として以て、人の味味を發くべし。故に私に之を識す。

大本禪師、詔を被りて、大相國寺慧林禪院に住す。引對を將つて、有司儀を習はしめ、日を累ぬ。神宗皇帝、便殿に御して之を見る。師既に見えて但だ山呼す。即ち起りて殿に登り、坐を賜ふ、即ち榻に就いて、足を槃し、跏趺を作す。侍衛驚き相顧る。師自如たり、茶を賜ふ、盞を舉げて長吸し、又之を蕩撼するに至る。上、問ふ、受業何の寺ぞ。對へて曰く、「承天の永安。」蓋し蘇州の承天寺の永安院のみ。上大いに喜び語論甚だ久し、既に辭退す。之を目送して左右に謂ふて曰く、「眞の福僧なり。」侍者問ふ。「和尚官家に見ゆと如何。」對へて曰く、「喫茶相問ふ耳。」其の天資粹美にして、辭を吐く簡徑なり、眞に超然たること仰ぐべし。

- ① 味味。くらきこと、愚を云ふ。
- ② 引對。天子に拜謁せしむる禮儀。
- ③ 槃。槃盞など云ふて、兩足を前へ出し、箕の如く坐る、俗に、いたびらかくのふみ。
- ④ 跏趺。坐禪のかたち。
- ⑤ 蕩撼。茶碗をゆすりうごかす。
- ⑥ 受業。僧の師匠どりするを云ふ。
- ⑦ 簡徑。簡徑。
- ⑧ 蘇州尅符。臨濟に嗣ぐ、紙衣道者といふ。

① 涿州尅符道者、臨濟に見ゆ、機辨逸格なり。宗門に四料簡あり、佛祖の旨要を定むるを以て、偈を作りて之を發明して曰く、「奪人不奪境。緣自帶諸訛。擬三欲求三玄旨。思量反責慶。驪珠光粲爛。蟾桂影婆娑。觀體無三差。手。還。應。滯。二。網。羅。」奪境不奪人。尋言何處眞。問禪禪是妄。究理理非親。日照寒光淡。山遙翠色新。直饒玄會得。也是眼中塵。人境兩俱奪。從來正令行。不論佛與祖。那說聖凡情。擬犯吹毛劍。還如值木盲。進前求三妙會。特地斬三精靈。人境俱不奪。思量意不偏。主實言不異。問答理俱全。踏三被澄潭。月一穿三開碧落。天不能明三妙用。淪溺在二無緣。」と。洞山悟本禪師、五位君臣を作りて綱要を標準し、又自ら偈を作りて、其の下に系く。曰く、「正中偏。三更初夜月明前。莫怪相逢不認相。識一隱。猶懷二昔。日嫌二。偏中正。失曉老婆逢二古鏡。分明觀面更無他。休更迷頭猶認二影。」正中來。無中有路出塵埃。但能莫觸二當今諱。也勝二前朝。斷舌才。偏中至。兩刃交鋒。不須避。好手還同二火裏蓮。宛然自有二衝天氣。兼中到。不落二有無。誰敢和。人人盡欲。出二常流。折合還歸二炭裏。坐。臨濟洞上の二宗相須つて、大法を發揮す。是の偈語、世俗傳寫して、多く之を更易し、以て其の私に徇へて、先徳の意を失ふ。子竊かに之を惜む。今古本を此に録して、諸傳の悞を正す。

- ① 牙。互の俗字。
- ② 踏破。たつばとよむべし。
- ③ 斷舌才。前に出づ。
- ④ 先徳。臨濟、洞山の二大師を指す。

● 報本の元禪師は孤硬にして風度甚だ高く、威儀端重にして危坐終日。南禪師の門弟子、能く其の行藏を蹤迹するもの、唯だ師のみ。師初め開法、嗣書至る、南公其の名を視て曰く、「吾れ此の僧を忘る。』專使に謂ふて曰く、「書未だ開くことを欲せず、親しく來つて、老僧に見えしむべし。」と、專使命を反す、師即日包腰して來り、豫章に至る。南公化し去ると聞き、因つて留つて嘆息す。適々晦堂老人、城を出でて相會し、與に語つて之を奇とす。恨むらくは老師見ゆるに及ばざること。師の道、東吳を化す、人之に歸する者雲の如し。嘗て自ら乞食して、舟に載せて還る。夜盜あり、舟人絶叫して白刃前に交錯す、師、安坐自若、徐に曰ふ、「有る所、盡く以て奉施す、人の命は害ふべからず。」と、盜既に去る、旦に達し、人來りて舟を視て、師死すと意ふ、而も貌和かに神凝ること它日の如し。其の生死禍福に臨むに、能く脱然として、累ひなきこと此くの如し。

延慶洪準禪師は桂林の人、南禪師に従つて、遊ぶこと年あり、天資至純にして、未だ嘗て物に忤はず、人の善を聞いて、己より出づるが如し、喜々津々として眉宇の間に生ず。人の惡を聞いて、必ず合掌して空を叩いて追悔する者の如し、見るもの之を笑はざること莫し、其の眞誠此くの如し。終始一如、暮年に院事を領せず、迹を寒溪寺に寓す。壽已に八十を逾え、平生日夕に、他の營爲なし。眠食の餘、唯だ梵音を吟じ、觀世音を贊するのみ。臨終の時門人弟子、皆檀越の飯に赴く、唯だ一の僕夫のみ在り、師、

● 報本惠元。黃龍南に嗣ぐ、報本は湖州に在る寺。
● 梵音。經文。

磬を携へて、● 土地の祠前に坐し、孔雀經を誦むこと、一徧して別を告ぐ。即ち安坐して瞑目す。三日傾かず、郷民來り觀る者堵立す。師忽ちに目を開き見て、笑つて地に坐せしむ。頃らくありて、門弟子還る、師呼んで其の右に立つて、手を握るに、炊熟の久しきが如く、寂然たり。之を視て去る、神色變せず、頰紅にして生けるが如し。道俗其の像を塑し、之を龕す。予嘗て其の席を過ぎて拜瞻す。其の平生、潛行密用多くして、妄りに世に知らるるを求めざるを嘆す。死生の際に至りて、乃ち能く超然たることは是くの如し。眞の大丈夫なり、八地の菩薩、● 無生法忍を證し、一切の法を觀すること、虚空の性の如し。猶ほ是れ漸くに無心を證す。十地の中に至つて、尙ほ二愚あり、等覺に入り已つて、則ち一分の無明、未だ盡す、猶ほ微煙の如し。尙ほ能く懺悔す。準の梵讚其れ亦自治する者歟。

● 土地の祠。寺院守護の神を祀る所。
● 無生法忍。拔苦與樂の修行。
● 毫。細毛。
● 行住坐臥。是を四威儀。といふ。

南禪師、積翠に居る時、一夕燕坐す、光屋廬に屬す、侍者に誡め、外に言ふこと勿らしむ。嵩明教既に化して、之を火浴す。頂骨眼睛齒舌耳毫、男根、數珠、皆壞せず。世尊の言ふ如く、比丘生身壞せず、無垢の智光を發することは、善根功德の力、如來知見の力なり。故に行住坐臥、須らく内外清淨なるべし。彼の二大老は乃ち今耳目の接する所にして異世に非ず、而も獨り爾り、殊勝なることは、平生踐履の明驗に非ず歟。予嘗て二偈を作りて曰く、「如來功德力。内外悉清淨。念起勿隨之。自然心無病。」形與二佛祖等。道致三人天護。戒淨福二人

予嘗て數僧と、雪峰の悦禪師の塔に謁し、拜起して之を拊つて曰く、「生耶死耶。久しうして自ら答へて曰く、「塔子を推倒し去るべからず。旁僧の曰く、「今日の時節、正に道吾の因縁に類す。」と因つて偈を作つて、之に示して曰く、「不知即問。不見即討。圓滿現前何須更道。維堅密身。生死病老。面前塔子。不可推倒。」

南安嵩の儼和尚、世に定光佛の應身と傳ふ。異迹甚だ多く、亦た自傳あり。然るに傳に、其の得法の師の名字を載せず、但た西峰と曰ふのみ。

西峰は、廬陵の眞廟に在る時、雲谿禪師といふものあり、奉先の深公の高弟なり。深は雲門に見ゆ、當時の龍象、其の右に出づる者あることなし、獨り清涼の明禪師、之と名を齊しうす、之を深明の二上座と謂ふ。儼和尚、多く偈を以て人に示す、偈の尾に必ず四字を題して曰く、「贈以之中」と。世に能く測ることなし。臨終に衆に謂ふて曰く、「汝等當に知るべし、妙性廓然として、本と生滅なし、去來あることを示す、更に何事をか疑ふ、吾れ此の日生す、今正に其の時なり。」と、乃ち右脇にして臥す。予曰く、「其の入滅に方りて、乃ち曰く、吾れ此の日生す、今正に其の時なり。」

予嘗て東吳に遊び、西湖の淨慈寺に寓る。寺の寢堂の東西の廡に、兩閣を建つ、甚だ崇麗なり。

- ① 塔子。雪峰の石塔を指す。
- ② 奉先。道深。上に出づ。
- ③ 清涼。智明。雲門に嗣ぐ。
- ④ 淨慈。支那禪宗五山の第四位にして杭州臨安府にあり。
- ⑤ 廡。廡廊と熟語しろふかなり。
- ⑥ 永明。智覺延壽、天台の徳祖に嗣ぐ、清涼三世。
- ⑦ 冰炭。氷と炭とは性質は反対なれども、ちやんばんしての意、君子と小人にたとへる。

寺に老耄あり、予が爲に言ふ、「永明和尚、賢首慈恩天台の三宗、手に相氷炭して、大全に達せず、故に其の徒の法義に精しき者を兩閣に館せしむ。義海を博閱して、更に相質難す。和尚則ち心宗の衡準を以て、之を平ぐ。又大集經論六十部、西天此土賢聖の言、三百家を集め、唯心の旨を證成して、書一百卷を爲り、世に傳ふ。名づけて宗鏡録と曰ふ。其の法施に利ある、博大殊勝と謂ふべし。今天下の名山、之を有せずといふこと莫し。學者身を終はるまで、未だ嘗て卷を展べざる者あり、唯だ飽まで食ひ横に眠り、無根に游談するのみ。之を佛恩を報すると謂はんか、佛恩に負かん乎。」

同安察禪師、十玄談を作り、大いに正中妙挾の旨を宏む。其の言妙麗にして、叢林に照映す。然も歲月寢遠く、多く其の眞を失す。今傳燈に載する所、題目同じからず、獨り達觀の編する所の五家の宗派に之を叙ぶ、頗る詳かなり。予嘗て舊本を得、五家の宗派に載する所と少しく差ふ耳。

傳燈に師を系けて、九峰虔の嗣と爲す。達觀師を標して、雲居膺の子と爲す、省せず、達觀何くよりしてか、其の實を得る耶。然るに清涼の法眼、師の世を去ること遠からず、贊詞を作りて、其の叙ぶること、傳燈に載する所の如し。則ち五家の論、又疑ふべし。十玄の詞、其の次叙當に其の題目を視るべし。皆連聯して作す、前の五首は、其の旨要を示し、後の五首は之を履踐せしむ。然も八首

- ① 義海。經文の奥儀。
- ② 衡準。はかりものさし、御手本となること。
- ③ 宗鏡録。永明和尚の撰、百卷あり。
- ④ 同安。常察。九峰虔に嗣ぐ、同安は寺名、洪州にあり。
- ⑤ 達觀。百十四頁の脚注に出づ。
- ⑥ 九峰。道虔大覺、石霜廣諸に嗣ぐ、馬祖六世。
- ⑦ 法眼。文益。法眼宗の祖。

は皆兩字を題と爲す。意相貫くと雖も、詞句疊んで起復を爲す。初めに心印と曰ふ、偈の末に曰く、「無心猶隔一重關」故に又祖意を作す。偈の首に曰く、「真機爭墮二有無功」と、故に又真機を作す。偈の首に曰く、「豈與三塵機一作三繫留」と、故に又塵機を作す。偈の中に曰く、「三乘分別強安名」と、故に又三乘の次第を作す耳。此れ乃ち其示す所の旨要なり。其六に至つて則ち反本と曰ふ。偈の末に曰く、「還鄉曲調如何偈」と、故に又還郷の偈を作す。其末に曰く、「更無一物獻三尊堂」是爲正位。坐却則非三妙挾」と、故に又回機を作す。機妙なれば、則ち宗を失す。尙ほ知見を存す。是れを大病と謂ふ。故に又轉位を作す。轉位は則ち所謂異類中行なり、異類は全く偏なり。却りて須からく正に歸して、血脈をして斷せざらしむべし。故に又一色過後を作す。此れ乃ち之をして履踐せしむるの意なり。五家の宗派、亦一色過後と云ふ、但だ塵異を塵中に異ありと爲すのみ。

南禪師、風度凝遠なり、人其の量を涯ること莫し。故に其の門下の客、多く光明偉傑にして、名叢林に重く、身を終るまで、未だ嘗て其の破顔を見ざる者あり。予聞く、義に厚き者は、仁に薄しと、師の道なり。師は尊んで親しからず、仁に厚き者は義に薄しと、親の道なり。親は親しうして尊まず、南公の意、豈是れを以てせずや。醉里に狂僧あり、戒道者と號す、聚落に依止して、日として酔はずといふことなし。然るに詞を吐くこと性奇なり、世能く之を凡聖すること莫し。飲しむるに酒を以てする者あれば、自ら祭文を爲り、

①凝遠、いたぐるしきことか。
②涯、かざる。

戒、聲に應じて曰く、「惟れ靈生れて、閻浮に在り、曠らず妬ます、愛して酒子を喫す。街に倒れ路に臥し、直に兜率陀天に生ずることを得ん」と、爾の時に酒を喫せず、故は何を以ての故に、淨土の中には、酒を沾ふことを得ること無ければなり。金剛般若經は、無住を以て宗と爲す、無住を以て宗と爲すは、則ち宜しく、其の所談皆、相を蕩し有を破し、纖塵も立せざるべし。而るを經に、福勝の者を賛け、之を半ばにす。持戒修福の者は、有爲の事のみにして、世尊の能く此の經に於て、信心を生ずる者は、必ず此の人と答ふる者は何ぞや。

③閻浮、娑婆なるこの土。
④兜率天、彌勒菩薩の淨土にして、三十三天にあり。
⑤首楞嚴、唐の般羅密帝の譯十卷。
⑥肆、集の義、義の博く深きな

王文公、相を罷めて老鐘山に歸り、衲子を見れば必ず其の道學を探り、尤も首楞嚴に通ず。自ら其の義を疏す、其の文簡にして肆なり。諸師の詳なるを略して、諸師の略を詳かにす。識妙なる者に非ずんば、能く窺ふこと莫し。毎に曰ふ、「今凡そ此の經を看る者、其示す所の本覺妙明、性覺明妙を見、根身器界の生起、我が心を出ですといふことを知る。竊かに自ら疑ふ、今鐘山の山川一都會耳、而も其の中に遊ぶ、無慮千人、豈千人の内心、一外境を共にする有らんや。借如千人の中に一人忽ちに死すとも、則ち此の山川、何ぞ常に隨つて滅せん、人去り境留むといふは、則ち經に、山河大地、生起の理を言ふ、然らすんば、何を以てか、會通して佛の本意に稱ふ耶」と。

國譯石門洪覺範林間錄下 終

國譯新編林間後錄

釋迦出山畫像贊

秦越人の醫に於ける、望み見て生死を知り、老潘の墨に於ける、摸索して精粗を知る、蓋し其の不傳の妙なり。語黙を寄するに地なし。歐陽文忠公が曰く、「小字遺教經は、書するもの、名を著はさすと雖も、然も義之に非ずんば能く作ること莫けん」と、予、錢樂道の家に蓄ふる所の釋迦文佛の出山の像を閲するに、名を主とせずと雖も、然も道子に非ずんば作ること能はず。其の筆意の著はるるを以てなり。樂道、人品甚だ高し、鐵書血食の後、其の忱信痛敬の致す所、像の寄寓決して、苟然に非ず。拜手稽首して、之が贊を爲りて曰く、

徧大海味具於一滴。蓋法界身足於纖埃。一行思則燈王之坐。不能入。毘耶之室。斂念則彌勒之門。彈指即開。唯我鼻祖釋迦和尚。初出雪山。一即示此像。以千百億微塵數身。九十七大人之相。頓入筆端。二味而

國譯新編林間後錄

①釋迦出山。釋尊が雪山に於て六年端坐の曉、成道せられ、山を出て給ふ際、この像は遺教經の上に贊のかはりに書きしものなり。
②老潘。筆墨の巧者也。
③歐陽文忠公。歐陽修、宋の名臣。
④遺教經。釋尊入涅槃のとき説き給ふところ。
⑤義之。今義に作るはいかひにや、晉の王右軍のとならん。
⑥釋迦文佛。文の字は牟尼のなまりより出でし字。

幻ニ此幅紙之上。垂手跣足頂螺額絲超然靜深
出ニ三界癡。如三浩蕩春寄ニ于織枝。如三清
涼月印ニ于盆池。鏤冰琢雪。我作ニ贊詞。
關空鏤夢。夫子其牢著レ之。

小字 金剛經贊

僧子瓊、毫を束ねて織筆と爲す、其の銳きこ
と菱芒の如し。紙に臨み肘を運し、快きこと風
雨に等し。金剛般若經を寸を兼ねる環輪の中
に在るが如し。即いて之を視るに、其の行布、
人の髪を梳つて煙鬢と作すが如し。思力の精
微なるに非ざるよりは、何を以てか此に臻らん。
之が贊を爲りて曰く、

昔有ニ佛子ニ根猛利。能觀ニ空性即是色。
欲ニ顯空色不思議。仰レ空書ニ此金剛句。至レ今

- ① 道子。吳道玄、唐の名畫家。
- ② 鐵書。志操堅固に書きしにたとへる。
- ③ 血食。神さまをまつるには毛や血のある牲を用ひる、これにたとへてけつさいのことに用ふるなり。
- ④ 恍惚。恍惚に同じで、まことなり。
- ⑤ 寄寓。やどるで、像をかきししん意。
- ⑥ 荷然。かりそめにあらず、おろそかではない。
- ⑦ 纖埃。こまかきちり。
- ⑧ 燈王。燃燈佛。
- ⑨ 毘耶。維摩居士。
- ⑩ 彌勒。五十六億七千萬年の遠きを云ふ。
- ⑪ 彈指。つまはじきの間。
- ⑫ 千百億。應身の化身なり。
- ⑬ 九十七大人之相。三十二相八十種好の如來の相好。
- ⑭ 垂手。垂手跣足は手をたれてはだしなり、以下出山の形容をつらねる。
- ⑮ 浩蕩春。佛心を形容せる也。
- ⑯ 清涼月。菩薩心を形容す。
- ⑰ 鏤冰琢雪。釋尊の苦行にたとへる。
- ⑱ 關空鏤夢。奇哉、一切衆生、悉有ニ佛性、草木國土、悉皆成佛の意歟。
- ⑲ 金剛般若波羅蜜經。一卷。鳩摩羅什の譯するところ、大般若若ては五百七十七卷目、能斷金剛分と云ふ。
- ⑳ 團團。まんまるとしたかたに書きたるを形容す。
- ㉑ 鬢。もとほり。
- ㉒ 精特。精進妙に同じ。
- ㉓ 纖管。ほそき筆、細書のこと。
- ㉔ 大如椽。たるきの大きほどあるふで、大文詞の才をほめて云ふ。
- ㉕ 九軌道。きはめてひくきところ。

風雨被ニ原野。諸樵木者集ニ其下。
乃知肉眼不能見。譬如水中有二鹽
味。唯道人瓊思。精特能觀ニ色性即
是空。視ニ此緣管。大如椽揮レ翰
如レ行ニ九軌道。故於ニ兼寸環輪中。
備ニ足。廣大言說身。世人可レ見不レ可レ讀。譬
如三嬰兒視ニ崖蜜。我於ニ此經能證ニ入初
中後善。三法門。忽然落レ筆。如
レ建レ甌。不復現行生。倒想。猶下色空觀
入ニ諸境。奏ニ刀肯紫。無。全牛。盡
持ニ此法。施ニ羣生。甚微細。智願
同證。

六世祖師贊并序

予、海上に竄せられ、三年にして還つて筠の
石門寺に舍す。叢林の荒寒を悲み、祖宗

- ① 廣大言說身。金剛經の功德をそなへる。
- ② 崖蜜。仰すらうめの異名、又は峻崖にあるはちみつ。
- ③ 三法門。初善、中善、後善の三法門。
- ④ 建甌。がめの水なくつがへす、下に向ふ勢のつよきを云ふ。
- ⑤ 倒想。倒懸の苦の思を生ずるなし。
- ⑥ 奏刀。奏は奉るなり、刀を振り上げるの意。
- ⑦ 全牛。牛刀割雞のるゐにて、大事を處理するに智力を以て容易にするを云ふ。
- ⑧ 羣生。一切衆生。
- ⑨ 智願。般若は智慧と譯するを以て、甚深の大智慧をともしにたとへんと云ふこと。
- ⑩ 六世祖師。六祖慧能大師。
- ⑪ 叢林。諸方の禪宗寺の風儀。
- ⑫ 寒。衰へてのさびし。
- ⑬ 祖宗。祖師達磨の宗旨。
- ⑭ 標致。趣旨をあらはし示すなり。
- ⑮ 器界。器世界の略。
- ⑯ 吟和。言語の舌の廻らぬと。
- ⑰ 頂峯。少林寺のあるところの巖耳をさす。
- ⑱ 神光。二祖可大師の名。
- ⑲ 上乘。佛法の最上乘。
- ⑳ 臂中斫臂。二祖安心の記事。
- ㉑ 豎毛呵手。寒毛卓豎し、手足のおきどころもない。
- ㉒ 六道。人間、天上、地獄、餓鬼、畜生、修羅等の六道。
- ㉓ 赤頭顱。三祖僧璨大師なり、姓氏を云はず。
- ㉔ 破頭峰。五祖弘忍大師の居る山。
- ㉕ 龍象。龍象。宗旨源達の雲稱が澤山居るとの意。
- ㉖ 衣付小兒。傳法衣は。

の標致を念じて、自ら涕の流るゝことを知らず。六祖師の畫像の贊を作つて以て照默禪師に寄せて、以て其の志を見はすと云ふ。

安想無性。證不滅受。前聖所知。轉相授手。風烟花開。器界以形。霜露果熟。王子乃生。護持佛乘。指示心體。但遮其非。不言其是。嬰兒索物。意正語偏。哆和之中。語意俱捐。

頂峰朝露。神光夜升。堪任單傳。擔荷上乘。自尋其心。不見歸宿。如下視環輪。求其斷續。用獄除間。履瘦知肥。娑坊酒肆。盡其塵機。雪中斫臂。願續佛壽。兒孫今聞。整毛呵手。

六道暗昏。不碍明深。毫釐弗差。證甘露滅。但赤頭顱。特諱姓氏。翩然往來。被褐懷寶。精一其身。身名俱捨。後世丘墳。猶無知者。破頭峯下。龍象雜還。衣付小兒。道傳懶衲。乃爾相逢。求人爲法。天書至門。堅臥不答。念諸衆生。捕風捉影。十地治之。由未蘇醒。師微笑曰。何必眩。但勿強名。自然無病。

觀前後身。兩鏡一面。左右對之。三者頓現。今非昔是。增金以黃。昔非今是。勝沈無香。已絕死生。豈纏老少。全機現前。當明而妙。夜江佐舟。吾今汝渡。

句中之眼。如二水有乳。

是風幡動。眼目遮護。非風幡動。心則現露。是爲曹溪顯決要。

旨。勿流汝意。暫時斂念。妙寂了然。汝自受用。密非我邊。負石春糴。越獐逐兔。鏡中之空。欲尋無路。

棗栢大士畫像贊并序

易の深渺なること義を以て得べからず。故に象の象を立て、以て其の旨を盡す。心の精微言を以て傳ふべからず。故に事法を指して以て其の妙を示す。唯棗栢大士のみ深く此の三昧門に入る、謹んで拜手稽首して之が贊を爲りて曰く、

須眉如畫。頤而美。風神如秋氣奇偉。平生歸宿東北。塵勞動中寂而止。脩然跣足散衣行。智智用中不乖體。帝王家生得自在。壽量不書絕終始。虎受三使令。心境空。女爲二伴助。憎愛弃。冠巾傳心。即俗眞。方隅示法。即事理。只將棗栢。薦齋鉢。我來二閻浮。非着味。自然光明。生齒牙。我談詞章。皆實義。佛子授汝。以顯決。一言便足超十地。隨順無明一起。諸有若

道傳懶衲。道法は懶衲の惠能といふ米つき坊主に傳へられた。天書至門。天子さまが御召の給旨がありても。眩。めぐらむ。觀前後身。六祖前世の身と現在身との意也。是風幡。是れ仁者が心動く、幡のうごくのではない、この話、曹溪の要旨なり。密。この話は明上座が太虚藏で密語密意の外になんぞ佛法のあるあるかと、自己の面目を返照せば密は却つて汝が邊に在りとささとされた。負石。六祖が修行中米つきばつたをなされたが、遂に傳法はこの行者に歸した。越獐。獐はおほしかや。とは昔に傳法していつた程に。棗栢大士。傳大士のことなり。

不^レ隨順^一諸有離。聖賢^一醉生^一凡乳^一中。只由^三觀照^二戒定慧^一。是謂^二大士^一同體悲^一。令^三我頓入^二一切智^一。作^二大佛事^一。徧^二塵刹^一。華藏界中^一容^レ。頓^レ轡。以^レ空爲^レ座禮^二。十身^一。以^レ願爲^レ舌說^二此偈^一。如^三以^二花^一說^二無邊春^一。如^三以^二滴說^一大海味^一。稽首世間妙蓮華。常願清淨出^二泥滓^一。

百丈大智禪師眞贊并序

馬祖大寂禪師、已に化して海昏の石門に塔す。師其の傍に廬すること既に久し、衲子相尋で日に増す。是に於て山の淺を厭ふて乃ち馮水に沿ふて上つて、車輪峰の下に至り、希連^①惟政^②と火種刀耕して食す。遂に法席を成す。予崇寧四年の春、山中に至つて、遺像を瞻る。冰の如く枯れ、雪のごとく老いて、衣に勝へざるが若しと雖も、神峻氣逸にして未だ世を度らざるが如し。謹んで拜手稽首して之が贊を爲りて曰く、以^レ實問答。空可^二青黃^一。以^レ意求^レ道。神落^二陰陽^一。陰陽莫^レ測。脱^二略陰界^一。虛空莫^レ盡。因果不^レ味。我有^二大機^一。佛無^二密語^一。如^二獅子王^一。露地方^一。踞^レ稱^レ性文字。隨^レ身叢林。如^二以^一妙旨^一。發

和雅音。同^レ世之波。壽九十二。護持心宗。謚曰大智。

雲庵眞贊

雲庵は黃龍の門に出づ、臨濟九世の孫たり。種性殊勝にして契悟廣大なり。必要を指示して辯。曹溪の如く、教乘を決定して論。棗栢の如く、偈句を作爲して詞。志公の如く、履踐の明驗精しきこと永嘉の如し。雲庵を退居す、時に已に七十餘、幻滅都て盡き、慧光渾て圓なり、以て其の遺風餘烈を想見すべし。門人德洪、謹んで拜手稽首して、之が贊を爲りて曰く、於^二自住境^一。見^レ與^二見緣^一。如^二夢能所^一。如^二蜜中邊^一。唯具^二正眼^一。入^二此三昧^一。如^二妙蓮華^一。出^二緣生海^一。祖師活意。如來密機。成^二就衆生^一。如^二鷗鷺飛^一。使^二其自化^一。不由^レ他悟。秀^二出叢林^一。光^二于佛祖^一。越^二滅陝右^一。誕^二生江南^一。暗中五色。天下雪庵。

明極齋銘

太原王健伯強は名臣惠公の子なり、皇叔嘉王の婿、壯年に方つて則ち能く官を弃て道を學ぶ。首楞嚴を閲し、餘塵は尙ほ諸學、明極れば即ち如來」といふに至つて、嘆じて曰く、「此れ如來の訓なり、予が志な

- ① 須眉。ひげまゆ。
- ② 願。音キ。たけたかき。
- ③ 脩然。長けたかき。
- ④ 冠巾。俗人のままにて。
- ⑤ 俗眞。眞諦、俗諦。
- ⑥ 法。法界の略にて、法は無爲自然の大道也。
- ⑦ 事理。事法界、理法界互に圓融す、事は宇宙の現相、理は眞如の理で、事理不二なり。
- ⑧ 鷹鷲鉢。大齋會をやりて、大勢の僧衆を供養したとの意。
- ⑨ 十地。菩薩修行の階級。
- ⑩ 塵刹。俗世界、斯土等と同義。
- ⑪ 華藏界中。蓮華藏世界。
- ⑫ 頓轡。「たづなな」とむしとよむ。
- ⑬ 十身。華嚴には佛を十種の方面から觀察して、十種の名稱を附せり。
- ⑭ 百丈大智。
- ⑮ 馬祖。百丈の師。

- ① 希運。黃檗希運禪師。
- ② 惟政。百丈第二代。
- ③ 火種刀耕。山の木をきりやいでのをうゑてとるを云ふ。
- ④ 崇寧四年。宋哲宗の年號、日本の堀川天皇の長治二年。
- ⑤ 曹溪。のぞみみる。
- ⑥ 因果不味。百丈禪師、野狐の公案あり、不落不昧の話を參照すべし。
- ⑦ 叢林。叢林の清規を百丈和尚が始められたゆゑ。
- ⑧ 波。「あ」とよむ。
- ⑨ 雲庵。諱は克文、寶峯眞淨に住す、宋の禪宗名僧にして黃龍南に嗣ぐ、覺範の師なり。
- ⑩ 曹溪。六祖大師。
- ⑪ 棗栢。一四九頁脚注③を見よ。
- ⑫ 志公。梁の寶誌公。
- ⑬ 德洪。覺範の諱。
- ⑭ 鷗鷺飛。かぎりなく弘法するにたとふ。
- ⑮ 陝右。地名、師は陝府の閻鄉

り、願はくば明極を以て其齋に名づけん。と銘を予に乞ふ。銘して曰く、有而尋求。癡暗所。固。得而驚異。智濁之咎。濁澄暗微。自覺成就。如。人目精。一塵不受。開。瞶。瞽。生。明發寄根。敏。瞶。瞽。死。暗。不。能。昏。聖師真慈。開。此。妙。門。睥。睨。不。入。夫。豈。知。恩。枵。然。丈。室。中。置。匡。牀。經。行。宴。坐。晨。燈。夕。香。勿。使。下。邪。念。蔽。常。寂。光。

小字華嚴經偈并序

蜂房梁間に於て、漆液を以て其の蔕を固うす。鵲木杪に巢ふ、百日を累ねて而して後に成る。彼曾て何を知つてか經營の妙、積累の功、藝を習ふの神の若くなるや。蓋し其の靈明。靡徹不思議の力なり。飛搖の中に味略すと雖も、而も具足成就して毫末を差へず、況んや萬物に首出し、物に應じて而も能く言ふ者をや。昔梵僧あり、五天より來りて、晉の宮闕の崇麗を見て嘆じて曰く、「是れ。兜率の内院と何ぞ異ならん。但彼は道力の成す所なり、而も此れは直に業力のみ。予嘗て之を笑ふ、是れ安ぞ我が此の妙力太虚を出生し、寰宇を容受することを知らんや。曾て何の天上人間樓

- ① 鄭氏に出づ。
- ② 江南。地名。
- ③ 明極。楞嚴經の句にとる。
- ④ 王健伯。強は諱。
- ⑤ 惠公。王惠公。
- ⑥ 首楞嚴經。十卷あり。
- ⑦ 餘塵。もろもろの煩惱。
- ⑧ 固。限られたる區域、則ち範圍なり。
- ⑨ 人目精。人のひとみ。
- ⑩ 聖師真慈。佛様の御慈悲で。
- ⑪ 枵然。大いなること。文選に出づ。
- ⑫ 匡牀。れどこ。
- ⑬ 經行。僧家に「きんひん」とよむ、運動の意にてへめぐるなり、坐禪の中に退屈を慰するがために行ふ、或は經をよみてまはる。
- ⑭ 晨燈夕香。あさには佛に燈明をあげ、夕べには香を焚いて讚佛禮敬する。
- ⑮ 小字華嚴偈。小字は筆寫の意。

觀の云ふに足るならんや。道人栖公、世の迫隘を愍んで、其の所欲に就いて、大方廣佛華嚴經を、方冊の中に書す。其の輕妙一掌を以て置くべし。編を開けば、蠕蠕として行蟻の如し、熟視すれば、其の衡斜曲直重交反側、曲げて其妙を盡す。翅。壁窠の大書の如きのみ、觀るもの門に闇つ、未曾有なりと嘆す。子、是の無作の功を稱賛せんと欲して、普く大衆に告げて偈を説いて言く、

我聞尊者龍勝師。應供會入娑竭海。龍宮微塵妙章句。

目所一瞥。輒能誦。流於五天及震旦。爲熱惱中甘露門。維道人栖出其後。願力猛利思精特。能於方冊紙墨間。書此大經。十萬偈。誦於蝸舍巢庵中。了然如在龍宮一見。觀者種性有差別。愛慕皆生殊異想。要當誦三觀。一塵中。亦。有。無。邊。妙。經。卷。昔。有。智。人。破。此。塵。一。十。方。世。界。一。切。說。以。名。塵。故。非。斷。空。而。可。破。故。非。實。有。了。此。兩。字。妙。法。門。亦。攝。一。切。契。經。海。譬。如。下。因。臥。俄。頃。際。夢。中。所。歷。更。千。載。乃。知。一。念。圓。古。今。眞。實。際。中。法。如。是。一。塵。微。妙。不。可。測。

- ① 偈は律字して詠する也。
- ② 垢徹不思議力。華嚴の功徳にたとへていふ。
- ③ 兜率。兜率天の宮殿。
- ④ 方冊。書冊大さ一寸四方くらゐの中に。
- ⑤ 蠕蠕。うごめく、蟲の行くことなり、ありのはふやうなことを云ふ、こまかい文字の義。
- ⑥ 壁窠。「ハククラ」とよむ。大なる文字。
- ⑦ 龍勝。龍樹尊者。應供は無上の福田あり、故に人天より供養せらるべきの義、佛十號一なり。
- ⑧ 十萬偈。華嚴經はもと十萬偈なり。
- ⑨ 一塵中。これより以下は華嚴の功徳を讚歎す。
- ⑩ 契經。一切藏經卷。
- ⑪ 奚方册。是より以下はこの寫經を功力の廣大なりとほむるなり、香はとよばる、謀也。
- ⑫ 測。聞く、書を擲くなり、此

當知一一塵亦然。譬如天帝網明珠。珠體瑩然俱照徹。一珠具足諸網珠。一一珠中同徧入。我今以此金剛句。壞滅彼衆下劣想。使悟三塵中含此經。奚方冊中乃驚異。杏爾山君河樹神。各各當憶本願力。要當勇猛勤守護。勿令邪念輒蠹侵。毘藍風吹須彌盧。劫火焚燒大千界。爲攤此經一切處。使其涼曝各得所。我此現前佛子等。作此觀者名正觀。稽首十方調御師。刹刹塵塵爲作證。

慈氏菩薩梅檀像讚

金陵の華藏禪寺、慈氏菩薩の梅檀の像、相好の工天下に妙なり。而も神異靈感、未だ一二を以て數へ易からず。景徳寺の後殿に居く。王文公嘗て像の居を易ふるを求むること甚だ切なりと夢みる、既に覺めて之を忘れず、復た夢に前事を理る。公、夢中に固く之を留む。像則ち泣下る、起きて之を視る、眞に涙の處あり。因つて大いに驚異して即ち迎へて華藏の大殿に置く。俄かに景徳寺一夕にして燼す。嗚呼三災彌綸し大千滅壞す、像豈久しく人間世に留ることを得んや、痛く自ら彈免して、此の兒戲狹劣の相を爲さんや。是れ蓋し護法諸天像の靈瑞を以て之を佑すること則ち然り、菩薩の意に非ず、以て辨せざるべからず。稽首して之が贊を爲りて曰く、

- ① 經を一切處にひらく。
- ② 慈氏。彌勒菩薩。
- ③ 梅檀。香木。
- ④ 景徳寺。支那五山の二、杭州臨安府にあり。
- ⑤ 王文公。王陽文公、詩人也。
- ⑥ 大殿。佛殿。
- ⑦ 彈。音タ。ひろし、あつしなど云ふ訓あり、たれさがるの意。

何人寄逸想。游戲浮漚間。以如幻之力。刻此梅檀像。坐令衆妙相。秀發千光。中天冠束紺髮。銖衣絡華鬘。種種妙莊嚴。成此功德聚。當時億萬衆。感極則悲號。樓觀出談笑。秘護百寶積。如登觀史天。如集龍華會。嗟哉像教末。羽嘉成百鳥。棘生蒼菊林。龍神爲悲動。王臣寔外護。異夢非意思。願推明月輪。出此蓬勃煙。願回紫金山。安置清涼處。至今百福相。儼然臨天人。神力吁莫測。拜瞻涕洟瀾。我諦觀十方。寔無心外境。自然離依他。及與徧計執。即今目所見。非有亦非無。如像現鏡中。非鏡亦非面。願入此三昧。識心自然明。於十方國土。而作大佛事。稽首大悲尊。證我如是說。

第十五祖眞贊并序

迦那提婆尊者十五祖として、佛の心印を傳ふ。猶ほ衆生の其の言を信受すること能はざるを憂と爲して、乃ち自在天の像に訴へて曰く、「願はくは神、我に言をして虚りに設けざら使むることを賜へ」と。嗟乎、道の行ひ難きこと、獨り今のみに非ず。稽首して贊して曰く、石彪肉醉。木駒夜嘶。我此三昧。非識情知。應緣而現。不落三思。惟一。是故鉢水。以針投之。如仲尼詔。如子期琴。又如蕭何。而

- ① 銖衣。朱衣と同じき。
- ② 觀史天。兜率天。
- ③ 龍華會。龍華三會。
- ④ 羽嘉。喜はうるばしいの意。
- ⑤ 蓬勃。くちなしのはな。
- ⑥ 蓬勃煙。氣のさかんなること、白雲の蓬勃などといふに用ふること。
- ⑦ 洟瀾。洟はかなしんでなみだのながること。

識二淮陰。無言可寄。無跡可尋。粲然現前。傳之。以心。穴二像之目。我不謬神。指二樹之耳。我知其因。物我如故。所立皆真。隨其妙用。見我全身。稽首真慈。爲二僧中王。如二萬星。月一見者清涼。尙以二衆生。不信。爲傷。蓋盲者咎。非光掩藏一哉。

翠巖眞和尚眞贊

我方三。涇渭同流。一笑中軟頑滑頭。爲二君人境俱奪。鬧裏白拈。巧偷。如水洗水。相樓打樓。從來脫略無二窠臼。接二得南泉。嗣二趙州。

照默和尚眞贊

辯如三。玄沙有二邊幅韻。如三睦州。出二風骨。默而說珠。自照。八荒光明。寄二毛粟。獨立二南榮。山岳峻。臨濟欲傾。不二敢覆。笑橫。玉塵。氣如春。一堂嚴冷天魔哭。

空生贊并序

潭南の僧、慎修、吳中に遊び、此の畫を敗垣破壁の間に得たり。埃翳を

- ① 迦那提婆。龍樹尊者に嗣法す。
- ② 穴。うがつなり。
- ③ 見。あらはす。
- ④ 翠巖眞。慧明に嗣ぐ。
- ⑤ 涇渭。涇水は清、渭水は濁、區別の明かなるを定むるに用ふ。
- ⑥ 白拈。賊の白晝、公然となすの輩、ちば、すりのるぬ、たくみにぬすむ也。
- ⑦ 相樓打樓。簞の字が正しいといふことである、簞は目のあらいかごである、つまり言へば人のまねをして居ては、いつまでもちあかぬと云ふことに用ふ。
- ⑧ 照默。傳未詳。
- ⑨ 玄沙。師備禪師、睦州、名は陳。
- ⑩ 八荒。國の八方のはてなり。
- ⑪ 毛粟。ごく小さきことか。
- ⑫ 玉塵。ほつす、拂子。
- ⑬ 空生。須菩提、釋尊弟子の中

拂除すれば、神觀清深なり。維摩大士に従つて心解脱を得る時の如し。出して以て予に示す。之が贊を爲つて曰く、

以二空寂身。無所依住。而捉二杖藜。以二靈知心。不在二散攝。而玩二貝葉。不捨二聲色。而證二真空。與二我日用。能所心同。於一切處。寂入二法海。如二風行空。無有二妨碍。但脫二執。圓成普會。當三慎。以修。入二此三昧。

永明和尚畫像贊并序

永明の智覺禪師、悲願力に乗じて、生を震旦に示して佛心宗を傳へ、法の檀越と爲る。其の家に辯才と名づく、學者依つて以て聲を揚ぐ。議論言句浩きこと山海の如し。予其の間に漁獵すること二十年に餘る。其の妙處に至れば、輒ち能く之を識る。鵝王の乳を擇ぶに遺餘あることなきが如し。蓋し嘗て自ら鄙陋を忘れ、禪師の逸駕を追ひ之が伴侶と爲つて、以て十方國土に遊び、大佛事を作さんと欲す。尙ほ未だ晩からず。稽首して之が贊を爲りて曰く、
① 二界種性。有二萬妍醜。一生順死逆。夢夜想晝。往復無間。聲度二垣墉。皆依二末那。戲論成就。而末那體。無作無受。譬如二空花。實無而有。一念了知。光明通透。我如是

- ① の解空第一なり。
- ② 貝葉。經文といふこと、印度はばいたらの葉に書くを以てなり。
- ③ 二執。人我、又は煩惱愚痴。
- ④ 永明和尚。諱は延壽、天台祖國師に嗣ぐ、年二十八にして出家す、靈隱第一世なり、永明では二世、唐開寶八年十二月二十六示寂。
- ⑤ 二界。此界他界、唯識や三論などから立論するので。
- ⑥ 末那。此に意と譯す、意識なり。
- ⑦ 戲論。妄情則ち色等なり、戲論滅せず毫厘盡きざれば、則ち至道顯はれず。

見。無_レ有_二錯謬_一。是_レ爲_二心宗_一。祖佛授_レ手。孰振_二顏網_一。秀傑奇茂。稽首永明。月臨_二星斗_一。

永嘉和尚畫像贊

永嘉尊者初維摩經を閲して、必要を發明し宗旨を定めんと欲して、遂に曹溪に造つて祖師に印可せられ一宿して去る。世咸く一宿覺を以て之に名づく。予其の歌詞を讀み、其の履踐を究むるに、尺圍の鑰合するが如し。未だ嘗て卷を置いて長嘆せずんばあらず。公の人となりを想ふに、碩大光明、壁立萬仞、而して今の學者を視るに、寒酸鏤細、紛紛蠢蠢たり。宗教の興衰茲に於て知んぬべし。之が贊を爲りて曰く、
情根無_レ功。意識無_レ作。現量圓成。見聞知覺。如_三鏡受_レ燈。光無_二壞雜_一。烈火焚燒。河流湍逝。谷風怒號。大地依止。俱無_二知思_一。亦復如_レ是。此_レ涅槃門。如_二鼓塗_一。曹溪過_レ之。聞者僂仆。以_レ槌授_レ公。萬象驚縮。光明之語。衆如_二日星_一。精嚴之行。清如玉冰。唯不傳者。與_レ空相應。我初學道。如_レ握如_レ拳。晚乃覺_レ之。如_二手安_一。然_レ有時而用。搏_二取大千_一。

清涼大法眼禪師畫像贊并序

予_レ元符の初、臨川の承天寺に至る、寺基宏壯にして、萬指を集むべし。食堂愴然として殘僧三四輩のみ。舊碑を讀んで、大法眼禪師開法の_二故基_一たることを知る。影堂の壁間畫像存す、神宇靖深にして眉目淵然たり。英特の氣没せず、豈大法を荷負し、四生を提挈する者、其の表、故とはくの如くなるをや。稽首して之が贊を爲りて曰く、
非_二風幡_一動。非_二風鈴_一語。見聞起滅。了無_二處所_一。何以_レ明_レ之。俱寂_レ靜。故_レ此_レ光明藏、平等顯露。由_二本無_一明。愛欲怪妬。如_二隔_一日。瘡_レ痛自遮護。有_二能_一了者。即_二同_一本悟。索爾隨_レ緣。閑居靜住。一切仍_レ舊。自無_二染汚_一。爲_レ物作_レ則。險崖之句。不_レ可_二犯干_一。如_二大火聚_一。

雲門禪師畫像贊并序

富鄭公が家に蓄ふる所の雲門禪師の像、僧原靜、其の本を移寫して、蔣山に藏す。大觀三年六月に、予拜觀することを獲たり。稽首して之が贊を爲りて曰く、
見流滔_レ天。公_レ峙如_レ山。壁立萬仞。捍_二其狂瀾_一。可_二望而却_一。不_レ可_二

①永嘉。眞覺禪師、諱は玄覺。曹溪に祖を訪れ、法を問ひ、後、温州に回る。證道歌を作り學者に示す。先天二年十月十七日亡す、無相大師と諡し、淨光と塔銘す。
②曹溪。六祖惠能大師の居る所。
③一宿覺。玄覺といひしを以てなり。
④尺圍鑰合。物指(尺)鑰(圍)のよく合して違はざること。
⑤碩大。おほいなる。
⑥寒酸。一味の寒酸など云ふ語あり、一生のなりゆき。
⑦鏤細。くさりのほそき。
⑧紛紛。みだることなり。
⑨蠢蠢。うごつく。
⑩湍逝。急流なり。
⑪怒號。いかりさけぶ。
⑫依止。たよる。
⑬涅槃門。永嘉を指して稱ふ。

涅槃は宗旨の歸終にして悟の畢竟地也。
①清涼大法眼。文益といひ、希覺律師に従弟し、羅漢の環に嗣ぐ。清涼に住し、周の顯徳年中終る壽七十四、私に大法眼と諡す、その宗を法眼宗といふ。
②元符。宋の哲宗の年號、日本堀川天皇承徳康和の頃。
③萬指。指の數、萬なれば千人に當る。
④故基。ふるき遺跡。
⑤淵然。水の深靜にたとふるなり、ふかくしづかなること。
⑥提挈。たがひにたすけあふこと。
⑦光明藏。人々自己の光明藏なり、神通光明にて因果異なく、凡聖源を同じうするを藏とするり。
⑧索爾。不安のこと、おそるるの體。
⑨不可犯干。おひすべからず、天真にして妙なるをいふ。

攬攀。犀顛虎眸。美髯鬚頰。雲詞電機。霹靂爲舌。邪宗墮傾。魔膽破裂。須臾清明。光風霽月。叢林驢騾。蹴踏龍象。不可係羈。逸氣邁往。我不得濟。大地是浪。忽然現前。清機歷掌。

玄沙備禪師畫像贊

根門有功。則是心外見法。用處換機。則是問時有答。問答交馳。摸索大道。心法對峙。破二碎真。異哉此老。超出兩途。亡僧面前。波全露水。猛虎鬚眸。光自照珠。衲僧不解。如二井觀。

梅檀大悲贊

予四十二臂の觀世音菩薩の像を蓄ふ。目精を護するが如く、毎に戴いて以て行道す。今以て其の友、李天輔に授く。之が贊を爲りて曰く、

汝意有言。枯朽作鬼。我心不生。觸體卽水。乃知妄覺。一法成一。湛然圓明。百千一耳。稽首大士。應物而形。隨其大小。如二谷答聲。千臂執持。千目觀照。以二無心。故受用俱妙。譬如青春。藏於花身。因其枝葉。疎密精神。唯此瑞相。四十二臂。不越二徑寸。莊嚴畢備。清淨寶目。或慈或威。如欲舉足。華輪承之。碧螺之間。有佛儼容。如下焦螟蟲。巢蚊睫中。隱于石間。顯出蚌蛤。以二無礙慈。不擇清濁。我觀二震旦。

- ①如大火聚。大火のあつまりじやほどこに、背觸ともに非也。
- ②雲門。匡真。
- ③富鄭公。此の傳、前に出づ。
- ④蔣山。太平興國禪寺、建康上元府にあり、十刹第一、開山は寶誌和尚。
- ⑤大觀三年。宋徽宗の年號、日本鳥羽天皇天仁二年。
- ⑥時。高き丘なり。
- ⑦行道。看經行道。
- ⑧妄覺。妄想迷覺にて、煩惱有爲の根本也。
- ⑨疎密。あらかと、こまやかなる。

種性猛利。由二聞慧一入二甘露滅地。願加被我。障盡心開。如二觀世音。無礙辯才。我説此偈。萬像合掌。何以無礙。敲空作響。

源禪師贊

十年積翠侍立。學二得眼。橫鼻直。平生氣壓叢林。問着左科背聽。一庵深藏。霹靂舌。從教萬像。自分説。百非四句無處踏。孤風照人衆星月。

明白菴銘并序

予、世縁深重に。夙習。羶糜にして、好んで古今の治亂是非成敗を論ず。交遊多く之を譏呵す。獨り陳臺中曰く、「道に於て初より相妨げず、之を山川の烟雲あり、草木の華滋あり、所謂秀媚精進なるに譬ふ。」と、予、心に其戲なるを知るも、然も之を爲すこと已ます。大觀元年の春、菴を臨川に結び、名づけて明白と曰ふ。痛く自ら治めんことを欲す。聲中之れを聞いて、偈を以て寄せらるゝに曰く、「庵中不着毗耶座。亦許二靈山問法人。便謂世間憎愛盡。擡眉出社有誰瞋。」是に於て隄岸輒ち決す。又復た袞袞として言多し。然も竟に此に坐して。罪を得て九死を出で、僅かに生ず。恨らくは識微を知らず、道習に勝へざることを。乃ち魂魄を收招し、初心を料理す。之が銘を爲りて曰く、

- ①源禪師。四明、定水の人、徑山愚に嗣ぐ。
- ②明白庵銘。洪覺範の庵室、臨川府にあり。
- ③夙習。前世からの業縁に。
- ④羶糜。塵ははなづらで、まとはれること。
- ⑤得罪。覺範流竄せられたことがある。

雷霆發聲。萬國春曉。聞者不言。心得意了。木落霜清。水歸沙在。忽然震驚。聞者駭。惟合二妙。日用。如二春雷霆。背覺塵勞。如二冬震驚。萬機俱罷。隨緣放曠。尚無了知。安有二倒想。永惟此恩。妍味其旨。一庵收身。以時臥起。語默不味。絲毫弗差。蒙雜而著。隨乎于嘉。

延福鐘銘并序

梁武帝、寶公の神力を假りて地獄の相を見て問ふ、「何を以てか之を救はん。」寶公の曰く、「衆生の定業は即ち滅すべからず、唯鐘聲を聞けば其の苦暫く息む耳。」武帝是に於て天下の佛廟に詔して、鐘を撃たしむ。其聲の舒徐するに當つて、以て苦を忤めんと欲するなり。宜豐の李某、弟の某と、延福院に大鐘を施して、母夫人某氏の壽祺を資延し、且つ夙障を雪がんことを願ふ。予施す所を知れりと以謂へり。晉の許遜、白日に仙し去る。天の詔書に曰く、「汝が先祖に事へざるの罪を赦す、藥を施し水を呪するの功を佳とす、夫れ藥を施し水を呪するは、人を苦より脱するものなり。」と。唐の崔祐甫、本とより貴くして且つ壽あり、情に任せて繁戮囚繫して釋さざるを以て、遂に壽せず囚繫然截す、人を苦に置くものなり。嗚呼、壽は固に象なし、人の苦を脱すれば則ち増す、人を苦に置けば則ち損す。鐘の功利、博大。昭著なるものなり。之を以て施を爲す。某の人、罪滅し壽延ぶると、理に固に然るものなり。之が銘を爲りて曰く、

衆生大夢營。黑業。玲瓏擊。撞與開。曉。功德之大。吾敢喋。願移慈母。離障。結。如二聲。度。垣。即。超越。孝哉。伯仲。但勇逸。依仗佛力。等痛切。如下取。寓物一執。卷。牒。願。壽。慈。母。春。在。朕。如三鐘。常。撞。無。盡。竭。政和甲午夏五月、誰爲之銘。甘露滅。

梅檀白衣觀世音像贊并序

筠州太平寺の泗州院の僧元鑑が蓄ふる所の觀世音菩薩の像、慈嚴妙麗にして靈異殊勝なり、上天竺に見る所の者の如し。問ふ、「何れよりしてか之を得たる。」鑑の曰く、「始め客あり舟に載せて至る、數家に傳ふるに家輒ち禍至る、滅亡するもの皆畏れて敢て迎へず、獨り吾れ迎へて之に事ふるに而も異なし。」予曰く、「昔廬山の文殊師利の像、背て寒溪に留らずして、遠公に隨つて東林に歸ることを喜び、金陵の彌勒の像、背て景德に留らずして夢に舒王に見えて、居を華藏に求む。今此の像、乃ち獨り鑑に寓する、是れ皆菩薩と大因緣あり、然らずんば聖心豈擇ぶところありて之を避就せんや。」之が贊を爲りて曰く、

- ① 昭著。明らかにはあらはれる。
- ② 伯仲。兄弟。
- ③ 寓。ことをよするなり、寓意などのるなり。
- ④ 卷牒。巻は書冊也、牒は度牒也。共に書類の意。
- ⑤ 朕。類の俗字なり、ほほ。
- ⑥ 甘露滅。覺範の齋號なり。
- ⑦ 遠公。惠遠法師。

我聞菩薩昔因地。所供養一佛名觀音。從聞思修而悟心。心精遺聞而得道。見聞覺知不可易。譬如西北與東南。而此乃曰聞可遺。令三人惘然墮疑惘。龍本無耳聞以神。蛇亦無耳聞以眼。牛無耳故聞以鼻。螺蟻無耳聞以身。六根手用乃如此。聞不可遺豈理哉。彼於異類味劣中。而亦精妙不間斷。况我自任慈忍力。無礙解脫獨不然。鼓鐘俱擊聲不同。知其不同是生滅。而二種聲不相參。即是同時寂滅法。稽首淨智功德聚。廣大莊嚴悲願海。惘我心明力不迨。時時種子發現行。如下人因酒而發狂。誠飲輒復逢。佳醴願滅顛倒癡。暗障願獲辯才智慧藏。游戲十方微塵刹。亦施無畏一利衆生。凡曰有心能聞者。同入圓通三昧海。

照默真贊一首

衲子無處摸索。畫師筆筆畫着。山僧醉眼難憑。付與衆人一彈駁。似則打煞靈源。不似燈子燒却。

觀音菩薩畫像贊并序

大觀四年之春二月戊子之夕。病比丘慧洪。業然として縲紲の中に臥す。夢に一處に至る。庭宇闐然たり。僧あり、導いて密室の中に入る。燭を擧げて壁間を視るに、鐘山の寶公菩薩の像あり、意に忻然として之を得ん

①聞思修。この三つは觀音の三昧なり。
②觀音。觀音は阿婆盧吉帝濕代羅といひ、觀自在、觀世音と譯す。補所の大士なり。
③業然。とらはれのみを云ふ、つなぐの意なり。
④闐然。しづかなること。

ことを欲す。而して像輒ち自ら手中に墮つ。復た展べて之を視れば、則ち化して十二面の觀音慈嚴の相と爲る、心に大に驚異す、遂に覺れば三鼓なり。三月甲辰、南州の德逢上人書を以て來訊し、且た曰く、「我れ衣鉢を以て僧を遣はして澗水に詣し、觀世音の像を畫く。其の莊嚴に至つては天下に妙なるの手なり。」慧洪前の事を追憶して、其の像を遣はすの日を問へば、乃ち其の夢を得るの夕なり。因つて自ら菩薩大悲等慈を以て、哀憐照臨是くの如く昭著なることを感嘆す、其れ何の恩何の徳か能く之を報せんや、唯、筆舌言辭を以て海の深きに喻へ、日の明かなるに誇らんのみ。謹んで稽首して之が贊を爲りて曰く、

①風卉。卉は草木の總名。
②寶陀落迦山。又は補陀落山、觀音の住し給ふ淨土。
③衆好生。衆生のこと。

稽首淨聖甘露門。無量聖身徧沙界。應諸衆生心所求。譬如春色花。萬卉一西方肅然憂愁地。故住寶陀落迦山。此方教體在音聞。故稱名者得解脫。一切衆生然心盛。癡暗不見不發心。故現鷹巢蚌蛤中。亦作畫師畫其像。菩薩豈有種種心。皆其悲願力如是。何人毫端寄逸想。幻出百福莊嚴身。屹然欲動千光集。譬如將回紫金山。湛然欲瞬衆好生。譬如欲拆青蓮華。蠻奴水王來獻誠。想見細雨天花一落。衆生五濁熱惱中。色欲愛見所熏蒸。忽然觀此寶月相。一切毛孔皆清涼。成此不思議功德。皆因上人心所獻。願我早熏知見香。願我恒被慈悲忍服。願

魔障山速崩裂。願大智慧常現前。心精遺聞證圓通。自然淨極光通達。我當定如觀世音。一切衆生願如我。

甘露滅齋銘并序

政和四年の春、予海外より還り衡岳を過ぎ、方廣の譽禪師に謁して、靈源閣の下に館す。因つて其の居を名づけて甘露滅と曰ふ。道人法太、其説を曉さんことを請ふ。予の曰く、三祖は北齊の天平二年、法を少林に得て皖公に隱る、身を終るまで姓氏を言はず。老安は隋の文帝、開皇七年、天下私度の僧尼を括つて驗勘す。安曰く「本と名なし、遂に嵩山に通る。二老名迹の累を厭ひ、其の道を精一にすること、蓋し此くの如し。予寔に之を慕ふ。乃ち之が銘を爲りて曰く、

吾聞甘露。食之長生。而寂滅法。乃有此名。寂滅而生。

谷神不死。唯佛老君。其意謂此。我本超放。憂患纏之。今知

脱矣。鬚髮伽梨。安通嵩山。榮逃潛霍。是故覺範。老子于

衡岳。山失孤峻。玉忘無瑕。當令舌本。吐青蓮華。

漁父六首

玉帶雲袍。重頂露。一生笑傲知何故。萬里廻來方旦暮。休疑慮大千。捨在毫端聚。不解三犁田。分畝步。却能對客鳴華。

- ① 三祖。僧瑗大師。
- ② 天平二年。日本の宣化天皇元年に當る。
- ③ 開皇七年。日本の崇峻天皇元年に當る。
- ④ 谷神不死。谷は養ふなり。老子經に出づる語。
- ⑤ 伽梨。袈裟の梵語なり、僧伽梨といふの略。
- ⑥ 榮。僧瑗大師。

鼓。忽共老安相耳語。還推去莫來。闌我毬門路。

野鶴神情雲格調。逼人氣韻霜天曉。松下殘經看未了。當斜照蒼煙

風撼流泉繞。閨閣珍奇徒照耀。光無滲漏一方靈妙。活計現成誰管紹。

孤峰表一聲月下聞。清嘯。

來往獨龍崗下路。杖頭落索閑家具。後事前觀如目視。非識語須

知一念無古今。長笑老簫多病苦。笑中與藥皆狼虎。蠟炬一枝

非囑付。聊戲汝熱來。脫却孃生袴。

講處天花隨玉塵。波心月在那能取。旁舍老師偷指注。廻頭

觀虛空特地能言語。歸對二學徒。重自訴。從前見解都欺汝。

隔岸有山橫暮雨。飄然去千巖萬壑無尋處。

畫餅充飢人笑汝。一菴歸掃南陽塢。擊竹作聲方惺悟。徐回顧本來面目無藏處。

却望瀉山敷坐具。老師頭角渾呈露。珍重此恩逾父母。須薦取一堂堂密密聲前句。

不怕石頭行路滑。歸來那受駒兒踏。言下百骸俱潑撒。無剩法靈然晝夜光通達。

古寺天寒還惡發。夜將木佛齋燒殺。炙背橫眠真快活。憨抹捷從教院主無鬚髮。

國譯新編林間後錄終

石門洪覺範林間錄序

臨川謝逸撰

洪覺範得自在三昧於雲庵老人故能游戲翰墨場中呻吟警效皆成文章每與林間勝士抵掌清談莫非尊宿之高行叢林之遺訓諸佛菩薩之微旨賢士大夫之餘論每得一事隨即錄之垂十年間得三百餘事從其游者本明上人外若簡率而內甚精敏燕坐之暇以其所錄析爲上下秩名之曰林間錄因其所錄有先後故不以古今爲詮次得於談笑而非出於勉強故其文優游平易而無艱難險阻之態人皆知明之有是錄也所至之地借觀者成市明懼字畫漫滅而傳寫失真於是刻之於板而俾余爲序以壽後世焉余謂斯文之作有補於宗教如儉歲之梁稷寒年之緡績豈待余序然後傳哉願託斯文以傳不朽此余所以欲默而不能也昔樂廣善清言而不長於筆請潘岳爲表先作二百語以述己之志岳取而次比之便成名筆時人咸云若廣不假岳之筆岳不假廣之旨無以成斯美也今覺範口之所談筆之所錄兼有二子之美何哉大抵文士有妙思者未必有美才有美才者未必有妙思惟體道之士見亡執謝定亂兩融心如明鏡遇物便了故縱口而談信筆而書無適而不真也然則覺範所以兼二子之美者得非體道而然耶余是以知士不可不知道也覺範名慧洪筠陽人今住臨川北景德禪寺蓋赴

顯謨閣待制朱公之請云大觀元年十一月一日序

石門洪覺範林間錄卷上

杭州興教小壽禪師初隨天台詔國師普請聞墮薪而悟作偈曰撲落非他物從橫不是塵山河及大地全露法王身國師頷之而已及開法衲子爭師會之御史中丞王公隨出鎮錢塘往候壽至湖上去騶從獨步登寢室壽方負暄毳衣自若忽見之問曰官人何姓王公曰隨姓王卽拜之壽推蒲團籍地而坐語笑終日而去門人見壽讓之曰彼王臣來奈何不爲禮此一衆所係非細事也壽唯唯佗日王公復至寺衆橫撞大鐘萬指出迎而壽前趨立于松下王公望見出與握其手曰何不如前日相見而遽爲此禮數耶壽顧左右且行且言曰中丞卽得柰知事曠何其天資粹美如此真本色住山人也

白雲端禪師有逸氣少游湘中時會禪師新自楊岐來居雲蓋一見心奇之與語每終夕會忽問曰上人落髮師爲誰對曰茶陵郁和尚會曰吾聞其過溪有省作偈甚奇能記之否端卽誦曰我有神珠一顆久被塵勞關鎖今朝塵盡光生照破山河萬朵會大笑而去端愕然左右視通夕不寐明日求入室咨詢其事時方歲旦會曰汝見昨日作夜狐者乎對曰見之會曰汝一籌不及渠端又大駭曰何謂也會曰渠愛人笑汝怕人笑端因大悟於言下

魏府老元華嚴示衆曰佛法在日用處在行住坐臥處喫茶契鉢處語言相問處所作所爲舉心動念又却不是也又曰時當缺減人壽少有登六七十者汝輩入我法中整頓手脚未穩早

是三四十年，須臾衰病至，衰病至則老至，老至則死至，前去幾何，尚復恣意，何不初中後夜純靜去，交潞公鎮北京，元公來謁別，潞公曰：法師老矣，復何往？對曰：入滅去，潞公笑謂其戲語，目送之歸，與子弟言，其道韻深穩，談笑有味，非常僧也，使人候之，果入滅矣，大驚嘆異久之，及闍維親往臨觀，以瑠璃餅置坐前，祝曰：佛法果靈，願舍利填吾瓶，言卒，煙自空而降，布入瓶中，烟滅舍利如所願，潞公自是竭誠內典，恨知之暮也。

棲賢譚禪師建陽人，嗣百丈常和尚，性高簡，律身精嚴，動不遺法度，暮年三終藏經，以坐閱爲未敬，則立誦行披之，黃龍南禪師初游方，少從之，累年，故其平生所爲多取法焉，嘗曰：棲賢和尚定從天人中來，叢林標表也，雪竇顯禪師嘗自淮山來依之，不合乃作師子峰詩而去曰：蹄地盤空勢未休，爪牙安肯混常流，天教生在千峰上，不得雲擎也出頭。

李肇國史補曰：崔趙公問徑山道人法欽，弟子出家得否？欽曰：出家是大丈夫事，非將相所爲，趙公嘆賞其言，贊寧作欽傳，無慮千言，雖一報曉雞死，且書之，乃不及此何也。

大覺禪師璉公，以道德爲仁廟所敬，天下想望風采，其居處服玩，可以化寶坊也，而皆不爲，獨於都城之西，爲精舍，容百許人而已，棲賢舜老夫爲郡吏，臨以事，民其衣，走依璉，璉館於正寢，而自處偏室，執弟子禮甚恭，王公貴人來候者，皆佐之，璉具以實對，且曰：吾少嘗問道於舜，今不當以像服之殊，而二吾心也，聞者嘆服，仁廟知之，賜舜再落髮，仍居栖賢。

唐宣宗微時，武宗疾其賢，數欲殺之，官者仇公武保佑之，事迫公武，爲難髮，作比丘使逸游，故天下名山多所登賞，至杭州鹽官禪師安公者，江西馬祖之高弟，一見異之，待遇特厚，故宣宗

留鹽官最久，及卽位，思見之，而安公化去久矣，先是武宗盡毀吾教，至是復興之，雖法之隆替，系於時，然庸詎知其力非安公致之耶？仇公武之德，不愧漢邴吉，而新書略之，獨班班見於安禪師傳，爲可嘆也，嘗有贊其像者曰：已將世界等微塵，空裏浮華夢裏身，勿謂龍顏便分別，故應天眼識天人。

贊寧作大宋高僧傳，用十科爲品流，以義學冠之，已可笑，又列嵩頭嶺禪師爲苦行，智覺壽禪師爲與福，雲門大師僧中王也，與之同時，竟不載何也。

長沙岑禪師因僧亡，以手摩之曰：大衆此僧却真實，爲諸人提綱商量，會麼？乃有偈曰：目前無一法，當處亦無人，蕩蕩金剛體，非妄亦非真，又曰：不識金剛體，却喚作緣生，十方真寂滅，誰在復誰行，雪峰和尚亦因見亡僧，作偈曰：低頭不見地，仰面不見天，欲識金剛體，但看觸體前，玄沙曰：亡僧面前正是觸目菩提，萬里神光頂後相，有僧問法眼，如何是亡僧面前觸目菩提，答曰：是汝面前，又問遷化向什麼處去，答曰：亡僧幾曾遷化，進曰：爭奈即今何，答曰：汝不識亡僧，近代尊宿不復以此旨曉人，獨晦堂老師時一提，起作南禪師圓寂日偈曰：去年三月十有七，一夜春風撼籌室，三角麒麟入海中，空餘片月波心出，真不掩僞，曲不藏直，誰人爲和雪中吟，萬古知音是今日，又曰：昔人去時是今日，今日依前人不來，今既不來，昔不往，白雲流水空悠悠，誰云秤尺平，直中還有曲，誰云物理齊，種麻還得粟，可憐馳逐天下人，六六元來三十六，南禪師居積翠時，以佛手驢脚生緣語問學者，答者甚衆，南公冥目如入定，未嘗可否之，學者趨出，竟莫知其是非，故天下謂之三關語，晚年自作偈三首，今只記其二，曰：我手佛手齊舉，禪

流直下薦取不動干戈道處自然超佛越祖我脚驢脚並行步步皆契無生直待雲開日現此道方得從橫雲蓋智禪師嘗爲子言曰昔日再入黃檗至坊塘見一僧自山中來因問三關語兄弟近日如何商量僧曰有語甚妙可以見意我手何似佛手曰月下弄琵琶或曰遠道擊空鉢我脚何似驢脚曰鶯鷺立雪非同色或曰空山踏落花如何是汝生緣處曰某甲某處人時戲之曰前途有人問上座如何是佛手驢脚生緣意旨汝將遠道擊空鉢對之耶鶯鷺立雪非同色對之耶若俱將對則佛法混濫若揀擇對則機事偏枯其僧直視無所言吾謂曰雪峰道底

夾山會禪師初住京口竹林寺升座僧問如何是法身答曰法身無相如何是法眼答曰法眼無瑕時道吾笑於衆中會遙見因下座問曰上座適笑笑何事耶道吾曰笑和尚一同行脚踏複子不著所在會曰能爲我說否對曰我不會說秀州華亭有船子和尚可往見之會因散衆而往船子問曰大德近住何寺對曰寺則不住住則不寺船子曰不寺似箇什麼對曰不是目前法船子曰何處學得來對曰非耳目所到船子笑曰一句合頭語萬劫繫驢橛嗟乎於今叢林師授弟子例皆禁絕悟解推去玄妙唯要直問直答無則始終言無有則始終言有毫末差誤謂之狂解使船子聞之豈止萬劫繫驢橛而已哉由此觀之非特不善悟要亦不善疑也善疑者必思三十三祖授法之際悟道之緣其語言具在皆可以理究以智知獨江西石頭而下諸大宗師以機用應物觀其問答渾泮然令人坐睡其道異諸祖耶則嗣其法其不異耶則所言乃爾不同故知臨濟大師曰大凡舉論宗乘須一句中具三玄一玄中具三要有一玄有要者

蓋明此也不知者指爲門庭建立權時語言可悲也

天衣懷禪師說法於淮山三易法席學者追崇道顯著矣然猶未敢通名字于雪竇雪竇已奇之僧有誦其語至曰譬如鴈過長空影沈寒水鴈無遺蹤之意水無沈影之心因搏髀嘆息卽遣人慰之懷乃敢一通狀問起居而已鴻山真如禪師從真點胸游最久叢林戶知之然對客未嘗一言及其平昔見聞之事至圓寂日展畫像但薦茶果而已二大老識度甚遠退託涼薄以諷後學可謂善推尊其師者也

雲庵和尚居洞山時僧問華嚴論云以無明住地煩惱便爲一切諸佛不動智一切衆生皆自有之只爲智體無性無依不能自了會緣方了且無明住地煩惱如何便成諸佛不動智理極深玄絕難曉達雲庵曰此最分明易可了解時有童子方掃除呼之回首雲庵指曰不是不動智却問如何是汝佛性童子左右視憫然而去雲庵曰不是住地煩惱若能了之卽今成佛又嘗問講師曰火災起時山河大地皆被焚盡世間空虛是否對曰教有明文安有不是之理雲庵曰如許多灰燼將置何處講師舌大而乾笑曰不知雲庵亦大笑曰汝所講者紙上語耳其樂說無礙之辨答則出人意表問則學者喪氣蓋無師自然之智非世智可當真一代法施主也二祖大師服勤累年至於立雪斷臂而達磨僅以一言語之牛頭懶融枯禪窮山初無意於有聞而四祖自往說法祖師之於師弟子之際其必有旨耶

楊文公談苑記沙門寶誌銅牌記識未來事云有一真人在冀川開口張弓在左邊子子孫孫萬萬年江南中主名其子曰弘冀吳越錢鏐諸子皆連弘字期以應之而宣祖之諱正當之

也。又記周世宗悉毀銅像鑄錢，謂宰相曰：佛教以謂頭目髓腦有利於衆生，尚無所惜，寧復以銅像愛乎？銅州大悲甚靈，應當擊毀，以斧擊其胸，錢破之。太祖親見其事，後世宗北征病疽發胸間，咸謂其報應。太祖因信重釋教，歐陽文忠公歸田錄首記：太祖初幸相國寺，問僧錄贊寧：可拜佛否？寧奏曰：不拜，問其故。寧曰：見在佛不拜，過去佛因爲定制。二公所記皆有深意，決非苟然。予聞君子樂與人爲善，雖善不善謂之矜，文忠公每恨平心爲難，豈真然耶？唐僧元曉者，海東人，初航海而至，將訪道名山，獨行荒陬，夜宿塚間，渴甚，引手掬水于穴中，得泉甘涼，黎明視之，獨體也。大惡之，盡欲嘔去，忽猛省，嘆曰：心生則種種法生，心滅則獨體不二。如來大師曰：三界唯心，豈欺我哉！遂不復求師，即日還海東，疏華嚴經，大弘圓頓之教，予讀其傳，至此追念晉樂廣酒盃蛇影之事，作偈曰：夜塚獨體元是水，客盃弓影竟非蛇。箇中無地容生滅，笑把遺編篆縷斜。

棗栢大士，清涼國師，皆弘大經，造疏論宗於天下，然二公制行皆不同。棗栢則跣行不滯，超放自如，以事事無礙，行心清涼，則精嚴玉立，畏五色糞，以十願律身，評者多喜棗栢坦宕，笑清涼縛束，意非華嚴宗所宜爾也。予曰：是大不然，使棗栢薙髮作比丘，未必不爲清涼之行，蓋此經以遇緣卽宗，合法非如餘經有局量也。

晉鳩摩羅什兒時，隨母至沙勒，頂戴佛鉢，私念鉢形甚大，何其輕耶？卽重失聲下之，母問其故，對曰：我心有分別，故鉢有輕重耳。予以是知一切諸法隨念而至，念未生時量同太虛，然則卽今見行分別者，萬類紛然，何故靈驗不等？曰：是皆亂想虛妄，如困夢中事，心力昧畧，微劣故也。

嗟乎人莫不有忠孝之心也，而王祥臥冰，則魚躍，耿恭祝井，則泉何冽也，蓋其養之之專，故靈驗之應速如影響。

菩提達磨，初自梁之魏，經行於嵩山之下，倚杖於少林，面壁燕坐而已，非習禪也。久之，人莫測其故，因以達磨爲習禪。夫禪那諸行之一耳，何足以盡聖人，而當時之人以之爲史者，又從而傳。茲習禪之列，使與枯木死灰之徒爲伍，雖然聖人非止於禪那，而亦不違禪那，如易出乎陰陽而亦不違乎陰陽。

舊說四祖大師居破頭山，山中有無名老僧，唯植松，人呼爲栽松道者。嘗請於祖曰：法道可得聞乎？祖曰：汝已老，脫有聞，其能廣化耶？儻能再來，吾尙可遲汝。乃去，行水邊，見女子浣衣，揖曰：寄宿得否？女曰：我有父兄，可往求之。曰：諾。我卽敢行，女首肯之。老僧回策而去。女周氏，季子也。歸輒孕，父母大惡，逐之。女無所歸，日庸紡里中。夕於衆館之下，已而生一子，以爲不祥，弃水中。明日見之，泝流而上，氣體鮮明，大驚，遂舉之。成童，隨母乞食。邑人呼爲無姓兒。四祖見於黃梅道中，戲問之曰：汝何姓？曰：姓固，有但非常姓。祖曰：何姓？曰：是佛性。祖曰：汝乃無姓耶？曰：姓空。故無祖化其母，使出家。時七歲，衆館今爲寺，號佛母。而周氏尤盛，去破頭山，佇望間，道者肉身尙在。黃梅東禪有佛母塚，民塔其上，傳燈錄定祖圖，記：忍大師姓周氏者，從母姓也。大宋高僧傳，乃曰：釋弘忍，姓周氏，其母始娠，移月光照庭室，終夕若晝，異香襲人，舉家欣駭。安知衆館本社屋生時，置水中乎？又曰：其父偏愛，因令誦書，不知何從得此語，其叙事妄誕。大率類此。開元中文學閭丘均爲塔碑，徒文而已。會昌毀廢，唐末烽火，更遭蹂踐，愈不可考。知其書謬者，母氏周

而曰有父故也。無爲子嘗贊其像曰：人就無父，祖獨有母，其母爲誰？周氏季女，濁港滔滔入大江門前，依舊長安路。

斷際禪師初行，乞於雒京，吟添鉢聲。一嫗出棘扉間曰：太無厭足生。斷際曰：汝猶未施，反責無厭何耶？嫗笑掩扉，斷際異之。與語多所發藥，辭去。嫗曰：可往南昌見馬大師。斷際至江西而大師已化去，聞塔在石門，遂往禮塔。時大智禪師方結廬塔傍，因叙其遠來之意，願聞平昔得力言句。大智舉一喝，三日耳聾之語示之。斷際吐舌大驚，相從甚久。暮年始移居新吳百丈山，考其時嫗死久矣。而大宋高僧傳曰：嫗祝斷際見百丈非也。

雲居佛印禪師曰：雲門和尚說法如雲，絕不喜人記錄其語。見必罵逐曰：汝口不用反記我語。佗時定販賣我去，今對機室中錄，皆香林明教以紙爲衣，隨所聞隨卽書之。後世學者漁獵文字語言中，正如吹網欲滿，非愚卽狂，可嘆也。

玄沙備禪師薪於山中，傍僧呼曰：和尚看虎。玄沙見虎，顧僧曰：是爾靈潤法師山行，野燒迅飛而來，同游者皆避之。潤安步如常，曰：心外無火，火實自心。謂火可逃，無由免火。火至而滅，嚴陽尊者單丁住山，蛇虎就手而食。歸宗常公刈草見蛇，變之。傍僧曰：久聞歸宗，今日乃見一龜行沙門。常曰：爾龜我龜耶？吾聞親近般若，若有四種驗心，謂就事就理入，就事理出，就事理之外，宗門又有四藏鋒之用，親近以自治，藏鋒之用以治物。

荊州天皇寺道悟禪師，如傳燈錄所載則曰：道悟得法於石頭，所居寺曰天皇。婺州東陽人，姓張氏，年十四出家，依明州大德披剃。年二十五，杭州竹林寺受具，首謁徑山國一禪師，服勤五

年，大歷中抵鍾陵，謁馬大師。經二夏，乃造石頭。元和丁亥四月，示疾，壽六十。臘三十五，及觀達觀禪師所集五家宗派，則曰：道悟嗣馬祖，引唐丘玄素所撰碑文幾千言，其略曰：師號道悟，洛宮人，姓崔氏，卽子王後胤也。年十五於長沙寺禮曇鸞律師出家，二十三詣嵩山律德得尸羅。謁石頭，扣寂二年，無所契悟，乃入長安，親忠國師。三十四與侍者應真南還，謁馬大師，大悟於言下。祝曰：他日莫離舊處，故復還洛宮。元和十三年戊戌歲四月初，示疾，十三日歸寂，壽八十二。臘六十三，考其傳正如兩人。然玄素所載曰：有傳法一人，崇信住澧州龍潭，南嶽讓禪師碑唐聞人歸登撰，列法孫數人于後，有道悟名。圭峰答裴相國宗趣狀，列馬祖之嗣六人，首曰：江陵道悟。其下注曰：兼稟徑山。今妄以雲門臨濟二宗競者可發一笑。

草堂禪師棧要曰：心體靈知不昧，如一摩尼珠，圓照空淨，都無差別之相。以體明故，對物時能現一切色相，色自差而珠無變易。如珠現黑時，人以珠爲黑者，非見珠也。離黑竟珠者，亦非見珠也。以明黑都無爲珠者，亦非見珠也。馬祖說法卽妄明真，正如其以黑爲珠，神秀說法令妄盡方見覺性者，離妄求真，正如離黑竟珠。牛頭說法一切如夢，本來無事，真妄俱無，正如明黑都無爲珠。獨荷澤於空相處，指示知見，了了常知，正如正見珠體，不顯衆色也。密以馬祖之道如珠之黑，是大不然。卽妄明真，方便語耳。略知教乘者皆了之。豈馬祖應聖師遠識爲震且法主，出其門下者，如南泉百丈，大達歸宗之徒，皆博綜三藏，熟爛真妄之論，爭服膺師尊之，而其道乃止於如珠之黑而已哉。又以牛頭之道一切如夢，真妄俱無者，是大不然。觀其作心王銘曰：前際如空，知處迷宗，分明照境，隨照冥濛，從橫無照，最微最妙，知法無知，無知知要，一一皆治。

知見之病，而荷澤公然立知見，優劣可見，而謂其道如明黑都無爲珠者，豈不重欺吾人哉。至如北秀之道，頓漸之理，三尺童子知之，所論當論其用心，秀公爲黃梅上首，頓宗直指，從曰：「機器不逮，然亦既聞飽參矣，豈自甘爲漸宗徒耶？」蓋祖道于時，疑信半天下，不有漸何以顯頓哉。至於紛爭者，皆兩宗之徒，非秀心也，便謂其道止如是，恐非通論。吾聞大聖應世成就法道，其權非一，有顯權有冥權，冥權卽爲異道，爲非道，顯權則爲親友，爲知識，庸詎知秀公非冥權也哉。

唐僧復禮有法辯，當時流輩推尊之，作真妄偈問天下學者曰：「真法性本淨，妄念何由起。從真有妄生，此妄何所止。無初卽無末，有終應有始。無始而無終，長懷懣茲理。願爲開玄妙，析之出生死。清涼國師答曰：「迷真妄念生，悟真妄卽止。能迷非所迷，安得長相似。從來未曾悟，故說妄無始。知妄本自真，方是恒妙理。分別心未忘，何由出生死。圭峰禪師答曰：「本淨本不覺，由斯妄念起。知真妄卽空，知空妄卽止。止處名有終，迷時號無始。因緣如幻夢，何終復何始。此是衆生源，窮之出生死。又曰：「人多謂真能生妄，故妄不窮盡，爲決此理。重答前偈曰：「不是真生妄，妄迷真而起。悟妄本自真，知真妄卽止。妄止似終末，悟來似初始。迷悟性皆空，皆空無終始。生死由此迷，達此出生死。予味二老所答之辭，皆未副復禮問意。彼問真法本淨，妄念何由而起，但曰：「迷真不覺，則孰不能答耶。因爲明其意，作偈曰：「真法本無性，隨緣染淨起。不了號無明，了之卽佛智。無明全妄情，知覺全真理。當念絕古今，底處尋終始。本自離言詮，分別卽生死。」雲庵和尚嘗曰：「諸佛隨宜說法，意趣難解，如起信曰：「若有衆生來求法者，隨己能解方便爲說。」

不應貪著名利恭敬，唯念自利利他，回向菩提。故者爲弘法太峻者，言之也。圓覺曰：「末世衆生欲修行者，應當盡命供養善友，事善知識，彼善知識欲來親近，應斷瞋恨，現逆順境，猶如虛空者，爲求道不精進者，言之也。雖然爲弟子者，能不忘精進，則爲師者不害於太峻，方今學者未能盡致敬之禮，而責以慳法，則過矣。侍者進曰：「然則三世如來法施之式，可得聞乎？」曰：「法華曰：「於一切衆生平等說法，以順法故，不多不少，乃至深愛法者，亦不爲多說，此佛之遺意也。」達觀禪師初出東吳，年纔十六七，泊舟秦淮，宿奉先寺，時寺皆講人，見其禪者，又少之不爲禮，穎讓曰：「佛記比丘惡客比丘至者，法將滅，爾輩安爲之耶？」有答者曰：「上人卽主此，敬客未晚。」穎笑曰：「我願未暇居此，然能易道行者，使飯十方僧報佛恩耳。」時內翰葉公清臣守金陵，穎袖書謁之，葉公曰：「昨晚至此，何以知建寺始末之詳如此乎？」對曰：「夜閱舊碑知之，因極言律居之弊，敗傷風化，葉公大奇之，奉先緣是乃爲禪林，吳中講師多譏諸祖傳法，倘無譯人，禪者與之辨失其真，適足以重其謗，穎論之曰：「此達磨爲二祖言者也，何須譯人耶？」如梁武初見之卽問：「如何是聖諦第一義？」答曰：「廓然無聖。」進曰：「對朕者誰？」又曰：「不識。」使達磨不通方言，則何於是時，便能爾耶？講師不敢復有辭，其挫服魔外之氣，無師自然之智，發自妙齡，而遇事則應無所疑畏，天性則然後爲石門聰之嗣，首山嫡孫也。

涅槃經迦葉菩薩白佛言：「世尊如佛所說，諸佛世尊有秘密藏，是義不然，何以故？諸佛世尊唯有密語，無密藏，譬如幻主機關木人，人雖親見屈伸俯仰，莫知其內而使之然，佛法不爾，咸令衆生悉得知見，云何當言佛世尊有秘密藏？」佛讚迦葉善哉善哉，善男子，如汝所言，如來實無

秘密之藏，何以故如秋滿月處空，顯露清淨無翳，人皆觀見，如來之言亦復如是，開發顯露清淨無翳，愚人不解謂之秘藏，智者了達則不名藏，又曰：又無語者，猶如嬰兒言語未了，雖復有語實亦無語，如來亦爾，語未了者即秘密之言，雖有所說，衆生不解，故名無語，故石頭曰：乘言須會宗，勿自立規矩，藥山曰：更須自看，不得絕却言語，我今爲汝說者，箇語顯無語底，長慶曰：二十八代祖師皆說傳心，且不說傳語，且道心作麼生傳，若也無言啓蒙，何名達者，雲門曰：此事若在言語上，三乘十二分教豈是無說，因什麼道教外別傳，若從學解機智得，只如十地聖人，說法如雲如雨，猶被佛呵見性，如隔羅縠，以此故知，一切有心天地懸殊，雖然如是，若是得底人，道火何曾燒着口耶，予每曰：衲子於此徹去，方知諸佛無法可說，而證言說法身，如何是言說法身，自答曰：斷頭船子下揚州。

王文公曰：佛與比丘辰巳間應供，名爲齋者，與衆生接不可不齋，又以佛性故等視衆生，而以交神之道見之，故首楞嚴曰：嚴整威儀，肅恭齋法，又曰：梵語三昧，此云正定，正定中所受境界謂之正受，異於無明所緣受，故圓覺曰：三昧正受，釋者謂：梵語三昧，此云正受，而寶積云：三昧及正受，則此釋非也。

曹溪大師將入涅槃，門人行瑤超俗法海等問：和尚法何所付，曹溪曰：付囑者二十年外於此地弘揚，又問：誰人答曰：若欲知者，大庾嶺上以網取之，圭峰欲立荷澤爲正傳的付，乃文釋之曰：嶺者高也，荷澤姓高，故密示之耳，欲抑讓公爲旁出，則曰：讓則曹溪門下旁出之汎徒，此類數可千餘，嗚呼逐鹿者不見山，攫金者不見人，殆非虛語，方密公所見唯荷澤，故諸師不問是

非例皆毀之，如大庾嶺上以網取之之語，是大師末後全提妙旨，而輒以意求，讓公僧中之王，而謂之汎徒，詳味密公之意，可以發千載之一笑。

老安國師有言曰：金剛經云：應無所住而生其心，無所住者，不住色，不住聲，不住迷，不住悟，不住體，不住用，而生其心者，即一切法而顯一心，若住善生心，即善現，若住惡生心，即惡現，本心即隱沒，若無所住，十方世界唯是一心，信知曹溪大師云：風幡不動是心動，脩山主有偈曰：風動心搖樹，雲生性起塵，若明今日事，暗却本來人。

有僧問晦堂老人曰：五祖前身栽松道者，嘗託周氏女而生，彼三緣不和合，何從而生耶，老人笑曰：汝聞樹提伽生火中，伊尹生於空桑乎，對曰：聞之，汝於彼二人，乃不疑其生不由三緣，而獨疑五祖耶，方今士大夫之留意宗乘者，皆以此爲疑，及聞此語，莫不釋然，予以謂老人所示未欲極教乘之本意，第就其機息狂情耳，馬大師曰：佛是能仁，有智慧善機宜，能破一切衆生疑網，出離有無等縛，其斯之謂歟。

宗鏡錄曰：雖然心即是業，業即是心，既從心生，還從心受，如何現今消其妄業報，答曰：但了無作自然業空，所以云：若了無作惡業，一生成佛，又曰：雖有作業而無作者，即是如來秘密之教，又凡作業悉是自心橫計外法，還自對治妄取成業，若了心不取境，境自不生，無法牽情，云何成業，予嘗作偈釋其旨曰：舉手炷香而供養佛，其心自知，應念獲福，舉手操刀恣行殺戮，其心自知，死入地獄，或殺或供，一手之功，云何業報，罪福不同，皆自橫計，有如是事，是故從來，枉沈生死，雷長芭蕉，鐵轉磁石，俱無作者，而有是力，心不取境，境亦自寂，故如來藏，不許有識。

維摩經曰：入不思議境，如借座燈王，取飯香土，促演其日劫大小之相容，可以神會妙旨。至曰：一切聲聞，聞是不可思議解脫法門，皆應號泣聲震三千大千世界，極難解通。首楞嚴曰：一人發真歸源，十方虛空悉皆消殞。見道者妄盡覺明，自見空殞可也。而下文乃又曰：一切魔王見其宮殿無故拆裂，爲難和會。古諸法師俱有注釋，校其所論未容無說。

臨濟大師建立四賓主，今徒閱其語，竟莫能分辨之。知之者未必真，不知者以爲苟然。又有四喝，一喝如金剛王寶劍，一喝如踞地師子，一喝如探竿影草。有時一喝不作，一喝用。如踞地師子探竿影草，後學往往不省其何等語，安能識其意耶？不過曰：此古人一期建立之辭耳。何足問哉！然則臨濟之言，遂爲虛語也。今係其偈於此曰：金剛王劍，觀露堂堂，才涉唇吻，卽犯鋒鋦。踞地師子，本無窠臼，顧佇之間，卽成滲漏。探竿影草，莫入陰界，一點不來，賊身自敗。有時一喝，不作喝用，佛法大有，只是牙痛。

予游長沙，至鹿苑，見岑禪師畫像，想見其爲人，作岑大蟲贊，并序曰：如來世尊語阿難曰：汝元不知一切浮塵，諸幻化相，當處出生，隨處滅盡。幻妄稱相，其性眞爲妙覺明體。龍勝菩薩曰：諸法不自生，亦不從他生，不共不無因，是故說無生。以佛祖之辯談心法之妙，其清淨顯露如掌中見物，無可疑者。而末世衆生，卒不明了者，蓋其迷妄之極，非其所聞之習故也。禪師憫之，故於所習之境，譬之曰：若心是生，則夢幻空華，亦應是生。若身是生，則山河大地，森羅萬象，亦應是生。大哉言乎！與首楞嚴中觀論相終始也。禪師大寂之孫，南泉之子，趙州之兄，開法於長沙之鹿苑。當時衲子，倔強如仰山者，猶下之，而呼以爲岑大蟲。云爲之贊曰：長沙大蟲，聲威甚重。

獨眠空林，百獸震恐。寂子兒癡，見不知畏，引手捋鬚，幾缺其耳。大空小空，是虎是爾，如備與覺，可撩其尾。嗟今衲子，眼如斐旻，但見其彪，安識虎眞。我拜公像，非存非沒，百尺竿頭，行塵勃勃。白雲端禪師曰：天下叢林之興，大智禪師力也。祖堂當設達磨初祖之像於其中，大智禪師像西向，開山尊宿像東向，得其宜也。不當止設開山尊宿而略其祖宗耳。雲居祐禪師曰：吾觀諸方長老示滅，必塔其骸，山川有限而人死無窮，百千年之下，塔將無所容。於是於宏覺塔之東，作卯塔，曰：凡住持者，自非生身不壞，火浴雨舍利者，皆以骨石填於此。其西又作卯塔，曰：凡衆僧化皆藏骨石於此，謂之三塔。二大老識度高遠，可爲後世法。然孤論難持，犯衆難成，卒必有賞音者，吾將觀焉。

東京覺嚴寺有誡法師講華嚴經，歷席最久，學者依以揚聲，其爲人純至少緣飾，高行遠識，近世講人莫有居其右者。元祐初，高麗僧統航海至上表，乞傳持賢首宗教歸本國，流通奉聖旨。下兩街舉，可以授法者，有司以師爲宜，上表辭勉曰：臣雖刻意講學，識趣淺陋，特以年運已往，妄爲學者所推，今異國名僧航海問道，宜得高識博聞者爲之師，竊見杭州慧因院僧道源精練教乘，旁通外學，舉以自代，實允公議。奉聖旨依所乞，勅差朝奉郎揚傑館伴至錢塘受法。予建中靖國之初，故人處獲洞山初禪師語一編，福嚴良雅所集，其語言宏妙，眞法窟爪牙。大略曰：語中有語，名爲死句，語中無語，名爲活句。未達其源者，落在第八魔界中。又曰：言無展事，語不投機，乘言者喪，滯句者迷。於此四句話中，見得分明也。作箇脫洒衲僧，根椽片瓦，粥飯因緣，堪與人天爲善知識。於此不明，終成莽鹵。雲庵平生說法，多稱初悟門度越格量，偶閱舊記，

見其寄道友偈并序曰：昔洞山參雲門，悟旨於言下，入佛正知見，所有炙脂帽子、鶻臭布衫皆脫去，以四句偈明其悟，蓋得展事自在之用，投機善巧之風，故其應機接物，不乘言不滯句，如師子王得大自在於哮吼時，百獸震駭，蓋法王法如是故也。又世所傳見雲門者，皆坐脫立亡，何哉？以無佛法知見故也。因隨句釋以奉寄曰：大用現前，能展事，春來何處不開花？放伊三頓參堂去。四海當知共一家。又曰：千差萬別解投機，明眼宗師自在時。北斗藏身雖有語，出群消息少人知。又曰：游山玩水便乘言，自己商量恕不偏。鶻臭布衫脫未得，且隨風俗度流年。又曰：滯句乘言是瞽聵，參禪學道自無功。悟來不費纖毫力，火裏蠅螬吞大蟲。

宗道者不知何許人，往來舒蘄間，多留於投子，性嗜酒，無日不醉，村民愛敬之，每餉以醇醪，居一日方入浴，聞有尋宗者，度其必送，棹至裸而出，得酒徑去，人皆大笑，而宗傲然不作，嘗散衣下山，有逆而問者曰：如何？是道者家風，對曰：袈裟裏草鞋，問意旨如何？曰：赤脚下桐城，陳退夫初赴省韓，過宗戲問曰：此行欲作狀元得否？宗熟視曰：無時即得，莫測其言也。而退夫果以第三名上第，時彥作魁，方悟無時之語，宗見雪竇而超放自如，言法華之流也。

雪竇初在大陽立禪師會，中典客，與僧夜語，雖黃古今，至趙州栢樹子，因緣爭辨不已，有行者立其旁，失笑而去，客退，雪竇呼至數之曰：對賓客敢爾耶？對曰：知客有定古今之辯，無定古今之眼，故敢笑，且趙州意汝作麼生會，因以偈對曰：一兔橫身當古路，蒼鷹繞見便生擒。後來獵犬無靈性，空向枯椿舊處尋。雪竇大驚，乃與結友，或云：即承天宗禪師也，予謂：聞此可以想見當時法席之盛也。

晦堂老人嘗以小疾醫寓潭江，轉運判官夏倚公立往見之，因劇談妙道，至會萬物爲自己，及情與無情共一體，時有犬臥香案下，以壓尺擊，又擊香案曰：犬有情，即去，香案無情，自住，情與無情如何得成一體去？夏不能答，晦堂曰：纔入思惟，便成剎法，何曾會物爲己耶？老黃龍入滅，道俗請繼主道場，法席之盛，初不減平時，然性真率，不樂從事，五求解去，乃得謝事閑居，而學者益親，謝景溫師直守潭州，虛大瀉以致之，三辭弗往，又囑江西彭汝礪器資，請所以不應長沙之意，晦堂曰：願見謝公，不願領大瀉也。馬祖百丈已前，無住持事，道人相求於空閑寂處，之濱而已，其後雖有住持，王臣尊禮爲人天師，今則不然，掛名官府，如有戶籍之民，直遣伍伯追呼耳，豈可復爲也？器資以斯言反命，師直由是致書願得一見，不敢以住持相屈，遂往長沙，蓋於四方公卿，意合則千里應之，不合則數舍亦不往也。開法黃龍十二年，退居庵頭二十餘年，天下指晦堂爲道之所在，蓋末世宗師之典刑也。

圓通祖印訥禪師告老於郡，乞請承天端禪師主法席，郡可其請，端欣然而來，自以少荷大法，前輩讓善叢林，責己甚重，故敬嚴臨衆，以公滅私，於是宗風大振，未幾年，訥公厭闕寂，郡守至，自陳客情，太守惻然，目端端笑，唯唯而已，明日登座曰：昔日大法眼禪師有偈曰：難難難，是遣情難，情盡圓明一顆寒，方便遣情猶不是，更除方便太無端，大衆且道，情作麼生遣？喝一喝下座，包腰而去，一衆大驚，遮留之不可，叢林至今敬畏之。

南禪師住廬山，歸宗火一夕而燼，大衆譁譟動山谷，而黃龍安坐如平時，桂林僧洪準欲掖之而走，顧見叱之，準曰：和尚從厭世間，慈明法道何所賴耶？因徐整衣起，而火已及座榻矣，坐是